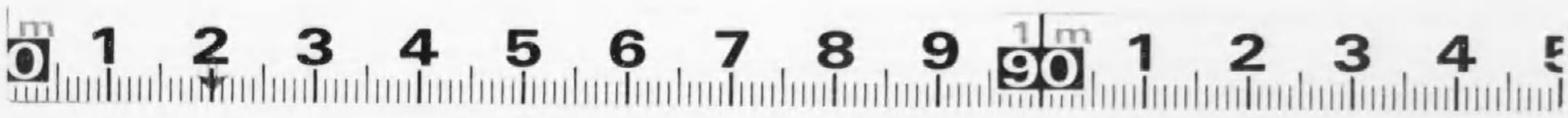
515
403



印度の不安」の眞相

衣斐鈔吉著

大正
13.10.11
内

175-403

自序

ヴエダの國、ウパニシヤツトの國、釋迦生れアクバール育ちし國、ヒマラヤの雪山を負ふてガンヂスの水光る閻浮の洲の印度には人類形而上文明の精華と三億二千萬の國民とが存在する。此の歴史と大衆とを有して小許の兵力を後ろだてとする英人の政治に服從して居る有樣は、確に現世紀の奇蹟である。英人は之を以て「英國統治(ブリチツシ ラージ)」は世界無比だと誇稱して居る。第三者として我々は、英人が異民族を征服し、帝國を建設し、又之を統治して行く才幹の偉大なるを認容すると同時に、現代印度人が又餘りに國家組織の能力に缺けて居るに驚かざるを得ぬ。死の如き思想に泥み、宗旨と宗旨と相ひきしり、姓階と姓階と相ひ背き、全一としての國民的自覺を忘れ、英人が膏血を搾るに任せて居る心狀は、到底吾人の了解し得ざる所である。併し死水にも波は動く。ヴエダの文明に流れて渴きぬ一道の生氣に吹かれて、死水の印度は活ばつはつ地の波を擧げた。印度は實に蘇らんとして居る。此の氣運を背景とし、妖婦の毒に死した高僧、母國の爲めに鐵火の危地を踏んだ志士仁人、愛の力に依つて革命の波浪を揚げた聖雄等の傳記を物語に編み、「甦

らんとする苦み」と題して公刊したのは昨年六月のことであつた。同じ印度の國民運動を專ら政治經濟の方面より觀察し、正史の體に復して批判したものがこの著書である。前のは思想を基調として情緒につゞり、今のは理數に立論して批評を旨として居る。前のは個性を述べることに依つて全般を現はすことに努め、後のは全般を明にして個性を散點せしめてある。姉妹篇では無く、姉弟篇である。

千七百五十七年のプラッシイの戰で、クライヴの英軍が佛蘭西と印度との聯合軍を擊破して印度に於ける英人の覇權が確立された。其時以後、金銀寶玉の海と言はれて居た印度の財寶は洪水の樣に英本國へ流れ込んだ。文豪マコーレーは、プラッシイ役後「寶の雨が降つた」と形容して居る。英人は此の印度から奪ふた財寶を資本とし、此の資本に依りワット以下の發明を產業の實際に應用して產業革命を完成した。そして英人は產業革命の結果たる大工場組織に依る多額生產品を潮の如く印度に仕向けて、印度從來の工業を殆ど根本的に傾覆した。此の二重の掠奪に依つて貧血し盡きた印度は、更に英人の政治的暴戾の爲めに終末的けいれんを起した。プラッシイの役後丁度百年目に當る千八百五十七年の土兵反亂(ミューチニイ)が夫れである。反亂が鎭壓された結果、印度は東印度會社の手を離れて英國王の直轄に移され、ヴイクトーリア女王は同時に印度皇帝の位に卽かれた。英人は此の去勢されたる印度、假死せる如き印度を治めるに最も巧妙な統治組織を以てした。之が所謂「英國統治(ブリチツシ・ラージ)」なるものである。爾來約半世紀間、印度は近古未曾有の治平裡に過ぎた。英人は之を「英國統治下の和平(パックス・ブリタンニカ)」(Pax Britannica)と云ひ、之を齎らした「英國統治(ブリチツシ・ラージ)」(British Raj)は世界無比だと誇稱した。併し、歷史の眼は此の英人の自贊を批判無しに許容すまい。何となれば印度の和平は死水の靜寂の如きものであり、而も其の底には不安の氣が血泥の樣に漂ふて居たからである。

英人は此の奪略政策を遂行するに印度人を其の用具に使つた。之が爲めに彼等は此等の印度人に英人の言葉、商取引の規則習慣、白人優越の觀念等を知らしめた。印度人は英人の新敎育に附隨して英國の憲法史を學び、又代議政體の何たるやを知つた。彼等は英人からばく大な俸給と致富の機會と與へられて一かどの資本家と爲るに及び、一の團體を組織して印度に代議政體の樹立を要求するに到つた。之が現在國民運動の主潮を成して居る印度國民議會(インヂアンナショナル・コンゲレス)の起源である。然るに英國風の敎育が廣く普及し、之を受ける印度の子弟が激增した結果、彼等は最早其の先輩達の

如く幸福な地位に就き得無く爲つたのみならず、其の多數は非常な逆境に沈む有樣と爲つた。境遇は彼等をして其の思想を變ぜしめた。前には大英帝國内の印度の政治に參加する爲めに代議政體の樹立を要望した彼等は、後には國民としての絶對自由にあこがれるに至つた。國民議會のブルジュア達が、決議や建議を繰り返へして政治的並に經濟的地位の向上を期するをちょう笑し、自由獨立の思想を直ちに鐵火の行動(Karma)に飜譯した。ロシアに對する日本の勝利に依り、同じく有色人種として國民的自覺の念に燃えて居る際、ベンガル分割問題は彼等の激こうをして其の頂點に達せしめ、陰謀、流血、たい捕、復しうの慘事は殆ど夜を日に繼いで起る有樣であつた。試に印度政廳の發表發賣にかゝる「反亂調査委員報告書」(Report of Sedition Committee)を讀むならば、千九百四年のベンガル分割當時に於ける秘密結社の活動、歐洲大戰中獨逸參謀本部と通謀した印度獨立黨の計畫等に關聯して、幾百回と無き事件が愛國志士の碧血に彩られて居るを觀るであらう。流石剛腹なジョン・ブルも、此の事實の反證に「英國統治下の和平」の自負を捨て、「印度の不安」(Indian Unrest)を以て新な標語とするに至つた。

「暴力は地上のものであり、愛は神の力である」「汝の敵を愛せよ、愛の力を以て世界を征服せよ」。清きこと白鷺の如きガンヂーがガンヂスの岸に立つて愛の力を叫んだ時に印度の民衆は宛も草木の如くなびいた。エス・キリストがヘルモン山上の白雲を指しながらナザレの村人に說いた如く、ヒマラヤの雪を仰いでガンヂーは「眞理の正觀」(Satyagraha)をヒンヅスタン三億の同胞に敎へた。此のガンヂーの主張と、印度の自由を鐵血の手段に依り得んとしたチラークやクマール・ゴーシュ等の思想とは、一見全く別個のものゝ如く感ぜられる。併しながら、共に印度の國民主義者であり、ヴエダ(Veda)の信奉者たるに於て同一型體に屬して居る。さればこそガンヂーの徒弟たる民衆は、ガンヂーズムの消極抵抗が高潮に及んだ時、暴力の直接行動に移らざるを得なかつた。ただ、ガンヂーの追隨者には、從來の印度國民運動者に觀たことの無い動機が潛んで居た。夫れが何であるかと言へば、一面には印度に於ける工場工業の發達より、他面には印度農民の疲弊より來る階級的抗爭の念である。玆に「印度の不安」は橫に廣がる國際的觀念の外に、縱に貫く「社會的不安」なる新な意義を加味せらるるに至つた。世界大戰の產物たるプロレタリアの自覺は、こゝにも其のほうはいたる波動を及ぼしたのである。斯くて印度は相ひ交流する二樣の不安の渦に卷き込まれた。併し此の社會的不安は、三千年來印度國民を畜生道に等しき

苦惱に繋いで居る姓階のかせから離脱せしめる効果を伴うて居る點に於て重大な意義を有する。釋尊佛陀が、あの深遠な思想と崇高な德望を以てしても解くことの出來無かつた姓階のかせ、アクバール大皇帝の威武を以てしても斷つことの出來無かつた姓階の繋縛は、現代工業の波動を受けて經濟生活の一角から崩れつゝある。全一としての印度國民性の打成に對する千古の障がいである姓階の制が、社會的不安の原因たる產業組織の動搖に依つて除去されるならば、今日の社會的不安の裡には印度國民性の統合と、及び之が必然の結果たる印度復活の氣運とがみなぎるを覺るであらう。

春廻り來てはヒマラヤの麓に雪融けて雫が頻りに落ちる。あしたの旭日には黃金の玉と光り、ゆふべの月を宿しては白銀の露と散る。個性のひらめきだ。岩を傳はり、落葉をくゞり、清水と湧き出て谷に落ち、瀨と爲り川と爲り、百水合してガンヂスの大江と爲る。興廢四千年、流れ流れて止む無き印度國民生活の流は此の大江の水と共に逝く。釋迦逝き、アソカ逝き、タメルレーン逝き、アクバール逝き、モーガル帝國衰へてマーラッタ興り、英人又之に代る。治亂は波の如く起伏して久遠の海に達つて居る。「英國統治下の和平」(パックス・ブリタニカ)か「印度の不安」(インディアン・アンレスト)か。大英帝國の明日と共に、吾人はたゞ之を歷史の運命に任せやう。

大正十三年二月六日

著者識す

參考書

本書に引證した事實及び數字は主として左の書に據る。

I. Young India. ..... by Lajpat Rai.

II. England's Debts to India. ..... by Lajpat Rai.

III. A History of the Indian Nationalist Movement. ..... by Verney Lovett.

IV. India in Transition. ..... by Manabendra Nath Roy.

V. What do we want. ..... by Manabendra Nath Roy.

VI. Report of Indian National Congress. (1920)

VII. India in 1920.
VIII. India in 1921. } ..... Year Books of the Government of India.
IX. India in 1922.

X. A Vision of India. ..... by Sidney Low.

XI. Essay on Clive. .....by Macaulay.
XII. Gandhi's Speaches and Letters. ..... by Natessan Company.
XIII. The New World of Islam. .....by Lothrop Stoddard.
XIV. The Report of Sedition Committee. .....by Rowlatt.
XV. The Arya Samaj.....by Lajpat Rai.
XVI. Bombay Cronicle.

「印度の不安」の眞相

目次

第一章 印度國民性の歴史的觀察……一—三
第二章 英人印度侵略史觀……三—四〇
第三章 英國統治 (British Raj) と印度國民運動の由來……四一—六〇
第四章 「英國統治下の和平」(Pax Britannica) より「印度の不安」(Indian Unrest) へ……六一—八一
第五章 印度國民運動に於ける印度教徒と回教徒との關係……八二—一〇八
第六章 スワラジ (Swaraj) スワデシ (Swadeshi) 及びサチアグラハ (Satyagraha) ……一〇九—一四六

目次

第七章　印度に於ける現代工業の勃興と英國の對印度政策……一四七―一六三
第八章　印度國民運動に交錯する社會的不安……一六五―一九五
結論　自治か獨立か……一九七―二〇九

「印度の不安」の眞相

法學士　衣斐釘吉著

第一章、印度國民性の歴史的觀察

千五百年代のことと言はれて居る。彼等はヒンヅクーシュ山脈の方面から下りて來てインダス河の流域――五個の大支流を有する爲め雅名を「五ツ川」(Five Rivers)と呼ばれる今日のパンジャブ地方に定住して耕作牧畜を業とした。然るに白せき隆準にして智能の發達して居た彼等と、體小さく色黑く、且つ無智蒙まいな先住民族との間には人種的優劣の差が甚しかつた爲め、アリアン民族は漸次に先住民族たるドラヴィヂアン(Dravidian)を驅逐してインダスの流域からガン

デスの流域に繁殖し、次には南方の砂原地方即ち今日のラジプタナ州から更に南のデッカン地方にまで發展した。斯くして彼等は長い年月の間に印度半島の主人に爲つたとは云へ、それは彼等の優秀な智力及び體力の結果であつて、數に於てはアリアンはドラヴィディアンに對して殆ど比較にならぬ程の少數であつた。それで彼等は政治上優越の地位と及び人種の純潔を保つ手段として今日の所謂姓階(カスト)(Caste)なる階級制度を開いた。此の Caste と云ふ言葉はポルトガル語の樣子、性質、風、種族等の義であつて、印度に來たポルトガル人が此の國の特種の風俗である宗教的階級制度を見て斯く呼んだのに基因して居る。歐米人は此の Caste を「色線」(Colour Line)の義に解して居る。梵語ではヴァルナ(Varna)と云ひ、色即ち人種の肌の別を意味し現代印度語のジャーチ(Jahti)即ち種族又は國民の義が之に相當する。姓階は第一はブラーマン(Brahman)即ち僧侶、第二クシャトリア(Kshatrias)即ち王族及び武士、第三ヴァイシャ(Vaishas)即ち商人第四スドラ(Sudra)即ち奴れいの四に大別されて居る。右の中、ブラーマン、クシャトリア又びヴァイシャの三姓階はアリアン民族に屬し、最後のスドラは先住民族即ちドラヴィディアン(Dravidian)の中でアリアンの文化に浴したものである。其の他のドラヴィディアンは姓階以外に置いて人間を以て遇しないことゝし、之をパリア(Pariah)と呼んで、姓階内の人には手を觸れることも近寄ることも許されない。抑も印度アリアン文明の精華であると共に印度教の經典であるヴェダ(Veda)の教は、人間の門閥に因る先天的優劣を認めず、却つて各人の能力を以てする地位の向上を許して居るに拘らず、其後ブラーマンの作つた宗教に依ると、ブラーマン自身の姓階は最高實在の神たる梵天(ブラーマ)の口から生れ、他の姓階は股や足などから生れたものであつて、從つて彼等の間には越ゆることの出來ぬ先天的差別が嚴存すると云ふのである。ブラーマンは聖典ヴェダの正當の所有者であつて一切造化の首長である。萬有は凡てブラーマンの財產であり、ブラーマン以外の生物が生活を受け得るは一にブラーマンの恩惠に依るものとした。又其の宗法に依ると、(一)神はブラーマンに對してはヴェダの讀誦と教授、供儀及び供儀の手傳ひ、布施及び布施の受取り方に關する義務を與へ、(二)クシャトリヤに對しては征服及び政治の方法、布施、供儀、讀誦等の義務を與へ、(三)ヴァイシャに對しては家畜を飼ふこと、貿易に從事することと及び利子を取りて金を貸すこと等の義務を與へ、(四)スドラに對してはブラーマン以下の三姓階の人々に絕對服從を以て奉仕する義務を與へたものであるとせられた。異つた姓階の人達の

間には婚姻は勿論、同じ部屋で起臥及び食事することも禁ぜられた。其他の起居動作萬端、階級法律たる此の宗法に依つて規定され、水の飲み方、食物の食ひ方、身體の洗ひ方、衣服の着方、坐り方、起ち方等四姓に依つて一々異つて居る。此の階級的差別は今日に於ても嚴存し、印度の社會生活の基調を爲して居る。

ブラーマンは造化の首長であるとの見地からして、彼等は國家の法律に對しても除外的地位に立ち、他の姓陛に對して有ゆる横暴を極めた。此の不合理に反抗して立つたものが釋尊佛陀である。佛陀の主張は、ブラーマンに依つて作られた印度教のかせを打破し、姓階の別を斥けて一切衆生を平等無差別の境地に置くに在つた。從つて低級なる姓階を始め、ブラーマンの專横に嫌らない人々はきう然として佛教に奔り、スドラ級から起つたマカダ國のマウルヤ王朝は、佛教に歸依すると共に之を國教とした。然るに國家の興亡常無く、世紀前三十一年にマカダ國が亡んで外護者を失ひ、且つ印度教が佛教の教義を取り入れて其の存在を無意義ならしめる等巧妙な策略を講じた結果、佛教は次第に衰退し、ブラーマンは再び勢を得て、ヒマラヤ山南ゐんぷの洲は長く階級と迷信との餓鬼道に陷つた。

ヴェダの教は宇ちうの絶對至高の主を信奉しこを梵天（ブラーマ）と名付けた。人間の靈魂は此の梵天から出て輪廻するものであるから、人間はざん悔苦行を勤めて罪障を減ぼし轉生の繫縛から脱して梵天に復歸す可きであると云ふのが教義の骨子である。然るに此の思想の根本が自然力崇拜から進歩した萬有神教である關係上、其の流弊として有ゆる物體を神として崇拜するに到つた。牛を崇拜し猿を崇拜し、蛇を崇拜し、石を崇拜し又水を崇拜する。破壞を表徵する三目四手のカリの女神、智を表徵する象頭のガンパチ神、其他シヴァ、或はヅルガー等所謂八百萬の神々は皆夫れ〳〵の歸依者に依つて崇拜されて居る。又罪障消滅の手段として苦行す可きことを說いた結果、年中釘を植へた板の上に横臥するものもあれば、何年も片手を空に捧げたまゝ坐つて居るものもあり、道路の上を展々と轉びながら數百里を行くものもあれば、又朝から晩まで樹に吊り下つて暮すものもある。人世を以てほう〳〵たる死後のゆうめい界に到る須ゆの一程であると觀じ、道德、政治、產業、其他の現世的行爲を輕視して、終生を未來の世界に對する準備に沒頭するが印度教の概念である。又之が反動として人間萬事を免る可からざる運命の鐵則に支配されるものと爲し、せつ那のきよう樂を追ふて歲月を送るを人生の意義に合するものと考へ、日夜酒色の淫樂

に耽るものが在る。斯くの如く姓階（カスト）のかせの下に在つて、人生を悲觀して轉生輪廻の繫縛から離脱するにきう〳〵たるか、左も無くば肉慾の衝動に滿足を求めて醉生夢死することが、上下三千年印度社會の世相でもあれば又印度國民の國民性（ナショナリティ）でもある。

アラビアの沙漠に、其處に吹く熱風（シロッコ）の樣に捲き起つた回教徒は、ペルシア征服後間も無く印度を侵した。併し其時彼等は唯印度の關門をうかがふたと言ふだけで引き上げた。紀元千一年にアフカン王で回教徒たるガズニのマームード（Mahmud of Gasni）が攻め入つて始めて印度國内のパンジャブ地方に建國した。ガンヂス流域に建國してデリーに都した最初の回教徒の王はクトブ・ウド・ヂン・アイバーク（Kutb-Ud-din Aibae）であつて、それは千二百六年のことである。有名なタメルレーン大王も土耳古・蒙古族（Turko-Mongol）の大軍を率いてデリーまで侵入したが、彼は過ぎる處を略奪して復た疾風の如く引き上げた。タメルレーン五世の孫ベベルが十六世紀の初頭印度に侵入してモーガル（Mogol）帝國を建設し、英人が印度を併呑する迄まで此の國を統治した。斯くして十一世紀以來殆ど一千年の間、回教徒が不斷の交渉を持つた關係上、印度國民の間には回教徒の拔く可からざる勢力が扶植された。現在印度全人口三億二千萬の中二億三千萬が印度教徒即ちバラモン教徒で、七千萬が回々教徒、殘余の約二千萬が基督教徒、シーク教徒、ジャイナ教徒其他である。此の印度全人口の五分の一强に當る七千萬の中、アラビア、ペルシア、アフガニスタン等から侵入した征服者の子孫は約八百萬であつて、六千二百萬は印度教からの改宗者である。何うして斯く印度教からの改宗者が多いかと言ふ理由は、固より回教徒が久しく政治上の統治者として臨み、遊說、勸誘の外或る場合には政治的威力を以て强制したにも依るが、其の根本的原因は印度教と回教との教義的對照に歸せざるを得ない。ヴェダの經典は絕對の全能神梵天の存在を認めるに拘らず、後世ブラナ派（Pranas）の信條が行はれるに及んで、印度教は前に述べた樣に萬有神教の流弊に陷つて萬物を神として信仰する偶像教に爲つたに對し、回教は徹頭徹尾アラー（Allah）の唯一眞神を信奉し、印度教が姓階の差別を以て越ゆ可からざる先天的血脈の相異であるとするに對し、回々教はアラーの一神を信奉するものは四海皆兄弟であるとした。之が爲め低級な姓階の者も、一度回教に改宗さへすれば征服者と對等の地位に立つて自由を受くることが出來た。是れが今日印度に七千萬の回教徒が存在する所以である。然らば回教は何故にブラーマン以外の全印度國民を自己の宗旨に改宗せしめることが出來

無かつたか。その理由は、印度教が印度アリアン民族の歴史と共に存在し、其の思想は彼等の本然的性質と爲つて居り、スドラの如き人種的起源を異にするものさへも印度教の思想に支配されて、奴れいとして上級の姓階に奉仕することが、やがて來る可き死後の安逸を得る先天的道程であると觀じた結果である。モーガル朝のアクバール（Akbar）帝は世界まれに見る英雄である。彼が其の大藏大臣ラジャー・トーダール・モール（Rajah Todar Molle）の翼賛に依つて作つた土地收入法其他の國法は、現在英國の印度統治の模範に爲つて居る。彼は回教徒でありながら其のこう量無邊な心事は、信教や形成に拘泥せず、印度教徒を大臣とし、基督教宣教師を友とし又印度教婦人をも妻とした。恐らくアクバール自身の心事を代表したものであろうと言はれて居るところの彼の友アダル・フェーズの作つた有名な詩は、印度教の寺院に於ても回教の殿堂（モスク）に於ても將た基督教のチャーチに於ても、到る處に儀式と信條の奥に神の實在を見出す信仰者を歌ふたもので、その詩の末段に、

『異教は異教徒に屬し、正教は正教徒に屬す。たゞばらの花粉のみは香料商人の心任せなり』

"Heresy to the Heretic, orthodoxy to orthodox. But the rose-petal's dust belong to the perfume seller's heart"

と言ふ句がある。斯くまでこう量自由な、そして一輪の花に對してさへ同情ををしまなかつたアクバールが、總ての信條から最善のものを撰んで世界的宗教を樹立しやうと試みたのは寧ろ不思議なことゝ見なされて居る。此くの如き人爲的宗教が人心の苦惱を救ふ丈けの活力に缺けた爲め政治的無限の勢力を持て居たアクバールの死と共に當然消滅したが、併し印度を全一のものとして存在せしめやうとするが爲めには決して誤つた方策では無かつたと共に、神の子等を一つの家族的團らんに集めやうとした彼の意圖は、要するに一箇の夢想では有つたとはいへ、古往今來幾度か印度の識者を奮起させた尊い夢であつたのである。史家は此の意圖に就いてアクバールを評して「彼は決して到達することの出來ぬ北極星に行かんとする航海者の如きものであつた。併し此の星無くば彼は決して彼岸の港に到着することは出來無かつた」と言つたのは巧妙な比論である。此のアクバールの英資をもてさへ融合することの出來無かつた印度教と回教との對立不和は、老かいな英國民が印度を統治する上に巧妙に利用された點である。

ギリシヤの史家メガステネス（Megasthenes）は紀元前に印度を旅行して、此の國の住民が

日夜ゆう遠玄妙な人生問題の思索に耽つて居るのを觀て驚いたと言つて居る。印度の國民は要するに非現世的國民である。さればとて、彼等を形而上文明以外に何物をも持た無い民族であるとするは、余りに國民生活の多樣複雜を無視した觀察である。同じメガステネスが、歴山大王の部將で王の沒後歴山帝國の東半部を領有して居たセッユーカスと交戰した印度マウルヤ朝の始祖チャンドラ・グプタ（Chandra Gupta）の治世に就いて述べて居るところに依ると、チャンドラ・グプタの行政組織には現代歐洲各國政府の施設が殘らず包まれて居たと云ふことである。彼の政府には勞働局も有れば出生、死亡及び婚姻に關する登記局も有り、其他公衆慈惠を司る大臣、通商貿易大臣、農務大臣もあつた。彼は强大な陸軍及び海軍を建設すると同時に、通商の事務にも意を用ひ、其の信用證券の組織の如きは頗る見る可きものがあり、從つてその國家は頗る富んで居たと云はれて居る。彼に次いだアソカ王（Asoka）は後世のアクバール帝以上と稱せられる大皇帝である。彼の治下に完全な統一を遂げた印度を治めるに、彼は威力を以つてせずして德を以てした。彼は家畜其他の動物の爲めに病院を建てゝ愛撫した。いわゆる德きん獸に及ぶものである。此等の治績に觀るも印度國民が政治行政の才能にも秀でゝ居たことが判る。印度の回教徒は其の起源に於ては前述べた樣に中央アジア、アラビア其他からの侵入者である。併し彼等が印度の土に土着してからは、彼等は印度に於て結婚し、印度に於て死し、印度の地に葬むられた。斯くて彼等は印度の「土地の子」（The Sons of Soil）に爲り終ふせた。十三世紀から十九世紀の頃まで彼等が印度全地の統治者と爲つて居た間、印度に生れ、印度にめとり、印度に死した點に於て純然たる印度人である。彼等は租稅を印度に取り立てゝ又其の全部を印度の爲めに使つた。彼等の軍隊はペルシアやアフガニスタンなどから伴れて來たものでは無くて全部印度人から組織された。彼等が印度教徒に對する偏頗と云へば、單に宗教上のことであつて、政治的には何等の區別が無かつた。故に彼等は印度教徒を大臣、大官、大將として皇族の次に位せしめた。侵入後當分の間こそ彼等はその鄕土の言葉を使つて居たが、年月の經つに從つて印度の言葉を學び遂には他の印度の地方語と同格のものとなつた。今日彼等の使用するウルヅ語（Urdu）若くばヒンヅスタニ（Hindustani）と呼ばれるものは、其の組織構造に於て純然たる印度語である。從つてアクバールやオウラングゼブを始め、其他回教徒の賢臣名將の雄略大才も、亦之を印度自身の産物として評價しなければならぬ。

劍を以て傳道の手段とし、異教徒との戰に死するは天樂に行く所以であると信ずる回教徒が、尙武勇敢の氣象に富んで居るは言ふまでも無い。併し印度の戰場は此等回教徒の武力をのみほしいまゝにするを許した譯では無かつた。クシャトリアに屬する諸族は、武族たる自家の門地を榮として父祖の武を墜さざることを專念した。別けても歷山（アレキサンダー）と戰ひ、タメルレーンと戰ひ、バベルと戰つたパンジャブ州の武族は頗る武健である。パンジャブの東南、沙原雲に連るラジプタナ地方の印度（ヒンヅー）教騎士に到つては更に勇敢である。此等の騎士に依つて建國され、現在に於ても英領印度とは別に土侯國の名義を保つて居るウダイプール（Udaipur）の王家は日の神の千孫として其の門地に誇り、英國皇帝に對してさへ安價なる叩頭の禮を拂ふことを肯じ無い。ヴダイプール王家に就いては千古の武名を遺す物語がある。アクバール大帝が殆ど全印度を征服し、大軍を以てこのラジプタナに臨んだ時には、ラートレス（Rahtorrs）だとか、クーチワハ（Kutchwahas）だとか、其他ビカニール（Bikanir）ブーンヂ（Bo ndi）等の此の地方の王族は、或は和し又は屈服してモーガル帝國に屈從した。獨りセッソヂア（Sessodia）の王であるバアタブ（Partap）だけはウダイプールの城に據つて頑强に抵抗した。戰は敗れ城は陷つたが、バアタブは敗余の兵を率いて四方に轉戰した。ラジプト人の目は期せずして、塵にまみれた、而も武功に輝くバアタブの軍旗に集つた。或る時アクバール帝が謁見式を行つた時、彼がバアタブから降伏を乞ふて來て居ると語つたに對し、式に臨んで居たラジプト人は何うしてもこれを信じやうとしなかつた。其の中の一人でプリスヴイ・ラージ（Prithvi Raj）と云ふ詩人がバアタブに手紙を送り、王が降を乞ふと云ふうわさがあるけれども自分達は之を信じない。若し王が降伏するならば印度教徒の太陽は永遠に沒するであろうと云つた。之に答へてバアタブは、うわさは虛報である。自分は斷じて降伏し無いし、ウダイプール家の軍旗は今もさつ然として飜つて居ると答へた。バアタブの勇武と、囚はれ同樣の身に爲つても尙ほ母國の獨立を思ふて止まなかつたラジプト人の氣節と、此の氣節を喜んで獨立に對する印度教徒のあこがれを寬じよしたアクバール帝の度量とは、今も傳へて美談とせられて居る。ラジプト州の南はデツカンの高原に境して居る。此の地方にもマーラツタ族（Mahratta）と云ふ武勇な印度教徒が居る。モーガル朝の尙ほ衰へ無い十七世紀の末、マーラツタ族の中にシヴァジ（Sivaji）と云ふ英雄が出てオウラングゼブ帝に反旗を飜した。彼は後にサツタラ（Satara に都したのでサツタラ王國と呼ばれるマーラツタ人の大帝國を建設する

と共にモーガル帝國の基礎を搖かした傑物である。講和會議の席上、談判の破裂と共にモーガル朝の將軍アフザル・カンを一刀の下に斬り倒した話や、其他彼の武勳談は詩に歌に詠ぜられて印度獨立運動者の進軍曲と爲つて居る。マーラッタ帝國の大臣達は多くチトパヴアン（Chitpavan）と言ふブラーマン族の出身であつて、後に此の帝國の政權はチトパヴアン・ブラーマンにうつり、彼等はペイシュワー（Peishwah）と言ふ名稱て中央印度に雄視した。彼等の政治的才能及び夫に依つて致された此の國の繁榮はサー・ジョン・マルコルム（Sir John Malcolm）其他の史家が稱賛する處である。英人の侵略に對して最も頑强に抵抗したのは此のマーラッタのチトパヴアン・ブラーマンであつて後年ピストルや爆彈の力に依つて英人政治の顚覆を企て、現代革命の急先鋒と爲つたのも亦實にこのチトパヴアン・ブラーマンである。

バラモン教にせよ、佛教にせよ、其の內面的考察の高尙ゆう玄なる恐らく人智の極度を示すものであろう。此の點に於て印度民族は他國民の企及するを許さざるものがある。其他文學、數學、哲學、醫學の如きブラーマンの文明は上古既に相當の過程に達し、殊にパニニー（Panini）の文典、マハーバーラタ（Mahabarata）及びラーマヤーナ（Râmayâna）の二大詩篇、或は又印度教の聖典として名高きバガヴァド・ギーター（Bhagavad-Gita）の如きは世界の文壇に虎視するものと言はれて居る。又吾人は古代印度の美術に就いて批判を下すを潛越に感する。何となれば奈良朝文明の精華であつて、後世日本人の追從するを許され無い彼の法隆寺の壁畫及び藥師三尊の如きも、要するに印度藝術の模ほうたるを出で無いからである。近代に到つても印度は決して其の審美的才能を墜して居ない。モーガルのシャア・ゼハン帝（Shah Gehan）が其の愛妃マムタズ・マハール（Mamtaz Mahal）の爲めにアグラ市附近に建てた靈廟タジ・マハル（Taj Mahal）はギリシヤ、羅典の藝術に目の肥えた歐米人をさへさたんの外無からしめるみ力を持つて居る。試に月明の夜其の前に立たんか、恐らく何人も審美の女神其物の表現かとあやしむであろうとは、彼等の定評である。或は又アクバールの宮殿の如き、デリー其他の城かくの如き、こう壯、雄大、精美の點に於て決して泰西の建築に劣るものでは無い。產業に於ても印度は立派な歷史を有して居る。例へば世界の綿業は印度を祖先とし、英國が此の國を征服して勝手な政策により之を全滅せしめるまでは、其の產物は自國人若くばアラビア人等の手に依つて遠く歐洲、アフリカの市場まで獨占して居たものである。——英語の（Cotton）はアラビア語の（Kwatton）のなまりで

ある。そして印度產の木綿は、其の精巧な點に於て人間業では無く木綿を紡ぐ昆蟲の仕業であろうとまで言はれて居た。又ダーク（Dhak）と言ふ草花から採つたう金色を交へたおかね染の如きは、二百年洗ひさらして益々其の色合の美を加へると唱へられて居る。印度國民は產業に於ても優秀な腦力の持主である例證を多く有して居る。

廣ほう一百五十萬方哩、中には不毛の荒野が無いでは無いが、ガンヂス流域の如き世界屈指のよく地を抱いて、其の地力は大英帝國の大を支持するだけに豐である。三億二千萬の民族中には、治才あり、武幹あり、商略あり、藝術あり、文そうある國民性（ナショナリティ）を含んで居る。然るにも拘らず彼が他國の屬邦として今日の悲境に沈んで居るのは何の故であろうか。之に對する答は「全一としての印度國民性」に缺點があると言ふに歸着する。此の全一としての缺陷を解剖すると前述べた如き、（一）印度教の厭世的思想及び、（二）姓階の嚴格なる差別、（三）各宗教乃至宗派間のあつれき、（四）熱帶の風土より來る懶怠の性情等である。左に之が理由を說明して見やう。

人生をほうまつ夢幻と觀じ專念未來の轉生を恐れる。人生に對する希望も無ければ人生に對する愛着も無い。自己の生活を向上せしめやうと言ふ考も無ければ、國家社會に對する奉仕の念も無い。中には尙武の宗派があり勇敢な武門や種族があるにしても、印度國民の大多數を占める印度教徒の胸憶をうづめる觀念は、要するに此の厭世思想たるを免れぬ。「神の流」と呼ばれるガンヂス川の岸には、印度教徒の羅馬とも云ふべきベナレス（Benares）を始め幾多の聖處がある。其の水際やほだい樹下には、夜を徹し日を徹し、めい〳〵として死生の問題に耽けるものが幾萬、幾十萬と居る。年毎の祭禮に各地の聖所に集まるもの丶總數は幾千萬にも上る。此の狀態は、二千年の昔メガステネスが此の國を訪ねた當時と恐らく變化は無いであろう。否、汽車汽船の發達と共に靈所巡禮の風は益々盛である。「印度の精神文明を以て泰西を征服する」とは印度先覺者の叫である。ベンガルの先哲ヴイヴエカナンダ（Swami Vivekananda）は「精神（スピリチユアリティ）」を以て世界を征服せよと言ひ。近くはガンヂーも「精神力（ソールフォース）」を以て泰西の物質文明に敵せよと言つて居る。併し、物質文明が現代國家主義の武器であり、又其の優劣がてき面に國家の興廢に關する以上、厭世迷信の民衆を率いて國際場裏の鐵火を踏むも蓋し勝算の無いことであろう。而も其上に彼等の間には姓階の差別が有つて國民的存在の支障を爲して居る。前述べた四ツの姓階は基本的差別であつて、幾千年間にわたる民族の繁殖と社會生活の分裂とに伴ひ、四姓は更に分裂して百餘の

副姓階（Sub-Caste）を成して居る。そして同一の副姓階に屬するもの丈の間に結婚も社交も行はれ、彼等の團結は一種の共濟組織を形造つて居るけれども、他の姓階との間には何等の聯絡も無く、所謂風する馬牛の相ひ及ばざるの觀が有る。手を取りひぢを交へて國家の休戚を語るは愚かのこと、他姓の者の手を觸れた食器では一切食事もせぬと言ふ狀態では、世界に於ける印度の地位を自覺し、全一としての印度國民のナショナリティに目覺めるが如きは至難のことゝ言は無ければならぬ。此の姓階の區別は印度教徒のことであるが、印度には前述べた樣に印度教の外に回々教其他の宗教がある。別けても回教徒は數百年間印度の治者であつたのと、其の教徒が印度教に次ぐ多數であると、及び彼等がその宗祖、信條に對する熱烈な愛着とからして、印度教徒に對する一大敵國を形造つて居る。固より印度教徒にして回教國の大臣に爲つた者も多ければ、印度教婦人で回教王の妃と爲つたものもある樣に、政治的及び社會的には比較的融和した點も多いけれども、兩者の間の信條及び儀式の相違は宛然水と油との如く融合し難きものが有る。例へばヴェダの昔は別とし、少くも現代の印度教徒は汎神教の余弊に陷つた偶像崇拜者であるに反し、回教徒は絶對的一神教徒である。回教徒が印度教徒を偶像崇拜者とさげすむに對し、印度教徒は教理の淺薄なる故を以て回教をあざけつて居る。印度教徒が牛を以て神聖なるものとし、崇拜の極牛糞を身體に塗るものあるに反し、回教徒は神への犧牲として牛を殺すこと日本の神道を奉ずるものが魚類を神前に捧ぐると同じく、之が爲め印度教徒の憤激を買ふて、年々歳々回教徒の祭に兩者間の爭鬪流血を見ることが多い。英國の統治者は此の反目を利用し、回教徒七千萬を以て印度に於けるアイルランドのウルスターたらしめ來つた。併し宗教上のあつれきは、印度教と回教との如き他宗間のこと許りでは無く、同宗の間に於ても異る宗派の間に絶えずその爭がある。回教徒のシアー派（Shiah）とスンニー派（Sunnis）との反目は教祖モハメット沒後間も無くからのことであつて、現在印度に於ても尙ほ此の鬪爭は有り、先年セーヴル條約の騷しかつた時、いわゆるキラファット（Kilaphut）問題の際に於ける兩派のあつれきは一時汎回教主義者（Pan-Islamist）並に印度國民議會派の人々を苦々しく感ぜしめたことがあつた。印度衰滅の理由として最後に掲げた熱帶的氣習は固より、政治的にも其の結果を及ぼして居るが特に甚しいのは經濟的生活である。ヒマラヤ山系の高地を除く印度の大部分は、殆ど一年を通じて夏である。從つて下層の人民は猿股（Dohti）の外に極く簡單な上衣があれば事が足りる。又其の食物とても、

季節風（モンスーン）の順が悪いとか、其他の關係で饑饉が無い限り豐富である。米は全世界産額の二分の一を産する。衣食が簡單な故に彼等は日に數錢、若くば數十錢を以て生活を支へることが出來る。故に彼等は僅少な勞銀に滿足し、それを得ればそれ以上勞働する勤勉心の無いことは、他の熱帶地住民と同樣である。天惠に加へらるゝ人力の價値が增大する現代の經濟組織に於て、印度國民の如上の氣習は決して此の國の國家的營生を繁榮ならしめる所以では無い。

英人の評語の如く、「不變」は印度の特色であつた。釋迦が出ても遂にバラモン教の鐵則を破ることが出來無かつた。回教徒が攻め入つて印度の主權者に爲つても印度の社會生活の內容には殆ど一指だも染めることが出來無かつた。プラッシィ（Plassy）の役後英人が印度に君臨して約一世紀半の間、印度の國民生活は依然として死水の如く滯つて居た。故に英人は印度の國民生活は、過去四千年の如く未來永ごう動かざるものと考へた。然るにそれが最近に到つて動き始めた。而も非常なる加速度を以て動き始めた。現代印度教のむじゅんを打破して至純なる印度國民の信條と言ふ可き唯一神を信ずるヴェダの昔に歸れと呼ぶアリヤ教會（アリヤサマージ）（Arya Samaj）の一派が現はれた。ブラーモ教會（Bramo Samaj）に到つてはヴェダその物の權威をも認めず、新なる信條の下に唯一神を奉じて印度國民性の打成を期して居る。此等の新なる叫が姓階の打破を綱領の一に置いて居ることは言ふまでも無い。又汽車汽船其他現代的生活は他姓間の共同生活を余儀無からしめて差別撤廢の氣運を促して居る。英國を始め歐洲列强が採つた回教徒の宗主國たる土耳古に對するかこくな政策は、印度に於ける回印兩教徒をして握手せしむるに到つた。斯くて從來印度教徒の間にのみ聞かれた「母國よ」（バンデマタラム）（Bande Mataram）の叫は、今や回教徒の口からも聞かれる樣になつた。「印度教徒も、回教徒も、シーク教徒も、ブラーマンもストラも、ドラヴィヂアンも、皆是れ母國印度の兒である」とは、獨りガンヂーの叫のみでは無い。曾て印度の識者にのみ依り唱へられた此の覺悟は今や三尺の童子の口からも聞かれる。獨立と叫び自治（スワラージ）（Swaraj）と呼び、自治に到る要件として、產業自給（Swade-hi）を覺悟して往年の產業を復活せしめやうとして居る。之が印度の自覺で無くて何か。止水は動き、流水は激し、白浪、とう天の思潮はヒマラヤ山南の地にみなぎつて居る。

此の新に形造られんとする印度の國民性に就いては章を改めて論じやう。

第二章　英人印度侵略史觀

ポルトガル人やオランダ人の東洋貿易が多大の利益を得て居るに刺げきせられて、英國人が東印度會社を創立したのは千六百年の暮のことで、それが事業に着手したのは三年後の千六百三年である。會社の計畫は圖に當り、其後八年間の利益は投資額に對し一年平均十七割と言ふ成績を示した。千六百十三年に組合組織から株式組織に變更し、其後四ケ年間の利益は大に減じて年平均八割七分に爲つて居たこともあるが、千六百七十六年には株主はボーナスとして株券の十割を與へられた外に年二割の配當を受けた。從つて株券の賣買價格も頗る高く、其の翌年卽ち千六百七十七年に於ては百に對する二百四十五に當り、千六百八十一年には百に對する三百から三百六十、遂には五百まで暴騰した。ロンドンの商業界は驚異とせん望の目を視張つた。

東印度會社の事業が商業史上稀に觀る好成績であつたに反し、英國としての對印度貿易は頗る不利であつた。印度からは東印度會社の手に依つて木綿織、絹物を始め毛織物、眞ちゆう等が船毎に滿載されて英國に向つたに對し、英國から印度へ輸出されるものは地金の外は何物も無かつ

た。著者は之に關する千六百年代の記錄を持たぬが、千七百十年から同二十年に到る十年間英國は毎年平均四百三十四萬四千ポンドの地金を印度へ輸出し、千七百四十七年から同五十七年に到る十年間には年平均五十六萬二千四百二十三ポンドの地金を輸出して居る。十七世紀の初頭に、失政と内亂との爲め疲弊して通商を維持伸張する資金に缺けて居た英國は、同世紀の終には印度への地金流出と商業資金の需用增加との爲め非常な貨幣の缺乏を來して居た。のみならず貨幣價格の減少とがん造との爲め、良質の銀貨が法定價格の二分の一に下り、貨幣の大部分は鐵、眞ちゅう及び銅の種類に爲つた。それで今日の爲替價格では英貨の約一志四片に當つて居る印度の一ルピーは當時二志八片に賣られて居た。此の一事は當時の英國と印度との經濟狀態の比較を物語るものである。此くの如き英國の貿易の逆調及び此の逆調から來る通貨の不足は、英國が印度の覇權を握る原因と爲つた千七百五十七年のプラッシィ（Plassy）の戰を轉回期として形勢一變した。而も之が自然的な通商關係に依つたもので無いことは特に注意す可き處である許りで無く、プラッシィ役後、印度に於ける英人の行動は、今日の英印間の惡因緣を結び付けた權謀と僞策との表現として見逃すことの出來ぬところである。

東印度會社の目的は當初には單純な通商貿易であつた。千六百十四年にサー・トーマスロー（Sir Thomas Roe）が使節として印度へ來てモーガル皇帝から、スーラット、ベンガル、シンド其他印度帝國の領土内に於て通商貿易を爲し及び工場を建てる勅許を得た。――因に云ふ、此の權利に基いて東印度會社がガンヂス河の分流フーグリの河邊に建てた工場が發展してカルカッタと爲り、印度經略の策源地とも爲れば又印度第一の大都とも爲つた。――東印度會社は此の外にマドラス及びボムベイを根據地として通商に從事した。當時東印度會社が純然たる商人であつたことは、ポルトガル人及びオランダ人が砲臺を築き守備兵を置いて工場を守つたり特權を得たりするに見習ひ、英國東印度會社も之にまねたが好いと言ふ說の有つたに對し、トーマス・ローが、夫れは會社の利益を減殺するものであると言つて沙汰止みにしたのに觀ても判る。然るに英人と前後して印度に來たフランス人が、モーガル帝國の分裂内こうと諸王侯の無氣力とに乘じて頻りに權謀と兵力を用いて居り、殊に佛人の根據地が英人のマドラスに對してポンチシエリー、カルカッタに對してはシヤンダルナゴールと言ふ具合に接近して居た關係上、英人も之に對抗する必要にも迫られ、印度の内爭に乘じ不正の手段を以て不正の利益を圖るに到つた。

當時モーガル皇朝の强大敵國を爲すものは、前に述べたデツカン地方に於けるマーラツタ人とパンジヤブに於けるシーク教徒であつた。ハイデラバド王（The Nijam of Hyderabad）、マイソール副王（The Nawab of Mysore）も獨立を宣してマーラツタ人とデツカンを爭ひ、ベンガルの副王及びオウド（Oudh）の副王も單に名許りの臣從をモーガル帝に誓ひ、其他侯伯が割據して、亂麻の如き狀勢の裏に雌雄を爭ふて居た。そこへフランス人と英人とが現れて、一方が甲侯を援けると他方は乙侯を救ふて對抗し、一時ヂウプレーの指揮の下にフランス側が優勢であるかと思へば、英人の中にクライヴがくつ起してフランスの勢をくじくなど互に消長が有つたが千七百五十六年にクライヴがフランス人とベンガル王との連合軍を破り、其翌年ベンガル副王が復たモーガル帝及びオウド王と同盟して攻めて來たのを、クライヴがプラツシイの決戰に潰滅せしめた結果、ヒマラヤ山南の地に英人の覇權が確立された。印度が英人の獨舞臺と爲ると共に、彼等は權謀と暴力の有り丈けを盡し出した。タンジョール侯家の相續爭に乘じ、英人は如何にしてデヴィコター（Devikotah）の地を獲てヒンヅスタン征服の端緒を開いたか。又、英人は彼等か孤獨無援の商人としてコロマンデルの海岸に上陸した時、彼等の最初の保護者（パトロン）であつたカルナチツクの副王を蹴落して遂に其の國を奪ふたか。英人は又マイソール州を其の舊王に返すと云ふ美名の下に如何にして領土の大半を奪ふたか。フーグリ河邊の一工場をフオート・ウイリアム砲臺に變形し、之を根據として人口七千萬のベンガル州を割取した英人の手並に見よ。其他オウドの例に見よ。マーラツタの例に見よ。パンジヤブの例に見よ。印度教徒と回教徒と互に抗爭し、王國は王國に對し、侯國は侯國に對し、ジヤツト人はラジプト人に對し、マーラツタ人はジヤツト及びラジプト人に對し、ロヒラス人はブンデラスに對し、ブンデラス人はバアサン人に對し、爭鬪と攻伐とを事として居る間に立つて英人は其の得意の權謀を專にした。之が爲め印度は權勢と名利との餓鬼道に陷つた。條約は幾度か締結されて其の都度何等の遲疑も無く勝手に破られ、盟約は結ばれても少しの信義だも無く棄てられた。王位は賣買せられ、武力の援助も亦宛も商品の如くせり賣された。臣にして君を賣り、武士にして軍旗に負くは日常の茶飯事であつた。國法たると條約たるとも問はず、道德上たると宗教上たるとに論無く、有ゆる法律は暫時にして破棄せられて見返るものも無い有樣であつた。孤兒も寡婦も何等の同情を受けず、年老へるも幼きも容赦無く取扱はれた。唯一の目的は掠奪であり、帝國建設であつた。印度國民黨の名士ラジパト・ラ

イ（Rajpat Lai）は此の狀態を叙述して『自分の言ふ處が事實を赤裸々に且つ中ようを示したものであることは、ミル及びウィルソンの「英領印度史」、バアクの「ワーレン・ヘスチングスの彈劾」、トーレンスの「亞細亞に於ける我が帝國」、ベルの「パンジャブの併合」等を讀めば明である。」と言つて居る通り、印度帝國建設の道程は英人自身の筆に依つて巧に而も明白に繪かれて居る。

此くの如く英人は帝國建設の爲めに手段を選ばなかつたと同時に、東印度會社直接の目的たる營利の爲めにも、更に甚しきは會社の使用人の私腹を肥す爲めにも手段を選ばなかつた。プラッシイの戰の結果としてベンガルの副王ミール・ジャファール（Mir Jaffar）は百二十五萬ポンドの償金と廣大な土地を東印度會社に讓渡した許りで無く、此の條約面に記載されたもの以外に約そ同額の現金を會社の高級使用人に與へ、其中二十三萬四千ポンドはクライヴの懐に入つた。かのマコーレーが其の著クライヴ傳に於て「プラッシイ戰後寶の雨が降り初めた」と言つて居るのは此等の事等を指したものである。ミール・ジャッファールに繼いだミール・カッシム（Mir Kassim）もヴルヴワン、ミドナプール、チッタゴンの三大州を割き、且つ五萬ポンドを會社の費用に當てた外、二十萬ポンドを會社の將校に與へ、其中五萬八千三百三十二ポンドを知事が取つた。ミール・カシムが英人と仲違ひして廢立され、前王ミール・ジャッファールが再び位に即いたが間も無く死んだので、彼の私生兒ナジム・ウッドウラが繼いだ。此の王位繼承問題に關聯してジャファールは五十萬餘ポンドを、ナジム・ウッドウラは二十三餘萬ポンドを會社に贈り、其後も引續き八年間に總計二百十六萬九千六百六十五ポンドを與へた。此の贈物以外に、同期間に賠償として會社から要求して受取られた金が三百七十七萬八百三十三ポンドに上つた。此等の金額は副王から會社に割讓した土地からの收入、他の條約に依つて與へられた補助金、慰勞金、軍隊維持費以外のものであつたことは言ふでも無い。

英國は印度の外に支那に對しても年々多額の地金を輸出して居たが、之も千七百五十七年のプラッシイ戰後急に減少した。之に就いてブルースは次の樣に述べて居る。「プラッシイの戰後から支那行の地金が著しく減少し、印度から支那へ供給する分が不足なる場合だけ送られる樣に爲つた。此の事情は東印度會社の重役からマドラス及びベンガル地方に居る社員に與へた澤山の手紙に依るも明白である。之に依つて觀るに、重役は支那方面から來る貿易船に出來る限り澤山の地金を集めて置く樣に命じて居る」と。そして東印度會社の使用人が地金を集めに方法は、前言

つた貢金、慰勞金、割取した土地からの收益等の外に、印度の產業を衰滅せしめたりやく奪同樣の手段が講ぜられた。夫れは會社がベンガル地方でゴマスター（Gomastahs）と呼はれた一種の下受商人（印度人）を使ふてする强制貿易であつた。ゴマスターは會社から與へられた權限を笠に着て町や村へ來て同胞を無理强して、木綿、絹、鹽、米、砂糖、牛油其他有ゆる物品の賣買を行つた。彼等は買ふ場合には價格の約四割を以て品物を卷き上げ、賣る場合には五倍もする價格を以て押し付けた。土民が肯か無い場合には、ゴマスターは直ぐ彼等を縛り上げてむち打つたり、監禁したりした。殊に織物其他主要物產には、製造人や職人等の名簿臺帳を作つて會社の奴れい同樣に取扱ひ、意に滿たぬことのある場合には罰金、體刑を勝手に加へた。之が爲め住人は逃亡し、產業は衰退し、今まで豐であつた町や部落が一朝にして荒廢した地方は頗る多かつた。コーンウオリス卿は其の當時「人民は貧窮と悲慘の道程を急速に步みつゝある」と言ひ、流石のヘスチングスも千八百二十七年に宣言して、「吾人の治下に人民は建訴の風を生じ、道德はたい廢した」と言ひ、ドクトル・マーシャンは千八百五十二年「印度の友」（The Friend of India）誌上に「ベンガル農民が、殆ど豫想の出來ぬ程荒廢悲慘な狀態に在ることは何人も否定し得ぬ所であるゝ ボロを着て犬箱にも劣る小屋に住み、家內中日に一食以上を得ることも出來ずに、ベンガルの農民は普通に言ふ生活の滿足が何んなものであるやをも知ら無い」と述べた如く、嘗てはエデンの花園と云はれ、モーガル帝國の王冠の寶玉にたとへられ、無盡藏の寶庫と呼ばれたベンガル州も、英人のりやく奪政治には兄る見る內に衰へた。

ベンガルは最も富んで居り、英人が最初に手を着けて且つ重大事件の多かつた關係上著しく世人の注意をひいたが、他の地方も大同小異であつた。ジェヴオンが言つて居る樣に、亞細亞は貴金屬の大貯藏場であつた。殊に印度人は古代からの習慣として、上は王侯のダイヤモンドから下は農民の銀塊に至るまで、幾十世紀間貯藏されて居たのである。英人はそれをつかんでロンドンへ持ち去つた。ヘスチングスに繼いだウエレスレーの時も盛に持ち出され、ダルハウジーが總督を止めるまで此の掠奪は續いた。ダイヤモンド、ルビー其他の貴金屬は無數に持ち出され、中には世界的名玉としてパンジャブの王ランジト・シング（Ranjit Singh）が所有して居た彼のコー・イ・ヌール（Koh-i-Noor）の如きも有つた。此等の總額に至つては何人も算定することが出來ぬが、ジェヴオンの云ふ處に據ると、恐らく當時歐洲に有つた貴金屬の全數よりもばく大であつた

ろうとのことである。又他の史家は、印度全國富の約七割が持ち出されたと言つて居る。そして此の印度に於ける英人のかやく奪が近世と現代とを分つ歴史上の大事實たる彼の産業革命と至深の關係を持つて居ることは、特に吾人の注意す可き處である。

産業革命はプラツシイの戰から三年目の千七百六十年を以て始つて居る。それまでは世界の紡績業を支配する英國ランカシヤーの紡績機械も印度同樣の簡單なものであつた。然るに千七百六十年に始めてフライング・シヤツトル（Flying Shuttle）が發明され、千七百六十四年にはハグリームが多軸紡績機を發明し、千七百九十五年にはカートライトが自動織機を發明し、千七百六十八年にはワツトが其の蒸汽機關を完成した。若し此等の發明が五十年早かつたとしたら何うか。印度及び支那に對する地金の流出から貨幣の缺乏を來して居た英國民は、到底此等の發明を利用して産業革命の大業を完成することは出來無かつたであろう。プラツシイの戰が産業革命に先つて行はれ、東印度會社の手ではく大の貴金屬及び物資を英本國に送り、之に從つて信用制度が發達したればこそ、産業革命も行はれ、次で工場組織もほつ興し、ここに初めて大英帝國は其の經濟的覇權の基礎を築くことを得た譯である。英國の國土に包藏せられる鐵と石炭と、及び彼等が印度から持ち返つた資本とは産業革命の三要素であつたと言はれ得る。併し英國の利得は印度の損失であつた。印度は之が爲めに其の富を奪はれ産業は衰退し土地は荒廢した。殊に木綿産業の始祖として歐洲市場まで獨占して居た印度の紡績業が全滅して英國が之に代つたことは、今日ガンヂー等の絶叫するスワデシ運動の遠因を爲すものとして見逃す可からざる事柄である。

有史以來始めて印度に攻入つたものはアレキサンダーであつた。然し彼の兵馬は今日のデリーの在るジヤムナ川に及ば無かつたし、又甚しくりやく奪した事實も無い。十一世紀に侵入したガズニのマームードは印度の繁榮にげん惑して多數財寶を持ち去つたが、彼の通過した部分も北部印度に限られて居たし、財貨の數量も高の知れたものであつた。タメルレーンは激しいりやく奪を行つて去つたと言はれて居るけれど、彼の侵略區域もデリーの包圍を以て極度として居る。其の次のバベルに至つては、最初には侵略者として來たが、後には保護者として印度の土に葬られた。此等史上に著しい侵入者も、其の行動した範圍は西北部に限られ、且つ其の期間も短く、單に疾風の如く一路の道程を旋回し去つたに過ぎ無かつた。之に反し、英人の侵略は印度全土に

わたり、且つ其の期間もプラッシイの戰から土兵反亂（ミユチニイ）に到る東印度會社の統治期間だけでも丁度滿一百年にわたつて居る。此の百年間に英人の行つたりやく奪の方法を分類して見ると、

（イ）東印度會社の名に於て印度の王侯其他の君主から取つた貢物及び慰勞金、

（ロ）東印度會社の名に於て印度の人民から取立てた租稅、

（ハ）東印度會社の使用人が彼等自身の利益の爲めに行つた貿易の利得、

（ニ）東印度會社と交渉の有つた印度王侯、其の連枝若くば關係者から得た賄ろ及び慰勞金。

此等の利得の中には公然受け取られたものもあれば、或は內密に或は强奪されたものもあつた。

所謂「リーヅンホール街の高慢な亞細亞侵略者」たる東印度會社の英人は、此くの如く殆ど考察し得可き有ゆる方法を以て印度の富を卷き上げた。そして此等の富は英本國の產業革命を助けて其の富力を以て世界的覇業を樹立する資たらしめたのである。ジョン・スリヴアン（Jhon Sullivan）が、英國下院の査問會に答へて、「吾人の組織は恰もガンヂスの岸から有ゆる財寶を吸上げて之をテームスの岸に絞り出す海綿の樣に働く」と言つたのは適語である。斯くして現代帝國主義の特色と言ふ可き經濟的さく取は英人に依つて其の範を示された。ここに吾人は歐亞の由河を虐殺の血に染めたジンギスカン、アッチラ及びタメルレーン等の殘虐と、英人の印度侵略が法と孰れが非人道的であるかを論じない。併しながら、背後に銃劍の威力をようして土民を驅使し、久しきにわたつて彼等の財寶及び生產物を奪ふて之を本國產業の資本とした英人の方法は、中世北人の侵略に比して少くも巧妙老かいである。うかつなる印度の人民は、氣付かぬ間に遠來異色の商人を統治者として、其の計數から割り出した冷酷な手に彼等の膏血を絞られて居た。

此くの如く各種の方法を以てガンヂス河畔にさく取された財貨は、東印度會社の株主を肥やし其の重役を肥やし、其の使用人を肥やし、更に產業革命を通じてランカシヤーの工業家を肥やし海運業者を肥やし、英國一般の國民を肥やした外に、更に驚く可き事實は未だ征服され無いで居た印度大陸の他の部分を侵略する財源と爲つたことである。クライヴがフランス人やベンガルの副王等と戰つた軍費は無論敗北者たる印度王侯に課せられ、ウワーレン・ヘスチングスの代に行はれた西北州や、オウド及びデツカン地方の戰役の費用も印度の君民から得た資金に依つた。其他ダルハウジーが諸侯の騷亂を鎭定した時の軍費も總て印度の土地からさく取したものであり、且つ今日印度以外の英領地たるマラツカ、マレイ、ブルマ其他を征服する費用も、悉く印度の膏血

を絞つたものである。英國人はただに印度侵略の費用を印度から取立てた許りで無く、征服に用いた軍隊の兵員としても亦印度人を使用した。印度人は先般の歐洲大戰に、フランスやガリポリ又はメソポタミヤなどの戰場に送られた樣に、侵略者の爲めにデツカンやパンジヤブ地方の征服に驅使せられ、遠くは印度以外の植民地までも出掛けた。英人の老かいも左ることながら、吾人は又印度人の餘りに好人物なるに驚かざるを得ない。

嘗てクライヴが、大英國の爲めにヒンヅスタンを征服し度いと建議した時に、宰相ピットは、其は政府の資力を以ては奈何ともすることの出來ぬ處であると言つた。又東印度會社の有力者たるムンローも、其の終局の目的は印度の征服であるにも拘らず總督ウエレスレーに答へて、「夫は吾々の力を越えたことであるから、一氣にそれ程發展することは出來無い。併したとへ事業の完成は永い年月を要するとも、此の目的を常に考察の中に置くは必要のことである。土着王侯の政府の不和及び騷亂は、吾人が舞臺に乘り出す可き時機を語るものである」と言つた樣に、彼等は決して自力を計らずに無謀の擧を敢てする樣なことはし無かつた。從つて彼等は印度諸侯間の不和と言ふ樣な時機を待つては權謀術數を弄して勢力の擴張に努めた。その有ゆる權變にわたつて存在する一貫の方策は、表面何處までも商利を目的とすることを標ほうし、自分に都合の好い諸侯に兵力を籍して他の諸侯を討伐せしめ、其の代價として土地や償金を取つたことである。そして彼等の援助を籍りた諸侯が英人の野心に心付いた時には時機既に遲かつた。彼等の手は既に英人の術策に縛り上げられて居たのである。現代印度の名士ラジバト・ライが、印度は英人の劍に依つて征服されたもので無いと言つて居るには半面の理がある。彼は言つて居る、「ベンガル侯（ナボブ）が、彼が東印度會社に許可した同州の東岸に工場及び砲壘を築く權利の裏に運命の手を觀たならば——オウド侯ヴイジールが、彼がベナレス及びロヒラス人を滅ぼす爲めに招請した勢力が一世紀經たぬ間に自分の子孫を厄介物として氣儘に恩給を與へて隱退させる樣に爲ることを先見したならば——モーガル皇帝がクライヴにデワニ（Dewani）を許可した意味を充分に知ることが出來たならば——カルナチツク侯がマーラツタ人を打破する爲めに英國人の援助を籍りた其時、之が彼の家を滅亡させる原因であることを豫見したならば——又若しスーラト侯及びタンジヨール藩王が、星の光に彼等の盛衰の運を讀むことが出來たならば——一寸した戰も外來の敵に對する聯合の地歩に合體せしめ、そして共同の敵を印度の外に驅逐したであろう。併しながら何うし

て印度の王侯は此等の英國商人に依つて誓はれた「永遠親交」の條約、若くば領土擴張の思想を一切放棄する嚴しゆくな誓約を疑ふことが出來たであろう乎」と。併し吾人の見を以てすると、英人の條約が如何に誓はれたにせよ、彼等は百年以上にわたり、不斷の間に其の誓約を弊履の如く棄て來つたにも拘らず、印度の君民が英人の言動を絶對に信用したことは殆ど常識を以て考へることの出來ぬところである。若し印度人が繰り返へされた英人の誓約をちう心から信用したとすれば、そのうかつは又更に驚く可きものと言は無ければならぬ。日本の德川幕末の騷亂に際し、フランスは幕府方に援助を申し込み、英國は勤王方に力を添へんとしたことが有る。其時興隆の氣運に在つた薩長等は無論のこと、ひん死の狀態に在つた幕閣の當事者でさへ、一國の內爭に當り外援を引き入れるは、國を擧げていてきの屬邦と爲すものである。いん鑑遠からず印度に在ると言つて、斷然フランスの提議を拒絶したでは無い乎。是れ程見易い道理を印度の君臣が心付かぬかつたと言ふは表面の言前であつて、其の實祖國の爲めに外援を拒絶する丈けの氣力が缺けて居たのである。日本武士の氣力は、其の祖國を在亡の危機に救ひ得たに反し、印度國民の無氣力は、英人をして其の得意の機略を弄して虎狼の慾望を滿足せしめた。時偶意を決して戰陣の間に英人と見ゆる場合があつても、印度人の無氣力は到底問題に爲ら無かつた。例へばプラッシイの戰、及び土兵反亂の際デリー城の包圍の如き、印度側の兵藪は白人に十倍若くば數十倍して居たに拘らず、何時も見苦しい敗北に終つて居る。海賊は懸引と同時に勇氣を必要とする。アングロ・サクソンは雄才と共に武幹に於ても世界に秀でた民族である。印度は英人の劍に依つて征服されたものでは無いとは、畢竟するに一種のき辯たるに過ぎぬ。

千八百五十七年、卽ちプラッシイの戰から丁度一世紀後に土兵反亂（ミユチニイ）の勢が印度を席卷して、英人の覇業はあはや根本的に覆されんとした。動亂の直接の原因は總督ダルハウジーの急激な變革だとせられて居るけれども、要するに一百年間に於ける英人の權略政治が將に總勘定されんとしたものに外ならぬ。此の動亂に際し、回教兵士と印度教兵士とは結合して居た。併し之を以て英人に對する反感からして國民的自覺が覺めかけて居たとするは早計である。何となれは、印度の侯伯及び人民は、英人をにくむと同樣に反亂兵士をも嫌惡して居た。從つて印度國民中動亂を援助したものも、內心ちうちよしながら援助し、其の方法は頗る不徹底であつた。殊に印度西北州に武强を誇るシーク教徒は、ミユチニイの首腦たる回教徒とは不ぐ戴天の間柄であつた。シーク教

徒の敎主グル・テグ・バハヅール（Guru Teg Bahadur）は回敎徒の爲めに殺され、其の後グル・ゴヴインド・シング（Guru Govind singh）も回敎徒の爲めに斷壓され且つ其の幼兒は二人ながら虐殺された。之がためにパンジャブに建設されやうとして居たシーク敎徒の王國は擊滅されて了つた。此の新しい歷史的關係からして、シーク敎徒は彼等の所謂「土耳古人（ツルク）」なる回敎徒に對して常に復仇の機を待つて居たのである。故にミユチニイが成功すれば再び回敎徒の天下と爲るを恐れると共に、父祖相傳の復仇心からしてシーク敎徒は擧つて英人に味方し、英人士官指揮の下にゆう躍して土兵討伐の戰場に向つた。此時も英人は印度人を利用して彼等の同胞を擊たしめ、之に依り波の崩れる如き危機を救ふことが出來た。英人は武幹と機略とに依つて印度を征服したものである。

土兵反亂は東印度會社の統治に終を告げ、英國政府は印度を以て本國の直轄に移し、次で英國ヴイクトーリア女王は印度帝國女皇の位に卽れた。それ以降の事は、現代の統治問題として論究す可きである。

第三章　英國統治（British Raj）と印度國民運動の由來

英國の印度統治は其の印度侵略の延長である。ガンヂスの富を吸收してテームスの岸に移すジヨン・スリヴアンの所謂海綿政策に到つては終始不易である。但し統治の責任者が東印度會社と云ふ商事會社から英國政府に變り、次で印度帝國の元首として英國女皇を推戴し、且つ英國輿論の直接の監督を受ける樣に爲つた關係上、英人の印度に對する政策は、土兵反亂を紀元（エポック）として統治の形式及び實質に於て幾多の差異が存在して居る。

千八百五十八年に土兵反亂（ミユチニイ）が鎭定されてから間も無く、印度の統治を英國政府の手に移すと同時に、ヴイクトーリア女王は印度の智識階級から自由の大憲章（マグナカルタ）と目せられた一の宣言書を發した。それに依つて女王は印度王侯の權利、尊嚴及び名譽は陛下自身の權利及び榮譽の如く保全せらるる可く、總て陛下の臣民は人種、及び信條の如何に拘らず能ふ限り自由且つ公平に公職に就くこと

を許さる可く、又其の任務は之を正當に果す可き各人の教育才能及ひ誠實に依り區別さる可きを誓はれた。尙ほ印度の平和的產業は奬勵さる可く、公共的効用及び改良の事業は向上さる可く印度政廳は印度に住む陛下の全臣下の爲めに運用さる可きを宣言された。「朕の力とする所は印度臣民の繁榮に在り、朕の安泰は印度臣民の滿足に在り、而して朕に對する大報酬は印度臣民の感謝に在る」とは詔勅の一句であつた。越えて千八百七十六年に、後のエドワード七世たる英皇太子は印度に漫遊して人民の歡迎を受け、其の翌年正月一日、ヴイクトーリア女王は、改めて千八百五十八年の印度政權の移動を承認すると同時に舊都デリーに於て印度女皇たることを布告された。其時總督をして印度の臣民に與へられたメッセージは次の如くである。

天惠を保有し、聯合王國の女王にして印度の女帝たる朕ヴイクトーリアは、目下デリーに參集せる我が文武百官、並に侯伯及び人民に對し、朕の總督を通じて朕の祝意を表し、併せて我が印度帝國の臣民に對する朕の深甚なる利益及び熱烈なる愛情を保證す。朕は先に印度の臣民が朕の帝室及び帝位に對する忠愛の表徵として朕の愛兒に與へたる歡迎に對し、ちう心の滿足を表す。朕は目下の機會が朕と朕の臣民とを一層親密なるちう帶に結合す可きを信じ、又貴きも賤しきも皆朕の統治の下に自由、平等及び正義の大原則を保證さる可く、且つ臣民の福しを向上し繁榮を增進し、且つ其の和平を增大するは是れ我が帝國の永遠の目的なる可きを信ず」

と。印度侯伯は之に對へて、彼等の忠誠は永ごう不易なる可きを誓ふた。其際開かれた大きよう宴の席上印度總督の試みた演說は重大な意義を包んで居る。曰く、

「印度に於ける此の英領帝國が意義するものの中最も重大なるものが一つ有る。それは次の事を意味して居る。卽ち總て印度帝國の臣民は互に平和に生活すべきこと、臣民の各員はいやしくも其の方法が犯罪的方法で無い以上、自己の欲する方法に於て富を致すは自由なる可きこと、各員は又他人の宗教的信仰を攻擊せざる限り自己の信仰を維持遂行し且つ其の隣人により妨害されずに生活するは自由なる可きことである。

一見した處では此は甚だ卑見單純であり、且つ之を適用するに造作無い樣に見える。併しながら若し諸君が之を、其の傳說に於て多樣なると同時に、人種に於ても將た其の性質を形成する信條に於ても、殆ど無數と言ふ可き程住民の多種複雜な帝國に之を適用せんとするならば、諸君は之がシーザーに依つても解決されず、シャーレマンに依つても解決され無かつた行政上の

諸問題を包含することを發見するであろう。……そして諸君が廣大な大陸に此のち密な行政組織を適用しやうとするならば、諸君は印度帝國人民全體の集團的社會的生命及び性格を、急激で無く徐々に、穩和に且つ同情を以て適確に造りつゝあるを觀るであろう……」

と。ヴイクトーリア女皇の宣言は、單なる一片の儀式的修辭では無くして、女皇の政府も宣言の趣旨を帶して印度の和平を維持增進するに努めた。事實上信仰の自由は維持せられ、ブラーマンの姓階的壓迫も法律上に於ては過去の事實となり、生命、財產の安固も保證された。或る印度教派の教授が其の講義に於て、「吾々は從來政治的專制、宗教的專制及び社會的專制卽ち姓階の專制と云ふ三重の專制政治に服して居た。之が爲めに壓迫されて、何人も獨自一個として立ち自我を確認することを敢てし得無かつた。宗教改革者さへも、事物の現狀と衝突することを避ける爲めに、其の主義の正當な結果を回避した。然るに現在では、たとへ外國政府の治下に立つとは言へ、吾人は印度教王侯の治下に未だ曾てきよう受し無かつた樣な思想並に行動の自由をきよう受して居る。然るに吾人は宗教的及び社會的專制から身を脫する才能を示したか否か。余は恐る、吾人が多くのものを爲し得ざることを」と述べた通り、宗教上及び姓階上のかせは、英國の統治に依つて少くも法律上に於ては除かれた譯である。（唯、之を活用して開明の天地を實現することを得無かつたのは、數千年來の因襲と印度國民自身の習性とに歸せ無ければならぬ）。英國の印度政府はモーガル皇朝其他の土着王侯の政府と同じく、法制上人民に對して責任を負ふものでは無かつた。併し此の政府は自由、平等及ひ友情の道德的責任觀念を表現して「仁慈なる專制政治」(Benevolent absolutism) の模範を示し、僅少な兵力を背後に扣へる數千人の英人官吏が三億二千萬の印度人民を統轄するエフイシエンシイの優れた點に於て、英國統治（ブリチツシ、ラージ）は世界無比だと稱へられた。鐵道は布かれ電信は通じ滊船は往來し、此等交通機關の發達に依つて經濟的脈流は更新せられ、信條及び姓階を超越した行政と相ひ待つてここに始めて、印度は全一としての國家的存在を認識した。ミユチニイより二十世紀の初頭に到る約半世紀間、雪氷るヒマラヤより波燃ゆるコモリンの海角に到る印度全洲は、「英國統治下の和平（パツクス、ブリタニカ）」(Pax Britanica) に近古未曾有の治を樂しむ觀が有つた。

併し如何なる國民も他の國民の爲めに他國を統治するものでは無い。印度の統治が東印度商會から英國政府の手に移り、前者の暴政に反省して後者の政治は純然たる海賊的、りやく奪政治に比

すると餘程正義人道の念を考察の中に置きはしたが、矢張り徹頭徹尾英人の爲めの印度統治であつて、印度人の爲めの印度統治では無かつた。英帝國の大を維持し、英帝國の大を增進するが爲めの印度統治であつて印度の富强を增進するが爲めの印度統治では無かつた。彼等は平等と言ひ正義と言つた。併し其の平等なるものは、ブラーマンとスドラ、印度教徒と回教徒との平等を指すもの卽ち印度人間の平等の意義であつて、英人と印度人との平等を意味しては居無かつた。正義と言ふも矢張り英國及び英人の利益を保證した上の正義人道であつて、自己の利益得失を犧牲にしてまでの絕對的正義では無かつた。英人に非ざれば大道の眞中を歩くことが出來なかつた。英人に非ざれば上級行政官たるを得無かつた。印度人は下士卒として驅使されたが上長官たることを許され無かつた。いやしくもサヒブ（Sahib 印度語の殿の義であつて、白人に對する尊稱に轉化した）たる以上、如何なる印度人よりも社會的地位に於て優越した。其他萬般の實際生活に於て、英人と土人との間に越ゆ可からざる優劣の差の嚴存することは、印度教姓階（ヒンヅー、カスト）の制度と異る處は無かつた。「白ブラーマン」（White Brahmins）と言ふ稱呼が英人に對する別名に使用されたに觀ても白人優越の一端を知ることが出來る。

マーラツタ帝國の實權者であつたチトパヴアン・ブラーマンは、千八百十年代に其の國が英吉利人に亡された後は、地方官廳の屬官、會社の書記、警察官或は辯護士の樣な職業に就いて居た。併し彼等の脈管に流れる父祖の血は、彼等をして過去の覇業に對するあこがれの情を培ひ、英人の統治を顚覆してマーラツタ帝國の再建を忘れしめなかつた。彼等は二百年前の古英雄シヴアジの動功を慕ひ、之を詩にし歌にして吟詠した許りで無く、彼の墓碑を建て彼の爲めに祭禮を擧行して其の功德を稱へた。此のチトパヴアン・ブラーマンの中にバル・ガンガダール・チラーク（Bal Gangabhar Tilark）と言ふ志士が現はれた。彼はボムベイ大學を優等の成績を以て卒業した後、千八百八十年にケサリ（Kesari）（獅子の義）と言ふマーラツタ語の新聞を發行し、之を英語に飜譯したものをマーラツタ（The Maratta）と題して週刊に發行した。ケサリが非常な發行部數に達すると同時に、チラークの政見、印度教經典に關する彼の學識、評論家としての彼の才能及び貧窮せる同胞を救濟せんとする彼の用意等は、忽の中に彼の勢力を甚大のものたらしめた。千八百九十六年から翌年にかけて、ボムベイ地方が饑饉と疫病とに襲はれた時、チラークは防疫委員長のランドを助けて同胞の災厄を除くことに努めて居たが、防疫事務に關し英人官吏

が軍隊の力を以て土民の人權をじゅうりんしたことからチラークは其の機關紙を以てランドの歴制を攻擊し、延いては英人に對する人種的ぞう惡をあほつた。其の中の有名な記事は「シヴアジの話」と題し、シヴアジが長い眠から覺め、曾て自分の建てた國家が英人の處有に歸し、富は奪はれ財力は渇れ、饑饉疫病は相ひ繼いて到り、門閥のブラーマンは投獄され、神聖なめ牛はほふられ、婦人は侮辱されて白人唯獨りばつこするを慨くと言ふ筋合であつた。尙ほ別に彼はシヴアジがモーガル朝の大將アフザル・カンを斬つた英雄的行爲を賞揚し、シヴアジは敵將を斬つたので、少しも私利を計る考は無かつたと言ひ、若し盗賊が家の内には入つて來て而も自分達が之を追ひ出す力の無い場合には、其の戸を閉めて外から火をつける外に法は無いと言ひ、又神はヒンヅスタンの王國の銅板に記された許可をムレンチヤス（外奴）に與へはせぬと言つた。「バーガヴアド・ギーターの至高の域に入つて偉人の行動を考察せよ」とは其の末文の絶叫であつた。此のふう刺的激勵の文章の載つたのは千八百九十七年六月十五日のことで、其の後一週間經つたヴイクトーリア女皇のダイヤモンド・ヂユビリー（卽位六十年祭）の日に、ペイシユワの舊都プーナで、ランドと他の一人の英人官吏がチトパヴアン・ブラーマンのチヤペカール兄弟の爲めに暗殺された。チヤペカール兄弟はプーナの市に印度敎防衛協會（Society for the removal of obstacles to the Indian religion）を組織し、ブラーマンの青年を集めて武術や軍隊敎練を行つて居たものである。饑饉に對する英人の處置に憤慨して居た折柄、チラークの筆に激勵されて、當面の責任者に對し此の兇行を演じたものであつた。兄弟は間も無くたい捕處刑されたが、チヤペカールの犯罪を官憲に密告し、又其の裁判の證人に爲つた者二人は、又協會の同志の爲めに復しう的に殺された。チラークは之が爲めに一ヶ年の重禁錮に處せられ、其他此の事件に關係が有つたと言はれ、後に有名な社會主義者に爲つたクリシユナ・ヴアルマは英國に赴き、ロンドンに於ける印度國民運動の創始者と爲つた。此等の政治的犯罪が抑も現代印度國民運動の表面に表はれた最初の事件である。

然るにボムベイ州に於ける此等チトパヴアン・ブラーマンの反英運動は、印度の國民的自覺に基く革新運動と言ふよりは、マーラツタ帝國と言ふ父祖の覇業を回復して地方的部族の光榮を再現しやうとする尙古的氣分が濃厚であつた。之は彼等がシヴアジの事業を以て理想とし、又チトパヴアン・ブラーマンだけの力を以て此の革命を完成しやうとしたことに依つて知られる。チヤ

ベカール兄弟其他の件に對する英國官憲の斷壓の爲め彼等の氣勢はくじかれたが、後ちチラークは印度の他の方面に起つた各種の國民運動と合體して、全印度の國民運動を成す一要因を作つた。

英國が印度を以て其の直轄とし、首府をカルカツタに置いて之を統治するやうに爲つた爲め、最も深く英國の文化に染まつたものはカルカツタ市の所在地たるベンガル州の住民であつた。ベンガル州は印度中でも一番豐な地方であつた爲め英人のりやく奪を蒙むることも甚しかつたと同時に最も先に英語を覺え英人の智識を吸收したのも亦此の地の住民であつた。彼等は行政廳の屬僚と爲り英人を助けて統治に參與し、之に對して多大の俸給を得たので、彼等の生活は裕福でもあるし、從つて英國に對して忠實でもあつた。彼等は中部印度の主要地に配置され、一面英人の補佐者たると同時に一方には印度同胞の指導者と爲り、準英人を以て待遇せられることに深い得意を感じて、衣食住總て英人の如く生活し英人の如く語つた。此等のベンガリー人卽ち俗にベンガリー・ベーブ（Bengalee Babu）と呼ばれた階級は、英國人を「マイ・バブ」（Mai Bap）卽ち「吾が父母」と敬稱し、其のし好を眞似、又其の思想に追隨した。彼等は又其の息子達を英國に留學せしめ、印度文官（Indian Civil Service）若くば印度衞生部員（Indian Medical Service）と爲る教育を受けしめた。ボムベイのパーシー人と共に第一に印度に於ける英國裁判官及び辯護士となつたのも彼等であつた。斯うした拜英的氣習の當然の結果として、彼等は自國の文明をさげすみ、父祖の宗教をあざ笑ひ、英人同樣に「サヒブ」と敬稱せられることを得々として基督教に改宗するものも多かつた。此の狀勢に憤激したものが、ラム・モハン・ロイ（Ram Mohan Roy）の創立したブラーモ教會（Brahmo Samaj）の同人であつた。此等の反動的分子は英國風の新學を學んだにも拘らず、自己の宗教、自己の習慣に權威を認め愛着を有して、全然英國化することを嫌ふた。無論彼等と言へども、自國印度の宗教其他の文明に幾多の缺點あることを認識して居た。故に彼等は、英語から學んだ智識を自國語を以て認める文學に取り入れることに着眼し、之と同時に自國語の正しい、雅致ある深遠の意義を含む言葉を見出す爲めにサンスクリツトの研究に志した。斯くしてベンガル人の英國化の反動として、新印度國民文化の泉がガンヂスの三角洲に湧き出でた。

ブラーモ教會が印度の英國化を憂へて印度國民性の打成に志したに對し、其の始は自國宗教の大宗たる印度教の汚濁を清める目的に出發して、必然的に印度國民性の自覺に到達した一派が有

る。夫れはスワミ・ダヤナンダ(Swami Dayananda)に依り提唱されたアリヤ教會(Arya Samaj)である。前述べた通りブラーモ教會は新なる印度國民文學を建設する爲めに古代文化を表現するサンスクリットを研究したが、併し彼等は印度教の經典たるヴェダの權威を認め無かつたに反し、アリヤ教會はヴェダの信仰を以て其の第一教義とした。ヴェダの教は宇宙萬有を創造し支配する全智全能の唯一神を信奉する。アリヤ教會は、現代印度教の思想はプラナ派の汎神主義的偶像教に墮落したものであつて、印度本來の思想たる萬有に通ずる絶對唯一神を認識するヴェダの教義と背馳するものであるとして攻擊した。「ヴェダの教は曾て印度の信仰であつた許りで無く又實に世界の光明であつた。印度の黃金時代はヴェダ時代であつた。ヴェダの昔に歸れ、印度教本來の教義に返れ」。ヒマラヤの山峽から下りて來たダヤナンダはガンヂスの野に斯く叫んだ。從つて彼が當初の目的は印度現下の信仰的墮落を救濟するに在つた。然るに彼及び彼の同人が、ヴェダの教義に歸依して絶對唯一神の前に人類の平等を認め、印度の土に育まれた自然の兒は、ブラーマン僧侶達の仲介を排し、神と自己との直接の交渉に依り信仰的生命に蘇れと言つて姓階の打破を叫んだ時、其所に當然の歸着として全一としての印度國民性なる觀念が表現せずには居られ無かつた。印度國民性なるものは他國民性に對する相對的觀念である。故にアリヤ教會の人達が自國の國民性に目覺めた時、その對照として彼等の正面に立つものは、アングロ・サクソンの國民性であつた。そして此等二大民族の交渉點は英人の印度統治と言ふ政治的事實であることを發見した。アリヤ教會が徹頭徹尾宗教的團體たることを主張しながら、斯うした宗教的出發點から政治的歸着點に到着したことは、ダヤナンダ其人が崇高な宗教家たると同時に熱烈な愛國者であつたことにも因るけれども、現代印度教の階級的多面的教義を打破して、至純なるヴェダの一元的教義の上に印度の國民性を歸一せしめると言ふ結論から、當然延長せらる可き道程であつたのである。斯うした關係からして、ダヤナンダの門下には、ラジパト・ライ其他幾多の熱血兒を出し、アリヤ教會は印度政廳の一敵國として、印度の不安(インヂアン アンレスト)の母と目せられるに到つた。

此の外に、ベンガル州ではロイの後を承けたデベンドラ・ナース・タゴール及びラジェンドラ・ラール・ミトラ、マラジュトラ地方ではラネード・ヴイシュニュ・ベンヂト、上印度では回教徒のサー・シード・アーメド・カン、マドラス州では露國婦人マダム・ブラヴアトスキー等の思想は、ベンガルの哲人スワミ・ヴイヴエカナンダやブラヴアトスキー夫人の後を承けたアンニー・ベサント夫

人等の主張と共に英化の風潮に對抗し、主として宗教的及び社會的見地からして印度國民性の覺せいを叫んだ。又之と反對に、親英、英化の氣運の裡から生れ出た印度主義が有つた。其の第一は思想の方面からであつた。即ち普通英人や宣教師の經營する英化教育は印度學徒の間に泰西文學及び思想の門を開き、英人教師達は識らず〳〵の間に自由だとか國民主義だとか言ふ近代思想を注入したが、學生達は英人宣教師等が印度の宗教思想に感歎するを觀て、今更の如く自己の宗教哲學の研究に沒頭し、之が爲め拜英主義から一轉して自國の思想を尊重することゝ爲つた。第二は政治的不滿の原因からであつた。前に述べた樣に印度就中ベンガルの新人達は自ら英人化することに努め、英人が新聞を讀むを見ては彼等も新聞を讀み、英人がクラブに行くを見ては彼等もクラブを作つて之に行き、英人がチャーチに行くを觀ては、彼等は祖先の宗教から改宗して又チャーチに行つた。英人官吏は彼等が印度の習慣氣風に通じて居る關係上、彼等を重寶がり高給を與へて自分達の屬僚として使つた。併し彼等の地位の向上には限度があつて、それ以上は如何に勉強するも昇給され無かつた。彼等が英國の法律制度に通ずること、洋服を着け英語を話すこと、將た又自由思想家たり基督教徒たること等は問題に爲らなかつた。彼等に取つて唯一の登龍門は英國に行つて印度文官の試驗に及第することであつたが、英國政府は此の試驗を受ける年齢を十九歳以上二十一歳までとし、事實上印度人としては遠く英國に渡り困難な科目に應ずることの出來ぬ樣にした。此の意地の悪い政策は、土語新聞に對する偏頗な法律及び英國紡績をのみ保護して印度の產業を虐げる綿絲關稅の附課等と共に印度人の政治的不平を激增した。此等の不平不滿がカーゾン卿の代になり、其のベンガル分割策及び教育令に對する憤激を動機として、四十餘年にわたる「英國統治下の和平（パックスブリタンニカ）」を破裂させた。

印度國民運動の主潮は印度國民議會（Indian National Congress）である。ラジパト・ライの言に依ると、此の國民議會に籍を置いた印度の領袖は僅に二、三を除くと、他は概ね名利の徒であつて、印度の爲めに自分を捨てる底の至誠ある者は無く、從つて眞に印度の國民的運動を起す人々や、若くば之に同情する學生等はこの國民議會とは寧ろ反對的であると言つて居る。併し毎年クリスマスの前後に開かれる此の會合には殆ど有ゆる印度政界の名士が參加するを常として居る。ゴケールやダダバイ・ナオロジーの樣な溫和派が最初に參加し、其後チラークやアラビンドラ・ゴーシュの樣な急進派も參加し、ベサント夫人も來れば、近くはガンヂーも加つた。印度國

民運動の大潮主流として、印度の輿論が如何なる方向を取つて居るかは、此の國民議會の言論及び議決を觀れば判明する程重大な國民的機關である。然るに此の印度國民的自覺の大宗とも言ふ可き議會が、英人アラン・オクタヴィアン・ヒューム（Allan Octavian Hume）の發意に依り創設されたことは、國民運動史上の一奇と云は無ければならぬ。ヒュームは元來印度政廳の文官で西北州收入局に勤めたこともあり、退官後は專らシムラに居て天性の自由に對する愛好心から印度人の間に英國風の急進思想を鼓吹して居た。其後「英國統治下の和平」（The Pax Eritannica）は印度の經濟問題を解決するに何等の效用の無かつたこと、印度農民は饑饉と絶望の底に沈んで居ること、印度政廳は人民と何等の接觸を持つて居ないこと、印度の政治が印度の代表的分子に任せられるまでは印度民衆の安寧は保證さる可きもので無いこと等を切實に感得して此の趣旨を印度志士の間に宣傳した。千八百八十五年に、ヒュームは印度總督ダッフェリン卿（Lord Duffrin）と話合の上印度國民議會を開催した。ダッフェリンの考は、印度行政の最長官として、印度國民の意向を知ることの出來ぬは非常な不便であるから、一種の私的會議機關を設けて民意の在る處を知ると同時に、傍ら人民の不平を漏す安全辨と爲す意圖であつた。自由主義者にして同時に愛國者たるヒュームの考は尙ほ其の以外に在つた。彼は英帝國を保全するには印度を英皇帝の王冠の下に確固不易の地位に置くに在ることを觀じた。夫れと同時に、饑饉、貧困其他の不安に驅られて印度の民心は非常に嶮惡の調を帶びて居ることを感得した。彼は印度國民議會を創設することに依つて祖國英帝國の危機を救はんことを期したのである。此の意味に於て印度國民議會の創設は、英國側の利益を第一義に置き、印度國民の得失を第二義に置いたものと言はれ得る。併しヒュームは至誠自由を愛好する志士であつた。彼は決して之を以て印度國民をまん着し、彼等の權利を伸張する爲めと稱しながら英國のみの利益を圖る如き卑劣漢では無かつた。故　彼は千八百八十三年にカルカツタ大學卒業生を激勵して次の樣に言つて居る。

「……個人に在つても將た國家に在つても、總ての重大な進歩は內部から起らねばならぬ。諸君の祖國が第一番に求めねばならぬ處のものは、此の祖國の最も教養あり智識ある心靈にして且つ其の最も慈愛する子供なる諸君に對してゞある。余の如き外人で印度及び其の國民並に其の最も愛するものを愛せんとするも益無きことである。外人は印度及び其の利益の爲めに時間、金及び思想を與ふるも益無きことである、將た又苦鬪し犧牲を出すも無益のことである。外人

は勸言、忠告を以て助け、又其の經驗才能及び智識を與へることも出來る。併し外人は國民性の本質に欠けて居る。從つて眞の働は永久に此の國の國民自身に依つて爲されねばならぬ。」

尙ほヒュームは次の如き手紙を與へて居る。曰く、

「諸君は此の邦土の結晶である。印度の精華たる諸君の中に於てさへ、祖國の爲めに充分な犧牲的精神を有し、祖國の爲めに充分なる愛着及び尊榮を感ずる五十人が發見されぬならば、將た又祖國の爲めに身を惜まぬだけの至純にして公正なる愛國心を以て將來祖國の爲めに盡すものが無いならば、最早印度には何等の光明も無い。」

と。彼は眞心から印度に同情を寄せ、其の自由の爲めに慮つた。此の目的の爲めに千八百八十五年十二月末、ボムベイに於て始めて印度國民議會を開くに當り其の趣意書に、

「當議會直接の目的は、

(a) 國民的進歩の事件に與かる最も熱心な勞働者をして相互に面識有らしめ、

(b) 次年内に計畫さる可き政治的運動を討論議決し、

(c) 間接には、此の會議を以て植民地議會のほう芽となし、都合好くば數年内に、印度は或る種の代議體に尙ほ全然不適當であるとの推定に對し爭はれ難い反證を作るであろう」

との意味を認めてあつた。此の當初の會合に參加したものは主として實業家、法律家、學校長、新聞記者などより成る七十二人の代表者であつた。此の人達は前述べた英人の教育を受けて英人化し、英人より多大の俸給を給せられ、又致富の機會を與へられて相當の資產を作り上げながら、夫れ以上の發達は英人の政治的並に社會的モノポリーの爲めに止められて居るを不滿に思ふ結果英人から學んだ代議政體の樹立によつて自己の向上を計るを目的とした。次年の會合はカルカッタで開かれ、參加者は四百四十名あつた。其後每年クリスマス季節を期して印度の主要都市に開かれ、其の會員の數も都會地許りで無く農村にまで及んだ。併し此の表面的の隆盛は必ずしも內的充實を語るものでは無かつた。それは國民議會に參加する印度人に、眞に母國の爲めに盡すと云ふ熱烈な犧牲的精神が欠げて居た故である。彼のダダバイ・オオロジー及びゴーケールの二人は別とし、他の會員は言はゞ片手間の仕事として國民議會に參加して居た。彼等に愛國的精神が無かつたとは言はない。併し彼等は自己の一身を犧牲にするまでの決心が無かつた。又彼等は自分の財產を提供せぬでも無かつた。併し彼等は自己の生活を保證した餘分に於てのみ財產的貢獻

を爲したに過ぎ無かつた。一方政府當局の方では總督ダッフェリンが國民議會の創設を提議して置きながら、之に依つて印度民衆を利益しやうとする考は餘り見受けられ無かつた。少くも印度民衆の爲めに計る具體的手段には一切觸れ無かつた。ヒュームは此の形勢に鑑み、印度國民の自由を樹立するには從來の方法は効果の少いものであることを知り、サー・ウイリアム・ウエッダーバーンの援助を得て、ゴケールやナオロジー等僅少の同志と共に從來の方法を一變し、專ら印度民衆の覺せいに向つて力を注ぐ方針を取つた。斯う爲つて觀ると、印度政廳とヒューム等の運動とは當然利害を異にする樣になり、親和は非難と爲り、聲援はちよう罵と爲り、ダッフェリンの如きはカルカッタで開かれた正餐會で、國民議會を「無限小の少數」とちよう笑し、又サー・オウクランド・コルヴィンは「反議會教會」(Anti-Congress Association)を組織し、國民議會を時勢に適合し無い不忠な團體だと攻擊した。此等の事情の下に、印度國民議會は創立以來約二十年間は、毎年欠くこと無く開催され、且つ其の會員の頭數が增加したにも拘らず、實質的權威は微弱であつたが、千九百四年カーゾン卿の治下に、ロシアに對する日本の勝利及びベンガル州分割等を動機として、活ばつはつ地な新國民運動と關聯して燃え上つた。

第四章　「英國統治下の和平」より

「印度の不安」へ

前述べた樣に英人の爲めに最も甚しく其の富をりやく奪されると同時に、英人の印度侵略の根據地とされたものはベンガル州であつた。又其の住民は好く英語を話し且つ英人の氣質を了解した爲め、印度統治上缺ぐことの出來ぬ重寶なものとして高給を受けて英國官廳の屬僚に採用された。併し彼等の身分には制限が置かれて居た。彼等は或る一定の地位以上に進むことが出來ぬと共に、彼等を受け入れる地位には限があつた。彼等の息子達はカルカッタ若くばロンドンに於て新しい教育を受けたが、官吏とし、辯護士とし、其他公人としての職業は既に多くふさがれて居た。のみならず、彼等唯一の登龍門たる印度文官試驗の如きも、受驗資格を限定されて印度人としては事實上受驗することの出來ぬ樣にされて居た。止む無く彼等の多くは學校の教職に就き僅の俸給に依つて生活せざるを得なかつた。要するにベンガル人は英國風の教育を受けるものが多

く爲つた結果、地位と收入とに於て充分に酬いられ無くなり、從つて當代の政治即ちブリチッシ・ラージに對して不滿を抱かざるを得無くなつたのである。元來ベンガル人は印度人中で最も情弱の民と呼ばれ、ラジプトやマーラッタの武族其他西北州の住民などからは常に其の怯だをちよう笑されて居た。然るに彼等は英人教師より泰西風の教育を受け、泰西の歴史を學び、其他ミルトンやバークやマコーレイ等の著書を讀み、斯くて彼等は自由、ナショナリチィ乃至自治の何たるを解し、母國の愛す可く道の殉ず可きを知つた。カルカッタ大學の卒業生で俗名をナレンドロ・ナース・ダッタ(Narendro Nath Datta)と言ひ、印度教(ヒンツー)の教名をスワミ・ヴイヴエカナンダ(Swami Vivekanunda)と言つた有名な愛國者が現はれ、宗教の力、精神の力を以て世界を征服するは印度の使命であると叫んだ。「起てよ、印度！、お前の精神を以て世界を征服せよ。惡しみを征服するものは惡しみでは無い。唯愛の力のみ惡しみを征服することが出來る」と言つたのは、最近彼のガンヂーが唱へた「精神力」(Soul force)及び「眞理の正觀」(Satyagrahas)の先驅を爲すものと觀る可きである。彼の言葉は深くベンガル青年の胸憶に食ひ込み、青年達は彼の言句を書齋の壁にはり付けて朝夕之に親しんだ。千九百二年にヴイヴエカナンダが死んだ翌年、バリンドラ・クマール・ゴーシュ(Barindra Kmar Gohsh)と言ふ青年が英國から歸つて來てベンガル青年の間に革命熱を鼓吹した。彼の兄で有名なアラビンドラ・ゴーシュ(Arabindra Gohsh)が教育家たり思想家たると同時に革命家たるに對し、弟のゴーシュは、革命の思想を直ちに鐵火の行動に飜譯せんとする武斷的革命家であつた。兄が急進派たるに對し弟は暴進派であつた。バリンドラは爆彈と拳銃との力を以て英國の政治を覆さうとし、此の思想を青年の間に說いたが、自由と國民性の觀念に目覺めたベンガルの新人、俗にバードラロク(Bhadralok)と呼ばれる人達も、未だ直樣バリンドラの主張を實行しやうとはし無かつた。そこで彼は一先づ其の兄アラビンドラが奉職して居た緣故のあるバロダに去つて時機の到來するを待つた。其中に日露戰爭が起り、日本の戰勝は印度國民の觀念に電擊の如きショックを與へた。

ブラーマンは他の姓階に對して專横を極めたが、白ブラーマンたる英人は印度國民全體に對して横暴を專にした。白ブラーマンと印度國民との間には絕對越ゆ可からざる先天的優劣の差が存在するものとせられて居た。然るに小さい黃色の國民たる日本が、英獨さへ恐れる白人の國ロシアに勝つたといふことは、英人必ずしも印度人に比して優勝の民族では無いと言ふ實物教育を適

確に示したものであつた。鴨綠江、遼陽、旅順口、沙河、奉天及び日本海の戰報が到る毎に印度全土は湧き返へる樣に歡喜した。印度の古老は人心の高潮したこと千八百五十七年のミュチニイ以來觀無いことであると驚いた。「印度は救はれる」。志士は叫んだ。「財產、名譽、血潮、生命、此等を犧牲に供することに依つて我が印度は救はれる」。彼等は最早十の一にも足らぬ英兵に敗れたプラツシイ當時のベンガル人の子孫では無かつた。のみならず、財產、身體、生命に支障の無い範圍に於て印度國民の權利を唱へ、又は此等の運動に依つて印度政廳の下に公職を獵ろうとした印度國民議會の名士達とも、其の意氣血性に於て天地の差が在つた。國民議會の創立に參加した印度の有志者は政府當局の奬勵を受け其の保護の下に行動したに反し、新な國民主義者は政府の意志に反し政府當局をボイコットしながら運動した。前者は官職を要望した、後者は官職には一こだに與へ無く爲つた。前者は政府の恩典に與ろうとした。後者は之を拒絕した。前者は評議會を要請した。後者は全然之を無用視した。前者は英國官憲、英國國民に訴へた。後者は自國民の愛國心及び自國の護神に訴へた。前者は英國人を頭目としたが後者は純然たる印度人自身に依り指導された。前者は多少でも自身の榮達を妨げる樣なことは避けて爲無かつたが、後者は名利の機會を毒物の樣に投げ棄てた。前者は洋館に住み、華美な應接室にビロウド張りのいすにより、古雅な洋服を着た從者に侍かれ、珍味佳肴を前にして知事や奉行などと歡笑したに反し、後者は先に持つて居た少しの財產を捨て、洋服をドーチ(Dhoti, 土產木綿にて製せる猿股の如きもの)に代へ、上着(コート)をチヤプカン(Chapkan)やクルタ(Kurta, 土產のシヤツ樣のもの)に代へ、オヴアーコートを毛布に代へ、なめし革の靴を土產の短靴に代へた。前者は繁榮、地位、滿足を總て英國の統治に賴り、從つて英人の恩義の下に繫がれて居たに反し、後者は此の恩義を避ける爲めに貧窮、困苦の道程を選んだ。斯うした差異からして、前者が二十餘年の間にゴケール及びダダバイの唯二人の獻身的義士を出したに對し、後者は僅に二ケ年の間に幾百幾千の殉道者を出したのは異とするに足らぬ。彼等は此の意氣を以て總督カーゾン卿の政策に對抗して起つた。

カーゾン卿は彼の後任者たるモーレー卿が「吾人はカーゾンに優る總督を印度へ送ることは不可能である」と言つた如く、非常な識見と精力とを有する有爲の政治家である。彼は印度に着任するや、直ちに其の教育制度に大なる欠陷の在ることを發見した。彼の前任者たるリポン及びダツフエリンが遺して行つた教育制度は、印度の專門學校以下卽ち第二流の學校に取つて善良なも

のでは無かつた。特に文化の進み教育の盛なベンガル州に於ては此の制度に伴ふ弊害が最も甚しかつた。此の制度に依るとカルカツタ大學シンヂケートが同州の英國風の學校を統轄し、又印度普通文官に就職しやうとするものの爲めに行ふ試驗の標準を定めることに爲つて居たが、事實上此の管督は地方委員に任せられて、大學シンヂケートは直接何等之に關與し無かつた。然るに見識の低劣な地方委員等は、徒らに校舍の構造を粗末にしたり、又校長以下職員の俸給を値切つたりして少しの經費の節減を計り、又教育方針の如きも、單に文官試驗に應ずることのみを目標として何等學徒のテリヂナリチーを啓發しやうとしなかつた。政府は又「教員に、規律若くば健全な道德基調を維持する勢力の無い學校に經費を注ぎ込むも無益である」と言つて何等改善の道を講じやうとし無かつた。之を印度人の側から見ると、此等の學校教育は餘りに文學的方面に力を注いで人生の競爭に適する樣に學徒を仕込まず、英語及び泰西思想にのみ重を置いて印度の民族語及び固有文學を等閑に附し、教育の眞價を忘れて詰込主義（Cram）を奬勵し、其他英國から第三流の人物を招聘して之を校長に任じ、之より遙に優秀な印度人教師を其の配下に置いて薄給の爲め貧困に苦しましめる等の不平が有つた。それでカーゾンが此の教育制度に關する改革の意圖を發表すると、彼の統裁する大學委員會（University Commission）は各方面からの建策建議を以て埋められた。此等の建議の趣旨は大別して、印度の志士側の意見と在印度英國人側の主張とに分つことが出來て、二者は全然異つた見地からして、教育制度の改善を希望した。印度人側の要望する處は普通學校及び專門學校を增設し、教員數を增し、俸給を增し、商工學校の準備を豐富にすること等であつた。就中彼等が切望して止ま無い點は、此等の教育を大に國民的として且つ實際的ならしめることであつた。之に反し在印度英人側は、印度人が教育を受ける機會を少くし、之が爲めには大學の標準を高め、私立學校に對する政府の管督を嚴密にし、印度青年を拘束して規律と服從とに屈し易い樣にすることを要望した。カーゾンは兩者の意嚮を入念に討究した結果、遂に印度の學校教育に對する政府の管督を緊切にし、教育に關する印度人の自由裁量の餘地を一層局限することに決心した。印度の有志は之を以て、カーゾンは印度の子弟が新教育を受けることを困難にし、之に依つて國民的感情の高潮するを防ぎ、延いて國民運動の進行するを妨げやうとするものと爲した。當時カーゾンがシムラに於て秘密教育協議會を開き、而も之に一人の印度人をも參加せしめなかつたことは、一層此の疑念を深からしめた。且つカーゾンが此の協

議會の討議に基いて立法した大學條令は、印度の教育制度を全然政府の支配下に置くものであつた爲め、カーゾンの發表以來彼の改革事業に望を屬して居た印度の志士達は深く失望すると同時に、カーゾンと自分達との間には根本的に目的の差違有ることを發見した。彼等は考へた、自分達は自治と自由とを欲するのにカーゾンは拘束を欲して居り、自分達は國民的發達を欲して居るのにカーゾンは之を妨害しやうとして居り、自分達は印度の社會的統一を希望して居るのにカーゾンは之を分裂せしめやうとして居り、自分達は思想及び地位の獨立を欲して居るのにカーゾンは永く印度に對する英國の後見を維持しやうとして居ると。斯くまで意見の相違する以上、カーゾン及び其の屬僚に信賴し又は屬望することは極度の愚であると考へ、ベンガルの有志達は英人官僚とは沒交渉に、若くば之に反抗しても自己の目的を達成しやうとした。

印度國民議會の領袖も此の形勢に奮起してカーゾンの政策を攻擊した。カーゾンは彼等の活動を「瓦斯」の樣なものだとちよう笑して相手にし無かつた。そこで國民議會では英本國の輿論に訴へることを決議し、ゴケール及びラジパト・ライの二人を代表としてロンドンに赴かしめた。然るに英國の公衆は印度の問題に就いて案外に冷淡で印度國民の代表者の言ふ處に別段耳を傾けやうとし無かつた。ラジパト・ライは歸來彼の同胞に告げて、英國國民のデモクラシイは自分の出來事丈でも充分忙しくて、印度の事を見返る隙が無い。英國の新聞紙は印度の向上を援助する意志無く、又英本國に於ける在印度英人の信用と勢力とは案外に強くて印度國民議會の力を以ては之を覆へすことは不可能であると言つた。「若しも諸君が眞に祖國の爲めに圖ろうとするならば、諸君自身に自由の爲めに一擊を加へ、且つ諸君の熱誠且つ適確な證據を示さなければならぬ」と言つたのは、其の復命の骨子であつた。

ベンガルを中心とする印度志士の躍起運動にも拘らず、自信の強い剛腹なカーゾン總督はカルカッタ大學評議會其他の席上で、此等の運動者をを、く病な、口先許りの、實行の伴はぬ輕、てうな非愛國者と笑ひ、一切彼等の行動に頓着無しに千九百五年十月此の紛擾の最中に彼のベンガル分割の處分を決行した。抑もベンガル州は人口實に七千八百萬を包有し、ガンヂス河のデルタに位して地味は肥え、且つカルカッタといふ印度第一の大都會の在る最も重要な州である。英人當局に言はせると、此くの如き地積と人口とは一行政區域として統治するには餘りに大であり、殊に其の東半部はガンヂスの分流が網の樣に分れて、雨期の交通は殆ど絶すると言はれる程であ

るから、政府は單純な行政上の都合から之を分割したものであると。然るに印度人から觀ると之は英人當局の口實に過ぎ無いものであつて、是れ丈けの大州が國民的自覺にさめて一致の行動を起すは、英人當局に取り頗る恐る可きことであるから、之を分割して其の勢力を弱めやうとするに過ぎないと。それでカーゾンが舊ベンガルとアツサムの二州を併せて置いて更に之を西ベンガル、ビハール、オリツサ、東ベンガル及ひアツサムの五州に分つ意圖が、公布に先つて民間に漏れた結果、既に其年の八月にはベンガルの領袖達はカルカツタ市會堂に集つて「分割計畫に對する實際上の抗議」として英國製貨の一般的ボイコツトを宣言し、いよ〳〵此の分割が公布された十月十六日には、ベンガル州の無數の民衆はかまどの火を消し、悲痛の表情をして川や貯水池へ行つて水ご離を浴び、友愛及び國民的統合の表示として神聖な布切ラーキ（Rakhi）を互の拳に結び付けて分割反對の示威運動を行つた。殊に此の新區畫に依ると。東ベンガル州では回教徒が多數を占めることゝ爲り、印度教徒は萬事回教徒の爲めに壓抑せられ、將來若も自治制が布かれて各般の選擧が行はれることゝなれば、投票數の關係から印度教徒に取り容易ならぬ不便を來たす恐有るが爲め、ベンガル以外の印度教徒も皆此の分割に反對し、ベンガル州に始つた英貨排斥に對しては全國から猛烈な聲援を送つた。

ここに注意す可きことは、此のボイコツトからして圖らずも印度國民運動の一大標語であるスワデシ（Swadeshi）即ち產業自立の運動が芽差したことである。本來此のボイコツトはベンガル分割の報復手段として講ぜられたもの、即ち之により英國の對印度產業に損害を與へ、英人の反省を促してベンガル分割の處分を取り消さしめ樣としたものである。從つて此の運動の當初に於ては、ボイコツトは「分割が取り消されるまで」と期限が附せられて居た。然るに之に着手して觀ると、其の實際的効果は豫想以上に大であつて、たとへ英本國マンチエスターの產業の根底には影響を及ぼすことは出來無かつたにもせよ、英國の輸入商會や之と取り引をして居た大きなマルヴアリ（Marvari）即ち印度の卸賣商會は相ひ繼いて倒れた。從つて之に伴ふ損害は頗る莫大であつて、英字新聞「イングリツシマン」（The Englishman）が言つた通り「ボイコツトは武力の革命以上に英國の印度に對する關係を沈滯せしめるもの」であることが知られた。斯うした英國貿易の打擊及び英國制品の不買は、當然の結果として久しく其の影を潛めて居た印度の自國產業を復活せしめることと爲つた。殊に印度第一の產業であつた紡績は各家庭に於て行はれ始め

た。固よりスワデシは此時完全に達成されたものでは無く、僅か數年の後復た〳〵マンチエスターの輸入品に壓倒せられたが、併し最近彼のガンヂーが排英運動の武器中最も威力あるものゝ一とした產業自立は斯うして既に其の源を發して居たのである。

其年の末ベナレスで開かれた印度國民議會は未曾有の活氣と紛騷とを呈した。英國皇太子の印度訪問に對する歡迎、敎育問題、ベンガル分割に對抗する準備、スワデシ運動、及び英貨排斥等に就いて穩和派と急進派との間に激烈な意見の衝突が有つた。溫厚老實なゴケールは其年の議長として深く此の形勢を憂ひ、マーラツタやパンジャブ出身の領袖連やベンガル出身の有力者の間に說いてわづかに事無きを得た。此の千九百五年の會期はスワデシ及びスワラジ（Swaraj 卽ち自治）といふ印度國民運動の重大な標語が有力者の間に公然提唱されたことに依つて記憶す可き年であると同時に、スワデシと相ひ並んで國民運動の二大手段たる消極抵抗（Passive resistance）の思想が「印度不安の父」と呼ばれたチラークに依つて高調されたことは、印度國民運動史上大書すべきことである。當會議は消極抵抗に就いて何等具體的決議を爲さ無かつた。併しチラークは、官廳及び之に準すべき公署をボイコットすることに依つて印度國民の自助自尊の時期を開こうと決心した。抑も此の消極抵抗の目的は第一には印度國民が治者たる英人を萬能の者と信じて居る許りで無く、英人は印度人に對して博愛的觀念を持つて居ると信じて居る其の誤解を打破し、第二には祖國の將來の爲めには艱苦を忍ぶといふ犧牲的精神及び覺悟と共に、自由を愛好する感情を造るに在つた。言葉を換へていふと、此の運動の第一の目的は、共同の利益を增進するが爲めに共同的組織の支持を以て印度國民に强き公民的觀念を造り、斯くて彼等を漸次に自由市民のヨリ重大な責任に訓練し、第二には、國民運動の領袖を人民と接觸する地位に置く政治的組織を全國に布き、之に依り政府當局に民論の權威を認めしめて漸次民權の發達を期するに在つたのである。當時此の消極抵抗の手段はベンガル州に限られたが、其後十餘年を經た千九百二十年前後に到り、ローラット法案其他を動機とし、ガンヂーの指揮の下に排英運動を起した時には、全印度にわたる一大旋風の如くに擴がつた。

ベンガルの英貨排斥運動には多數の學生が參加し、各商店の張番又は示威運動は主として此等學生に依つて行はれた。英國當局は之に對する報復手段として此の運動に加盟した學生を退校處分に處した。ベンガルの領袖達は、一には此等の處置に對する自己の責任上から、又二には國民敎

育と言ふ公の見地から、政府の管督を離れた國民大學を創立して印度の青年を收容教育することを決議した。此際彼等の意圖は少しも政府に反抗する考は無く、唯單に政府の管督から獨立し、國民自身の管理の下に、印度國民を本位とする各種の教育組織を形造るに在つた。此の趣旨に準じて文學、科學其他各種の專門的教育を完備し、且つ語學も從來の地位を變換して英語を第二位に置き、ベンガル語及びサンスクリットを第一位に置き、回教徒學生に對してはウルヅ語、ペルシア語及びアラビア語を首位に置く方針であつた。此の計畫の中心に立つて、印度國民の自覺を其の教育に依らんとした人物は、博學にして堅忍なアラビンドラ●ゴーシュ其人であつた。

教育制度の變革とベンガル州の分割とが、此の樣な紛騷を卷き起して居る間に、更に其の裏面に於ては一層嶮惡な潮流をみなぎらして居た。先に形勢の不利なのを觀て一先づバロダに去つたバリンドラ●クマール●ゴーシュはベンガルに歸つて來てバードラロクの間に盛に革命を皷吹し、チラークもボムベイから馳せ加はり、得意の辯舌と筆力とを振ふて革命の思想を直ちに行動(カーマ)(Karma)に飜譯す可きことを激勵した。バードラロクは印度教徒の母で破壞を表徵する母神カリの名を呼び、其の神像の前に英人政治の顚覆を計つた。彼等は又ベンガル人バンキム●チヤンドラ(Bankim Chandra)の書いた小說を愛讀した。小說の筋は熱血な印度教の僧侶(サニヤシス)(Sanyasis)の一隊が千七百七十二年の饑饉の節山から下りて饑民の群を合せて大集團と爲り、英人の軍隊と衝突して勝利を得る經緯を書いたもので、其中にある悲歌の一節は「母國よ(バンデマタラム)」(Bande Mataram)の名を以て、宛も印度國民運動のマルセーユ進軍曲の樣に合唱された。斯うした氣運の下にベンガルには幾多の秘密結社が作られた。其の主なものは、ダッカの國民學校(ナシヨナルスクール)の校長ブーリン●ベハリ●ダースの建てたダッカ●アニユシラン結社(サミチ)を始め、西ベンガルのマダリプール團、ジヤチン●ムクハルジの一派、サチツシ●チヤクラバルチを首かいとする一團、シヤンダルナゴール團、ベビン●ガングリの率ゆる一團等であつた。別けても有力なのはダッカのアニユシラン●サミチで、其の勢力は全ベンガルを蓋ふて遠くバンジヤブやブーナ地方にまで及び、東ベンガルだけにも五百の支部を有つて居た。此等の諸結社はアラビンドラ●ゴーシュのあつ旋により、千九百六年に聯合してベンガル革命協會なるものを設立した。又バリンドラ●クマール●ゴーシュは、其の友アビナーシユ●バータチヤルジ及びブーペランドラ●ナース●ダツタ等と圖つて革命主義の新聞「新世紀(ユガンタール)」(Yugantar)を發行して革命協會の機關紙とし、盛に英人に對する人種的ぞう惡をあほつた。

千九百五年、此の紛騷の際中にカーゾン卿が印度總督を辭してミントー卿が其の後に任命された。從つて政策にも多少の變化があつた。即ち前者が高壓一點張であつたに對し、後者は高壓と和解とを併用した。併しベンガルの大勢は少しも緩和され無かつた。辯者は舌のただれるまで、文士は筆のちびるまで、國民運動の鬪士は擧つて論壇に奮戰した。ラジパト・ライの言つて居る通り、千九百六年及び同七年は、政府と民黨との間に「綱びき」が行はれた。ベンガルを始めボムベイ、パンジャブ、ユナイテット州、マドラス及びセンツラル州等の各州では多數の新聞が訴追され、之に關係ある有志は投獄された。英人に對する經濟的、政治的乃至社會的のボイコットは公然宣傳され、見張も依然行はれた。併し彼等は尙ほ容易に武器を使用する直接行動に出やうとはし無かつた。然るにアリヤ教會の領袖で國民運動の名士である彼のラジパト・ライが突然英國官憲の手に捕へられ、パンジャブ州の同盟罷工をせん動して暴動化しやうとしたこと、及びアフガン王を誘引して印度に攻め入らしめやうとしたと云ふ嫌疑の下に、何等の審判も無く六ケ月の追放に處せられたことは、全印度の愛國者を激こうせしめ、國民運動者は、消極抵抗運動は秘密宣傳と實力の使用とにより支持せられ無ければならぬことを議決するに到つた。窃に武器を貯へ、軍用金を徴集して居た前述の秘密結社も、ライの追放以後初めて英人に對して鐵火の直接行動を取る樣に爲つた。彼等は破壞の母神カリの前に羊をほふつて結社と首長に對する服從とを誓ひ、印度の母國と同胞とに不利な英人官吏を初め、いやしくも同胞を裏切る內應者は一切之を暗殺の目標とし、又軍用金を集める手段として、彼等は覆面を着け團隊を組み、秘密の相言葉を使ふて富豪の邸宅に押入つた。ライの追放以來東西ベンガル州は、カルカッタ及びダッカの二市を中心として、斷壓と暗殺、强盜と死刑、密告と報復とを碧血の色に彩つた。

千九百七年末スーラットで開かれた國民議會はチラーク及びアラビンドラ・ゴーシュを頭目とする青年急進派と、ゴケール及びスレンドラ・ナース・ベーナージーを領袖とする穩健派との二ツに分れ、激論の末遂に腕力を以てする爭鬪まで演出された。急進派は、此の分裂は要するに政府が穩和派をろう絡した結果であると觀察した。それか有らぬか、此の分裂後幾日も經た無い中に、急進派の領袖は殆ど皆たい捕された。彼のチラークは檄關紙で英人に對する暗殺をせん動した故を以て六ケ年の禁錮に處せられた。アラビンドラ・ゴーシュは英國皇帝に對し宣戰した共犯として捕へられ、僅に證據不充分の故を以て釋放され、ベピン・チャンドラ・パールも六ケ月の禁錮に處

せられ、マドラス方面の首領チダムバラン・ピライは六ケ年、ユナイテット州の回教徒首領アブール・ハサン・ハスラート・モハニは一ケ年の禁錮に處せられた。又翌千九百八年にはベンガルの領袖九人は一時に捕へられて流刑に處せられた。

此等諸頭目の處刑は青年革命黨員を憤激させ、首領を失つたが爲めに却つて彼等の士氣は奮ひ、英國高官に對する暗殺は不斷に計畫された。ベンガル州長官の如きは三度以上も危く殺されやうとし、總督ミントー卿はアーメダバドで要擊され、印度事務大臣モーレー卿の政治秘書官カーゾン・ウイリーはロンドンの劇場で銃殺され、其他檢察官及び縣知事等に對する暗殺は頻々として起つた。從つて斯くの如き暗殺を決行するが爲めに要する武器爆彈の密造、密輸入、窃盗、りやく奪は限無く行はれた。英國政府の命により調査報告されたローラットの反亂報告書（Report of Sedition Committee）を讀む者は此種犯罪の無數なのに驚くだろう。流石剛腹な英人も「英國統治下の和平」の自贊を捨てて、「印度の不安」を新な標語とするに到つた。クライマックスを過ぎて千九百十年は稍鎭靜し、其の翌十一年には英國皇帝が印度を訪問し、モーガル帝國の舊都デリーで大朝覲式を擧げた際、ベンガルの分割を取消すと同時に印度の首府をカルカッタからデリーに遷す可きことを宣布された。是れ疑も無く不とう不屈な印度國民運動の勝利であるとして國民主義者の喜は一時非常なものであつたが、印度の自由を欲する彼等が到底之を以て滿足す可きはずが無かつた。翌千九百十二年十二月總督ハーヂング卿がデリー城への入城式の途上其の馬車に向けて爆彈を投げたものがあつた。馬車は粉碎され從者は死しハーヂング總督はひん死の重傷を負ふた。犯人は逃走して未だに捕へられ無い。之が爲め國民運動者の活動は復た活氣付き、千九百十三年を經て同十四年には歐洲大戰の時期に入つた。

歐洲大戰のほつ發は印度國民運動の極左黨に取つては千載一遇の好時機であつた。彼等は英國が歐洲戰場の輪ゑいに全力を擧げて居る間に獨逸と通謀して印度の獨立を謀らうとした。是より先ハル・ダヤル（Har Dayal）と言ふデリー生れの青年でラホール大學を卒業した非常な天才がラジパト・ライと親密な交際をして居る中に、英國官憲の爲めに壓迫されて米國へ逃れて行つた。彼は在米印度人の間に排英熱をあほり、同志の間に「新世紀文派」と名付ける結社を作り、又「ガーヂル」といふ新聞を發行した。彼の下には印度教徒のラム・チヤンドラと回教徒のバルカツーラといふ二人が、祖國の爲めには宗派信條の如何は問う處で無いと言ふ見地から共に參謀として彼

を補佐して居た。然るに彼等の行動が餘りに激越なので、千九百十四年三月に米國官憲はハル・ダヤルを國外に放逐した。ハル・ダヤルはスウイツツルを經て伯林に入り、印度タミール人チエム・バカラマン・ピライが獨逸大本營との了解の下に組織して居た「印度國民黨」に身を寄せ、其後チヤタラバルチやヘラムバ・ラール・グプタ及びハル・ダヤルの參謀バルカツール等の有名な革命黨員も之に參加した。在米ガーヅル團はヘム・チヤンドラが率いて居た。當時獨逸參謀本部の對印度計畫は、(一)印度回教徒をそそのかし、內外呼應してアフガニスタンから印度西北境を衝き、(二)在米ガーヅル團及びベンガル革命黨と連絡を取り、一方ベンガル州に於て擧兵すると同時に、他方ではシヤム國境よりビルマに侵入する方針であつた。此の方針の下に、バタヴイアに來て居た獨逸人テオドル・ヘルフエリツヒとベンガル革命黨及び在米ガーヅル團との間には武器の輸入其他各種の密謀が行はれた。殊にベンガルの秘密結社では擧兵の部署を定め、鐵道及び鐵橋破壞の受持を割り當てる等、計畫頗るち密に具體化せられて居たが、諸種の手違ひから實現の運に到ら無い中に英國官憲に發見されて水泡に歸した。之と前後して計畫されたアフガニスタンのカブールを策源地とし、獨逸を後援としてパンジヤブに攻め入ろうとした回教青年の陰謀及びマーラツタ・ブラーマンのヴイシユニユ・ガネシ・ビングリイやベンガル革命黨の有力者ラーシユ・ベハリ・ボースを連繫して、パンジヤブの首府ラホールを中心に計畫されたシーク教徒、アリヤ教會の急激分子聯合の大陰謀も事前に發見された。

此くの如く武力を使用する大仕掛の陰謀が引續き計畫されるので、英國政府は大戰中に「印度防衛條令」(Defence of India Act) を制定して之が鎭壓に努めた。大戰終結後、革命的陰謀の危機が尙ほ去ら無い中に此の防衛條令の有効期間が盡きやうとするに際し、英國政廳は之に代る可き法令を制定した。之が有名なローラツト條令である。此のローラツト條令が法律案として提出された頃から、全印度は其の人權を無視する法の趣旨に對し非常な反抗的氣勢を示したが、其の手段は鐵火の暴力を捨ててカンヂーの消極抵抗(パツシイヴ・レジスタンス)愛の力 (Soul force) 又の名をサチアグラハと呼はれる信念的行爲を武器とする時期に入つた。

第五章　印度國民運動に於ける印度教徒と回教徒との關係

印度總人口三億二千萬の中、印度教徒は二億三千萬を占め、回教徒は之に次ぐ大數で七千萬と稱せられて居る。回教徒の祖先は國外から印度教徒の國に侵入して來たものであつて、彼は最近まで全印度の治者であり、從つて印度教徒は被治者であつた。英國統治（ブリティッシュラージ）の下に現代の思想其他最新の智識を受け入れたものは印度教徒の一部であつて、回教徒の最多數は昔ながらの頑迷な信仰と生活とに日を消して居る。ブラーモ教會（サマージ）やアリヤ教會（サマージ）に屬する小數の會員を除く他の現代印度教徒は皆多神偶像教であるに反し回教徒はアラーの唯一神を信奉する。此等の頭數上、歴史上及び思想信仰上の相違から印度教徒と回教徒とは正面的に對立する印度の二大要素である。印度教徒が神として崇拜するめ牛を回教徒が神前の犧牲にほふるといふ單な儀禮上の反感から年々印度内には幾多の闘爭が行はれる。印回兩教徒の反目は、印度國民運動の一大事實であり又一大障が

いである。

千八百五十七年のミュチニイは印度國民の對英反感の爆發であつたが、敗北の結果これまで僅に其の名目を有して居たモーガル皇帝の稱號は廢され、從來治者の名殘として回教徒が有して居た各種の特權は根本的に取上げられた。從つて動亂失敗の爲めに損害を受けた程度は印度教徒よりも回教徒の方が深かつた。然るに之が爲め一層意氣のそ喪した回教徒は、重ねて英人の覇權をうかがう氣力も無く、唯々として英人統治の下に醉生夢死の生活を送つた。固より彼等といへどもちう心から英國の政治ををう歌して居た譯では無い。併し、治者階級から下つて印度教徒と同一列の被治者と爲つた彼等は、ヴィクトーリア女皇が宣言した如く、信條、民族の如何を問はず一樣に正義と幸福とをきよう受すると言ふ英國統治の下に在るを便とし、モーガル帝國傾覆の大要因を爲したマーラッタ帝國の子孫たるチラーク其の他チトバヴァン・ブラーマンの活動は印度教專制の表徵であるとして恐ふした。それで千八百八十五年に於ける第一回の國民議會の際にも七十二名の出席代表者の中回教徒は僅に二人であつた。翌年カルカッタで開かれた第二回大會にも四百四十名の出席者中三十三名が回教徒であつた。是は前述べた如く回教徒の間に高等教育の欠けて居たこと、及びカルカッタの有力な回教徒三人が、印度政廳の信頼す可き政策に期待して公然國民議會に反對の意思を發表したことが直接の原因であるが、一層深い原因は印度回教徒の長老として最も聲望の有つたサー・サイイド・アーメド（Sir Saiyid Ahmad）が同宗者の國民議會に參加することを喜ば無かつた結果である。彼は親英主義者であると同時に、印度國民の幸福の爲めに卒先して印度國民の參政權を要望した。彼は土兵反亂（ミュチニイ）の大原因は、印度人を高等立法評議會（Supreme Legislative Council）に參加せしめ無かつたことに在ると言ひ、尙ほ彼は其の著書の中に、

「立法議會へ印度人を入れないことから起る弊害は數多あつた。之が爲めに政府は立法評議會を通過した法律及び條例の不適當なるか否かを知ることも出來なければ、又斯る問題に關する人民の聲を聞くことも出來なかつた。一方人民は惡法と信ずる處に向つて抗議を提出する手段も無ければ、又彼等の希望を公然と發表することも出來無かつた。併しながら、其の最大の災害は、人民が政府の意見及び意圖を誤解することである。彼等は有ゆる條令を誤解し、又法律が制定されるに當り何等之に關與すること無く、又法の精神を了解する手段無きが故に、法律が

制定される度毎に之を誤解して居た。之が印度國民をして彼の大亂を起さしめた最大原因である。」

と述べて居る。彼は土兵反亂の後、英國の印度政廳と回教徒間の親和を力說し、同時に時代さく誤に陷つて居る回教子弟の教育改善を絕叫した。「根本を治せよ。然らば樹木は繁茂せん」とは彼が高唱したモットーであつた。彼は五十二歳の時子息をケンブリッヂ大學へ入學せしめる傍ら、上印度に英國風の回教大學を設立する爲めに參考となるべき教育制度の視察を目的として英國に渡つた。歸來彼は熱心に奔走した結果遂に當初の目的を達し、有名なアリガー・カレッヂは彼の永久の記念と爲つて居る。彼は此の學校を、主として回教子弟の爲めに創立した關係上、此等子弟に對しては嚴格に回教主義（イスラム）の儀令を遵奉せしめたが、一般科目は信條の異る他宗者にも解放して自由にその教授を受けしめた。彼は回教徒の間に英國風の教育の普及することは、卽ち英國に對する忠誠の增加を意味するものと考へ、千八百八十四年總督リボン卿の前に試みた演說にも、「自分が畢生の事業とするアリガー・カレッヂの創立も、其の趣旨とする處は英國皇帝の統治に對する忠誠を養成する爲めである」と述べて居る。此くの如く英國王冠の下に自由進步の氣運を養うに努めたサイイド・アーメドは、印度國民議會と事を共にするを嫌ひ、同宗者にも言ひ傳へて自分の例に從はしめた。彼には敵も多かつたが兎も角同宗者間に於ける彼の勢力は强大なものであつたから、回教徒は大體に於て彼の意見に從ひ、印度國民議會に參加するものが少かつた。何故にサイイド・アーメドが此樣な態度を取つたかに就いて回教徒の一人は其の原因を、

(a) 國民議會を開催する以前に、夫れに贊成する數多の新聞、雜誌が暴論を敢てしたこと。

(b) 議會派の領袖が英國當事者に餘りに阿ゆを試み過ぎたこと。

(c) 議會派が何等の注意をも少數者（回教徒を指す）に拂はずに選擧の主義及び公然の競爭を主張したこと。

の三ケ條に歸して居る。

回教徒が國民議會の運動から避けて居る間に、現在の英國政治に不滿を抱いて居たチトパヴァン・ブラーマンは、延いては彼等の祖國たるマーラッタ帝國の敵手であつた回教徒に對しても父祖傳來の敵がい心を懷く樣に爲つた。此の行き懸りで、千八百九十三年にボムベイの市中で印度教徒と回教徒との間に衝突が有り、翌年には擊劍や柔道の心得の有るブラーマンの子弟達が、智

と成功とを表徵する象頭の神像ガンパチの神輿を奉じてボムベイの街を練つて歩き、又舊都プーナではシヴァジの歌を歌ひ、其他パンフレットを散布して英人及び回教徒に對するぞう惡心を激發した。其後ベンガル分割問題で印度教徒の國民運動が白熱化した時、分割に依り却つて利益を受けることゝ爲つた回教徒は彼等の主張を發表する有力な新聞も持たなければ、又同胞を激勵する雄辯家も無く、卒先して同宗者の運動を喚起す可き領袖も少かつたこととて、彼等は手を空しうして印度教徒の爲す所を眺めて居る外は無かつた。印度教徒がボイコットを起し、回教徒に對しても英國品の不買及び破壞を强制するに及んで二教徒間の關係は急に惡化し、兩者の間には屢々衝突が演ぜられた。斯くの如く印度教徒は英國の統治をのろふて、印度を印度教徒の印度たらしめやうとし、回教徒は之に反し印度教徒の專制を恐れて英國の主權に賴ろうとした。英國の有名な印度評論家サー・ヴアレンチン・チロールが、印度國民運動の惡化した千九百七年頃印度を旅行して、「印度の不安」(Indian Unrest)は「印度教徒の不安」(Hindu Unrest)と言ふ方が一層適切であるとタイムス紙上に述べたのは、其の當時に於ては正こうを得た評語であつた。印度教徒の運動が激烈と爲るに伴れ、けい敏な英國の政治家が、七千萬の回教徒を印度のウルスタ

ーとして彼等の信念をつかむにう愚で無かつたことは言ふまでも無い處である。

吾人は進んで印度回教徒の運動を論述するに當り、世界に二億の信徒を有する全體としてのイスラム人に對して、印度の回教徒が如何なる地位に置かれて居るかを一べつする必要を感ずるものである。抑も回教はシアー派(Shias)とスンニー派(Sunnis)との二派に別れて居る。アラビアのコレイシ種族に屬する教祖ムハメットは其の臨終の床に於て、義子アリー(Alie)を自分の宗教並に政治上の相續人卽ちカリフ(Khalif)と認めた。然るに事實上の權力は、ムハメットに代つて日々の儀令を司つて居たアブ・バクル(Ab Bakr)に移り、次で彼は國民から教主の位によう立された。アリーの後を繼いだものがシアー派で、アブ・バクルの派に屬するものがスンニー派である。シアー派に言はせると、スンニー派は正統で無く、又スンニー派は之に對して自宗の神聖を主張して居る。教祖ムハメットを出した純粹のアラビア人は、漸次其の勢力が回教國內の東方種族に移る樣に爲つてから、久しく彼等が首都として居たバグダットを捨てゝ彼等の父祖の故鄉であるアラビアの沙漠の奥に歸つた。十三世紀にアラビア人のカリフが滅亡してからはメツカやメジナの樣な聖地は回教の强國オスマン土耳古に依り守護せられることゝ爲り、其の結

果スンニー派は土耳古の皇帝（ナルタン）が回教のカリフたることを承認したが、シアー派は之を許さ無かつた。近世に入つてからは、シアー派は僅にペルシア及びアラビアの沙原地方で盛であつて他の地方ではスンニー派が強い。印度でも比較的にシアー派が少くてスンニー派が多い。舊モーガル皇帝はスンニー派に屬し、オウドの王室はシアー派である。

前述べたアリガーのサイイド・アーメツドはスンニー派に屬して居たにも拘らず、十九世紀末ギリシヤと土耳古との開戰に際し、回教國一般に汎イスラム主義が高調された時にも、土耳古皇帝のカリフたることを否認し、依然として英國皇帝への忠誠を表明した。此くの如き彼の心情が印度回教徒の歸すうを導くに勢力あつたことは言ふ迄も無い處である。其後千九百六年に、ベンガル問題を中心として印度の政界が沸騰し、印度教徒の間に代議制の主張が高調される樣になつた爲め、回教徒も不安を感じ始め、其年の十月にアガ・カン侯を始め主立つ回教徒は連署して印度總督に意見書を呈した。其の趣旨は、先づ英國政府が人格並に信仰に對し平和、安全及び自由を與へることに就き感謝の意を表し、英國統治の最も重要な特質の一は、總ての人種、宗教の意嚮及び希望を尊重する事實であることを力說し、次で彼等代表の目的は、將に考慮されんとする代議政治の組織に公正に參加すること、即ち回教徒の數と其の政治的地位とを釣り合ふ樣に參加したいと言ふ六千二百萬回教徒の要望を代表するに在ると言つた。總督は之に對して「回教徒の地位は單に數の力により決せらるべきもので無く、回教徒の政治的地位及び印度帝國に盡した任務をも參酌すべきものであると言ふ諸君の主張は正當である」と言つた。之が抑も印度回教聯盟（Indian Muslim League）の起原であつて、同年末には東ベンガルのダツカに會合し、翌千九百七年にはカラチで開き、千九百八年にはアガ・カンを座長としてアリガーに會議した。此くの如く此の回教聯盟は、印度教徒の騷じようにより代議政治が印度に布かれることにもなれば小數者としての回教徒の地位を保全することが必要であるとして起つたものであつて、從つて彼等が漠然ながらも對抗の目標とする處は印度教徒であつて英國政府では無かつた。此の事はアガ・カンがダツカの聯盟支部に送つた手紙の中の言葉に依り最も明白に知ることが出來る。彼は「實行も出來ぬ立憲思想を採用するは徒らに印度の狀態を混亂せしめるものである」と云つて暗に印度教徒の主張を非難し、尙ほ語を繼いで、「吾人回教徒の如くいやしくも祖國を愛する人々は、吾が印度が取り返しも着かぬ樣な不幸の海に沈み行くを座視するに忍び無い。總て繁榮と滿足とは

常道に沿うた進歩發達に依り達成せらるべきものである。而も此くの如き行動は強く、正しく、且つ安定せる政府、即ち少數者にも多數者にも一樣に正義と平等の機會を保證する政府の存在を必要とする。故に過去一紀世の間に驚く可き進歩を招致した英國の支配を安固ならしめるは總ての愛國者の義務である」と述べて居る。印度回教聯盟が其後幾多の變遷の中にも、久しく親英主義を執り、少くも穩和漸進主義に依つたのは此くの如き出發に起因して居る。

然るに其後伊太利と土耳古との戰爭、ベルシア事件、殊にバルカン戰爭に際し、英國政府が土耳古に對して頗る冷淡であつたことなどは、印度回教徒就中スンニー派の人々をして英國に對して不滿ならしめる樣に爲つた。ジエマル・エド・ヂンに依り高調された汎イスラミズムの思想は、サイイド・アーメドの死に依つて堤を決した洪水の樣に印度に溢れ、スンニー派もシアー派もオツトマン・カリフアの半月旗下に團結しやうでは無いかといふ主張が急に盛に爲つて來た。回教聯盟も此の一般的風潮の影響を受けずには居られ無かつたが、併し汎回教主義が印度回教徒の極左黨の母體と爲つたに對し、回教聯盟は常に英國皇帝の王冠の下に妥當な立憲政治の發達を企圖し、從つて彼等が最も意を用ふる點は、代議制が採用された場合、印度教徒に對する少數派として如何にせば自己の政治的地位を保ち得るかに在つた。千九百十三年正月に開かれた回教聯盟の決議は、其の目的「英國皇帝に對する忠誠を印度人の間に向上せしめ、回教徒の權利を保護し及び此の目的に抵觸せざる限り印度に適當な自治の組織を達成する」に在つた。此の印度に適當な種類の自治と言ふは、頭數よりは寧ろ政治的地位に比例した代表數を意味するものであると解せられた。

歐洲戰爭が始まると同時に印度回教徒の地位は餘程困難なものとなり、從つて英國側から觀れば彼等七千萬回教徒の向背は非常に重大なものであつた。一千三百萬の臣民を領有して印度土王國中の最大藩王たるハイデラバド王が、歐洲大戰が始まると同時に卒先して英皇帝に對し二心なき忠誠を誓ふたのは、印度回教徒の歸すうを定めるに多大の效果有つたことは言ふまでも無い。併し他の一面には土耳古皇帝の檄に應じ、神の爲めに宗教戰爭を宣して英國に抗しやうとする熱血兒も多く、現にムハメツト・アリ、モウルビ・オベイヅラ等の回教青年はアフガニスタンとアラビアとに行つて、夫れ〳〵印度進擊の陰謀を廻らしたことさへあつた際、英國として印度回教徒の安靜を保つは一通りの苦心で無かつた。唯幸に回教徒に、土耳古の檄に策應して起つ丈けの準

備の無かつたことゝ、土耳古皇帝の檄も其實獨逸のかいらいに過ぎ無いものであるといふ推察とは、汎回教主義者をして大々的にけつ起することをちゆうちよさせた。殊に土耳古が獨逸側に與みして參戰すると間も無く、英國政府がアラビアの聖所及びメソポタミアの聖殿は、印度の回教巡禮が騷じようし無い限り英國及び其の聯合軍により攻擊せられることは無いと宣言したことは、印度回教徒の心を抑へるに頗る有効であつた。大戰中英國が印度回教徒の動搖を防ぎ得たのは、主として此の宣言と、及び英國は土耳古の支離滅裂を欲するもので無いことを常に非公式ながら保證した結果である。

歐洲戰役中に起つた主な現象の一は、印度國民議會と印度回教聯盟（ムスリム・リーグ）とが印度の自治問題に關して接近したことである。千九百十五年の十二月に、此等二つの團體が始めてボムベイに會合し、翌年四月に會合する全印度議會委員會は回教聯盟の委員と會商することを希望し、其の結果國民議會の前期議長、回教聯盟の前期議長、印度自治案の提唱者ベサント夫人其他知名の士が一堂に會して懇談する處があつた。同年十一月國民議會及び回教聯盟の代表者がカルカツタに會合し、ベサント夫人の自治案のプログラムを受入れることに決した。其時は回教徒代表數に就いて一致點を見出すことが出來ず、此の問題は後日の協商に殘された。更に其の十二月は印度の政治史上に永久に記憶す可き出來事が起つた。夫れは一旦分れて居た印度國民議會の穩和派と急進派とが再び結合すると同時に、國民議會と回教聯盟との主立つ領袖が會合し、主な相違點を調訂して、一樣に印度の自治を宣言した故である。此の協定に基き、兩派の領袖は長い間の秘密的相談の結果、未來の立法評議會（Legislative Council）に送るべき代表者の比例數に就いて一致點を見出した。回教聯盟の議長ムハメド・アリ・ジンナー其他の有力者が、「回教聯盟は自治を達成するが爲めには他の團體と協力し無ければならぬ。斯くしてこそ吾人少數者は保護されるのである」と言つたのは、斯うした氣運にかもされた希望の叫であつた。

併し之を以て回教徒七千萬總數の一致的意嚮であると解するは早計である。それは此の國民議會と協調した人達を選出したのは、七千萬中僅の部分に過ぎ無かつた故である。一般教徒は印回兩宗共に、たとへ政治家が如何なる協商を爲やうとも、一般教徒としては將來公平無私な中立的和解を必要として居た。何となれば回教のバクル・イド祭（Bakr-Id）の日に、印度教徒が神聖視するめ牛をほふつて犧牲にするが如きは、兩教反目の原因であつて、而も之は政治家の一夕の

會合に依つて解決の出來ることでは無いと言ふが其の理由であつた。のみならず、同じ回教徒の中に在つても、汎回教主義の高調された歐洲大戰中に於てさへ衝突することが有つた。千九百十六年六月に、アラビアのメッカの大守（シャリフ）（Shalif）が土耳古政府に對して反旗を擧げたことが印度へ知れて來た。此のシャリフはヘジャス地方に住むアラビア人の首長で、教祖ムハメットの崛起したコレイシ（Koreish）種族に屬するものである。前述べた樣にアラビア人は回教國の教權並に政治の權力が東方人に移るを憤慨して父祖の鄕土に歸つたものゝ子孫であつて、從つて久しい間土耳古皇帝もアラビアの教主（カリフ）たることを要求もせず、此等の種族は獨立的存在を持續して來た。それが千五百七十五年に至り、太守が始めて土耳古皇帝の教主（カリフ）たることを承認し、其の代償として土耳古王はシャリフを保護し且つ多大の補助金を與へることを約した。それ以來兩者の主從的關係は比較的順調に維持され來たものであつた。メッカの太守は後に彼が獨立の理由を宣言して、土耳古聯合進歩委員會（Turkish Committe of Union and Progress）が經典（コーラン）の主義に反し、土耳古皇帝に對してごう慢不忠の行爲を敢て、及び一般回教徒に對して殘忍非道の暴行を働くが爲めであると言つて居る。土耳古と開戰中の英國政府がメッカの太守に同情したことは勿論のことで、人員並に物資を給して其の軍を援けた。又英佛諸國はアラビアに在る回教徒の聖地を保護することを宣傳したが、一時此等の地方は獨逸及び土耳古軍の爲めに占領されやうとした。此の事が印度に傳はると、カルカッタの回教徒（其の多數はシアー派の自由主義の人々であると言はれて居る）は太守に宛て彼の勇敢な行動を激賞する電報を送つた。回教聯盟の有力者は非常に之を憤慨し、メッカ太守は英國のせん動に乘つて反旗を翻したもので、彼の力ではアラビアの聖所を保護することは不可能であると言ひ、同月二十七日に「メッカ太守を首領とする反亂者及び彼の同情者（英人を指す）をイスラムの敵としてきう彈する」旨を決議した。

ここに述べたは回教徒間の紛じようの一例であるが、一般印度教徒と回教徒との間には、國民議會と回教聯盟の接近にも拘らず、しば〳〵衝突の事實が繰り返された。其中で一番有名なのは、アルラー（Arrah）の暴動として傳へられるものである。暴動の起つたのはガンヂスの南、カイムール山脈の北、ビハール州のパトナ縣であつて、アルラーといふのは最初に事の有つたシャハバド地方の郡廳所在地の名である。一體ビハール州は印度教徒の多い所であると共に、回教徒の數も少く無い處であつて、昔から兩教徒間のあつれきの激しい土地柄である。バクル・イド祭其

他の折回教徒がめ牛を神前に犧牲にすることに就いて、十九世紀以來度々衝突が演ぜられた。二十世紀に入つても千九百十一年、同十二年と引き續いて印度教徒が回教徒を襲撃してめ牛を犧牲にすることを邪魔したことがあつて、暴動地方の警察を嚴重にした。千九百十五年に戒嚴を緩めると復た印度教徒の團體がこん棒等の兇器を携げて回教徒の村々を襲撃した。其時地方官憲が回教徒を說き伏せてめ牛を印度教徒に賣渡させた爲め、却つて暴動を擴大し、次の日には他の村に進撃した。翌十六年には約五千の印度教徒が一團と爲つてカンチヤンプールといふ村で回教徒保護の任に當つて居た警察隊を襲撃し、警官の發砲の爲めに數人の死傷を出した。之と前後して約四十個村から集つた八千人程の印度教徒の暴徒がジヤヅプールの村を包圍し、犧牲のめ牛を捕へたり、其他のりやく奪を行つた。之が爲め百五十人程の印度教徒がたい捕訴追された。斯うした行懸からビハール州では印度教徒と回教徒との間には惡感情が極度に緊張される樣に爲つた。

千九百十七年九月の末にアルラーの町の附近で重大な暴動が起つた。此の場合も回教徒がめ牛を犧牲にすることから起り、一時双方の有力者の仲裁で無事に解決して居たに拘らず、印度教徒が不意に起つて回教徒を攻撃りやく奪したが爲め、一層惡化した。警察隊の發砲に依つて一時退散した暴徒が復た集團するといふ有樣で、歩兵及び騎兵の軍隊が派遣されるまで、約四十英里四方は印度教暴徒の手中に歸し、回教徒の住宅は荒らされ家畜はりやく奪された。回教徒は暴徒の來襲を聞くと大抵の場合逃走したが、村によつては群る暴徒を相手に村落を死守して全滅した例もあつた。暴動は九月二十二日に始まり、十月七日に大部隊の軍隊が到着するまで、アルラーを中心とするシヤハバド郡は百三十箇村にわたり暴動の舞臺と爲つた。

是れ程反目して居た印度教徒と回教徒とが、千九百十九年のローラツト法案以來、單に兩教徒の政治家許りで無く、一般民衆までも親密に提携して排英運動に參加したのは、英國を中心とする聯合軍が、ヴエルサイユ平和會議及びセーヴル條約で、敗殘の土耳古を事實上分割の運命に陷れやうとした爲めである。

英國は印度回教徒の心を繫ぐ爲めに、アラビア及びメソポタミアの聖地を攻撃しないことを宣言すると同時に、英國は土耳古の分割滅亡を企圖するもので無いことを公言して居た。然るにヴエルサイユ會議が始まつて見ると、戰時中に聯合國間に訂結されて居た幾多の秘密條約が夫れから夫れと提出されて、事實上オツトマン帝國は彼等の間に分割されることと爲つた。之が印度七

千萬回教徒の憤激を買つたことはいふまでも無い處である。印度回教徒の事情に精通するサー・テオドール・モリソンは當時の事情に就いて次の樣に言つて居る。

「回教世界は端から端まで土耳古の分割に對する怒に燃えて居る。カブールやカイロの樣な邊ぴな國の首府に起つた暴動は、唯僅に此のび漫した憤激の表徵たるに過ぎない。約三十年も印度回教徒と近接した自分としては、土耳古帝國の豫定の分割に就いて回教徒が抱く激怒を英國公衆に知らしめることを自己の義務と信ずるものである。……印度に於ては、ペシヤワールの端からアルコットの端に到る全回教徒は此の問題に對する感情を以て湧き立つて居る。婦女は之が爲めにけい帳の裏に泣き、商人は計算を忘れて國事を慨し、世に背いたデオバンド及びナドワタル・ウラマの樣な中世紀的神學派と雖イスラムの破壞に對して抗議する爲めに其の僧庵を後にして居る」

と。回教界全體の出來事としては、從來汎回教主義の反動的な、そして偏狹な愛國心にあきたらぬかつた回教自由主義が、此の土耳古の分割の爲めに汎回教主義の領内に走つたことであつたが印度では之が爲めにスンニー派もシアー派も、政治家も民衆も一樣に英國に對して怨を抱く樣に爲つた許りで無く、英國を共同の敵と見ることからして印度教徒の反英運動と歩調を共にする素地を作つたことは最も注意す可き事柄である。

ヴエルサイユ條約を强制する爲めに、君府の陸も海も聯合軍の武力に埋められた時、土耳古人は悲痛の沈默を以て之を眺めて居た。そして志ある者は身を變じ聯合軍の目をかすめて各國各地の同宗者に聖地スタンブール（君府の回教名）が異教徒のじゆうりんに委して居る有樣を傳へた。土耳古の民心も實權も君府の政府を去つて、泥とマラリヤの小都市アンゴラに在るムスタフア・ケマルの青年黨に移つた。要するに聯合軍は君府の占領に依つて歐亞の地理的要衝を抑へたといふこと以外には、土耳古帝國の、も拔の殼をにぎつたといふ丈けのことであつた。それで君府の聯合軍が土耳古皇帝を强制して親英佛の内閣を組織せしめたり、セーヴル會議に代表を差遣して聯合軍の獻立通りの條約に調印させても、それはただ紙上の條約たるに過ぎなかつた。土耳古の實權者ムスタフア・ケマルは斯んな條約は一笑に附し去つて「世界の端まで戰う」と豪語した。印度の回教徒は、聯合軍殊に英國の政治家が、戰時中には土耳古帝國の領土保全を機會有る毎に公言して回教徒の動搖を防いだ許りで無く、貧弱な印度國民から巨額の戰時公債を募集したり、義

勇兵を募集してエジプト、メソポタミア及びフランスの戰場に送つたりして置きながら、勝敗が決して最早印度回教徒の向背に對し深く留意する必要が無いと爲ると、忽ち掌を翻す樣に回教徒の感情を無視して土耳古の分割を策するは不信の甚しきものであるとして、英國政府に向つて抗議した。キラファット問題なるものは此時起つた紛爭である。印度回教聯盟の人達は印度國民議會と漸次接近し來つたが、回教聯盟は印度回教徒の少數の代表であつて、多數民衆は寧ろ汎回教主義の政治家に依り代表せられるものであることは前に一言した處である。然るに歐洲大戰が初まつて以來、汎回教主義の極端派は、印度國民主義の極端派と呼應し互の聯繫を求めた。「ヒンヅスタンの兒よ、爾の智力、文明及び富力を以て吾人を援助せよ」と言ひ、又「吾に、印度教徒が生れながらに持つ傳來の權力を籍せ」とは、回教徒が印度教徒に呼び掛けた叫の聲であつた。アラーの唯一神を信奉する彼等も、宗主國土耳古を敵とする西來の暴力に對抗するが爲めには多神偶像教徒たる同國人と提携するを辭さ無かつた。故に彼等は印度教徒に向つて復た、「敵の軍勢を全滅すべく汝の八百萬の神々に祈れ」と呼びかけた。故にアフガニスタン方面から印度侵略を企てゝカブールに行つたオベイヅラやハツサン等の回教徒の一味は、印度教徒マヘンドラ・プラタプ等と盟約して、成功の節はプラタプを印度の大統領たらしめることゝし、又在米印度急進派の團體たるガーヅル團の首長ハル・ダヤルの無二の親友は回教徒バルカツーラであつた。印度教徒が印度の自由の爲めに回教徒の後援を求める情は更に一層切なるものがあつて、「信條、儀令及び人種の如何を問はず、いやしくも印度の鄕土に生れたものは吾人の運動に參加せよ」とは彼等の繰り返した叫であつた。たゞ、前述べた樣に一般民衆は信條、儀令、就中め牛の犧牲に就いて融和することの出來難い處が有つた。然るに千九百十六年頃から印度國民運動の舞臺にたい頭して來たモハンダース・カラムチヤンド・ガンヂー（Mohandas Karamchand Gandhi）は、從來の政治家とは餘程其の行方を異にし、其の宗教的觀念は信條、宗教の差別を超越し、而も實せん躬行、身を以て率いたから、印度教徒は無論のこと回教徒の民衆と雖喜んで偉人ガンヂーの指すがまゝに進んで行つた。彼が行爲の標題としたところの「眞理の正觀」「消極抵抗」「愛の力」又は「殺生禁斷」の如きは、決して彼の獨創では無く、古い印度教の思想、又は先輩たる國民運動者の唱道したものであつた。併し、彼が彼自身の骨髓をうづめる愛の力を以て高調する時、此等の陳腐な標語も亦新なる思想の光を天地に放つ慨があつた。印度教徒たる彼は回教徒に向つて、

「余は決して印度教徒と回教徒の間に差別を認めて居ない。余が心には双方共に母國印度の兒である。余は印度教徒が多數者であり、且つ教育知識に於て一層進歩したものと信ぜられて居ることを知つて居る。故に印度教徒は喜んで其の回教徒たる同胞に出來る丈けのものを讓るであろう。僞無き人間として余は正直に、印度教徒が回教徒の欲するがまゝに與へ、且つ悅んで之を爲すであろうと信ずるものである。斯かる相互の寛大が示される時、唯始めて吾人は合同統一を期待し得られるのである。若し印回兩教徒が互に血を分けた兄弟の如く行動するならば、其時唯印度の統一があり、其時唯吾人は印度のれい明を期待することが出來る」

と言つた。此の正大な同情が如何に回教徒の胸憶に響いたかは推察に餘りある處である。彼は又兩教徒民衆間の爭の種と爲るめ牛の屠殺に就いても公平な立場に立つて次の樣に言つて居る。

「余は或る集會の席で、印度教徒が其の所有するめ牛を極端に虐使して漸次に死に至らしめたり、カルカッタの非人道的な酪農場に居るめ牛から取つた牛乳を飲んだり、或は又印度に居る歐洲人が自分達に牛肉を供する爲めに屠牛場に於ける數千頭を屠殺するを冷靜に眺めて居る間は、宗教上の信仰からめ牛をほふる回教徒たる同胞に對して憤慨する資格は無い。余はめ牛に對する充分な保護を確める第一歩は、印度教徒自身がめ牛の虐待から無關係の地位に自己の家を置き、然る後歐洲人に對し印度に滯在する間は牛肉を食ふことを却へ、少くも印度以外の地から牛肉を取り寄せることを勸告すべきであることを忠告する」

と。彼は又殺生禁斷（Ahimsa）は自己がひつ生の使命として說教せんとする處であると言ひ、尙ほ印度教徒が往々回教徒を襲擊することを苦々しく思ひ、

「同じ生物を救ふ爲めに同胞人類を殺傷する罪を犯すといふ愚鈍拙劣にして非人道を行ふたとて、之が爲めにめ牛屠殺を防止することの出來無いことは殆ど論外である」

と攻擊した。千九百十九年、かのローラット法に對する一種の示威運動として印度全體にわたる「國民休業（ハルタール）」が行はれた時、各地の兩教徒が全然異教徒たる觀念を忘れて一堂に會し、就中最も注意を引いたのは從來決して他宗者の入ることを許さ無かつた回教殿堂（モスク）が兩教徒會合の場所に當てられたことであつて、土耳古分割に對する慣慨が遠因を爲し、ガンヂーの德風が直接の誘因と爲つて兩者の融和を促進した。從來回教急激派の首領アリー兄弟の入獄に對し主義手段の小異を忘れて多大の同情を寄せて居たガンヂーは、セーヴル條約から引いてはキラファット問題に對して

も回教徒の爲めに常に熱誠な聲援を送つた。斯うした關係上、千九百十九年の初頭から一昨年（千九百二十二年）四月ガンヂーが投獄されるまでの間、印度の二大教徒は其の國民運動に就いて殆ど一心同體の如くに進退した。之は有史以來珍しい現象として特に注目に値する處である。

ガンヂーがたい捕されてから印度の國民運動は全體としては恰も死火山の樣に一時的に沈靜した。從つて印度教徒と回教徒との合同動作に關しても特に目覺しい計畫に就いて聞く處が無い。昨年の秋ムスタファ・ケマルの軍がギリシャの大軍を全滅せしめた爲めに印度回教徒の氣勢も大にあがり、其後英土の關係が、一時危機にひんした時の如き、若し土耳古と英國とが開戰する樣なことが有れば、印度七千萬の回教徒は一致團結して土耳古を援助すると言つて英國を脅威した。之は汎回教主義の反映であつて、必ずしも印度國民運動と合致し無い許りで無く、場合に依つては相ひ離反する性質を持つものと觀無ければならぬ。具體的に言へば、若し土耳古其他印度以外の回教徒が勢力を回復して英國に對抗することゝ爲れば、印度回教徒は常に之に策應して起つ素地を持つて居る。即ち印度教徒が其の印度といふ觀念に就いては、徹頭徹尾求心的であるに對し、回教徒は少くも或る場合に於ては遠心的傾向を有して居るのである。之は印度の國民運動に取つては最も重大な問題の一であつて、いやしくも此の問題が完全に解決され無い限り、印度の自治とか獨立とかいふ問題は、そこに一大病源が存在する譯である。現に最近釋放されたガンヂーも、印度回教々主に宛てた手紙の中に、「ヒンヅー教徒と回教徒とのあつれきが復た〳〵激しく爲りつゝあるは誠に遺憾に堪へない所である。各宗派各團體の統一が出來無い間は、印度自治の完全を期することは困難である」と言つて居る。而も此の病源を除くは至難のことに屬する。

先年ガンヂーの翻した消極抵抗の旗下に兩教徒の大衆が集つたのは、英國といふ共同の敵を持つたことが最大原因であつて、之が無かつたならば如何にガンヂーの德望を以てするも一時的にも此の合同を畫することは困難であつたであろう。印度の統一の爲めには先づ各宗教の融合を謀らねばならぬとは、印度古來の英傑が企畫した處であつて、而もアクバール大帝の英才と威武とを持つてするも遂に畫餅に歸した難問題である。故に從來の批評家は、印度の宗教統一は神の仕事であるとあきらめて居た。併しながら世界の大勢の推移するに伴れ、久しく「不變」と言はれ「不動」と呼ばれて居た印度も、近時頓に變化し躍動し始めた。此の大勢に乘じて印度の宗教的統一融合を圖るは必ずしも絕對不能の事とは言はれまい。ガンヂーよりも更に偉大に、又其の聖的價

値に於てアクバールよりも更に偉大なる政治家が現はれ、近時印度の國民生活の根底を變化せしめつゝたる現代經濟の偉力を利用して、印度の宗教的協調を達成する時こそ、眞の意義に於ける印度國民の尊榮の基礎が築かれるであろう。

第六章　スワラジ（Swaraj）スワデシ（Swadeshi）及びサチアグラハ（Satyagraha）

スワラジは自治（Self-Government 若くは Home-Rule）を意味し、スワデシは國産自給を意味する。又サチアグラハとは其の文字通りの意義に於て眞理の正觀を意味するも、國民運動の實際に於ては消極抵抗（Passive-Resistance）の形に於て表はれて居る。故にスワラジは運動の一目的であり、サチアグラハは其の宗教的觀念は別として國民運動の上では、一個の手段でありスワデシは目的たると同時に手段である。而も此等は印度國民運動の三大旗しきであつて、暴力の不法行使により直下に印度の絶對獨立を圖る急進黨は別とし、合法的政治運動に依り印度の自由の獲得を期する者は、多く此の目的と手段とにより行動して居る。否、チラーク其他の武斷派と雖、彼等が其の運動の頂上（クライマックス）に達し無い平生に於ては常に此等を運動の綱目にして居た。現に消極抵抗の如きはベンガル分割問題の際、チラーク其人の創唱したものである。此くの如く此等

の標語は密接な關係を有すると共に、又其の性質は前述する如く異つて居るので、こゝに自分は之を同一章の下に置くと同時に、之を別個の節に分ち論ずることにした。

第一節　スワラジ

印度國民運動の穩和派の重鎭として、又印度人として英本國の議會に選擧された第一人者として有名なかのダダバーイ・ナオロジー（Dadabhai Naoroji）は、第二回國民議會の議長席から、吾人は英國に對して骨髓まで忠順である。吾人は英國の統治が吾人に與へた思想を了解すると言ひ、尙ほ語を繼いで、

「英國の政治は、吾人を暗黑から光明に向け、又國王は人民の爲めに作られたもので、王の爲めの人民で無いといふ新しい敎訓を示すところの光明を吾人の上に投げた、而も吾人は此の敎訓を、自由なる英國文化の光に依つてのみ亞細亞的專制の闇黑の裏に學び得た」

と述べた。こゝに「人民の爲めの王」といふは民主主義の政治の意味であるが、印度人は之と同時に「人民の爲めに、人民に依つて爲す政治」卽ち自治（SelfGovernment）の思想を亞細亞的專制の闇の中に受け入れた。ベンガル分割問題を動機として新な國民運動が起り、其の影響を受けて印度國民議會の論調が緊張した千九百六年の議席で、始めて自治に對する要求が述べられ、印度は他の英領自治植民地と同樣な制度を獲ねばならぬと言つた。其時にも議長に選ばれたダダバーイ・ナオロジーは、「何んな善良な政治も決して自治に代はることは出來無い」と言つた英國首相サー・ヘンリー・キャンベル・バンナーマンの言葉を引いて、「一度自治が達せられるならば印度全國民に對して充分繁榮が有り、之が無ければ繁榮は得られ無い」と言ひ、尙ほ「自治は印度國民議會の理想である」と言つた。ラジパト・ライは此のスワラジと云ふ言葉は、スワデシと共に單に自治及び自給といふ丈けの意味で無く、其の奥には更に一層深い「自由に對する國民のあこがれ」の情を含んで居り、又此のナオロジーの宣言は眞なる印度國民運動が生れた日であると言つて居る。

印度の騷じように鑑みて總督モルレイは千九百八年の末に所謂モルレイ・ミントー改革令を發布した。之に依ると印度立法評議會（Legislative Councils）の議員數や權限を增大し、地方評議會（Provincial Councils）の非官吏議員を多數にしたり、其他幾多の改革を試みはしたが、そ

れは要するに姑息な又局部的なものであつて、而も彼は其の案を英國議會に說明するに當り、印度に議會政治の組織を創始する總ての意圖を放棄するの止む無き苦境に立つた。此の改革に對して、穩和派の領袖ゴケールが唯一人滿足の意を表したのみで、當時白熱的に高潮して居た印度國民運動の焰に對しては殆ど何等の鎭靜劑にも爲ら無かつた。千九百十一年卽ち英國皇帝がベンガルの分割を取消し、又印度の首府をカルカツタからデリーへ移した年に、印度政廳は印度事務大臣に宛て、地方分權並に地方自治權を擴張する政策に就いて交涉する處があつた。印度國民議會の人達は早くも之を他の植民地並みの自治を豫告するものと解した。然るに事務大臣ロード・グリューは千九百十二年六月に英國の議會で此の推察を根本的に否定して、「吾人英國と同人種で無い人種に對しては、たとへ彼等が吾が英國人中の優秀な人物を政治の事務に參與せしめあるにもせよ、英國議會の監督から離れて自由な自治の手段を許す樣なことは試驗的にも許すべきことで無い。印度事務大臣としての責任上余は、印度政廳の希望若くば目的として此種のものを含む公信を發する樣な思想を根絕し無ければならぬ」と述べて居る。英國當局が斯く否定するにも拘らず、印度に於ける自治の議論は次第に進み、回敎徒の委員會も亦、回敎徒の權利を侵害することを

無しに、「印度に適する自治制を達成する目的」を推奬するに到つた。

歐洲大戰が始まると共に自治は益々高調され、千九百十五年の十二月、國民議會と回敎聯盟とが始めてボムベイで會合した時、國民議會の議長シンハは印度の自治に言及して次の意を述べた。

「未來に於ける合理的理想は要求された。此の理想たる印度青年の大望を滿たして無政府主義を、そ止し、且つ英國政府の賞贊を拍すべきものである。此の理想たる純にして簡明デモクラシイ卽ち『人民による人民の政治の建設』である。英國政治は印度が曾て持つた最も善良な政治であつた。然しながら如何に善良な政治も自治の代用は爲さぬ。……現在に於ては印度は自治に適して居らぬ。英國より離れ、且つ眞の抵抗力無くしては、印度は直ちに他の民族的渦中に在るであろう。併しながら、印度國民が英國の指導保護の下に、單に國內の事情を整備することが出來る許りで無く、國內の平和を確保し進んで國外からの侵略を防ぐことが出來る樣に爲つたならば、印度に對して『充分な自治權』を與へるは、英國の利益にして同時に義務であろう。……印度人の愛國心は、英國人と印度人とが同一帝國の同胞市民として結合したものであるとの思想に融合したものと當然思考せられる。」

と。此時の委員會はアンニー・ベサント（Annie Besant）夫人の立案した自治計畫を考量することを決議し、尙ほ回教聯盟の議長は、

「英國皇帝の治下に於て、印度の要求に適する自治。」

が喫緊の急務であることを切論した。

此所にいふベサント夫人とは英國牧師の妻女で、極く若い時から其の鋭利な筆を以て評論界に入り、社會主義者と爲り、ロシア婦人ブラヴアトスキイ女史に就いて接神學（セオソフイー）を信奉し、女史の死後千八百九十三年に印度に來た人である。印度國民議會の父と呼ばれるヒュームも亦印度に於ける接神學派の急先鋒であつた關係から、ベサント夫人も印度教徒の復活運動に同情する樣に爲つた。彼女は一時印度教子弟の教育に從事して居たが、其後新聞を發行して政治運動に參加し、印度の自治問題の大綱を提げて國民議會及び回教聯盟に建策するに到つた。それ以來彼女はマドラスのアチアールに於ける接神學教會を本營とし、或は演壇に或は文筆に印度覺せいの論陣を張つた。六年禁錮の刑を了へて出て來たチラークは此時ベサント夫人の主張に聲援して、總て印度の要求を滿たし、禍亂不便の根元を匡正するものはホーム・ルール であり、スワラジであると言ひ、尙ほ自治の意義を注釋して、總て吾人の事務の管理を自分達の手に置くといふ要求が卽ちスワラジアの要求であると言つた。ベサント夫人は千九百十六年九月に自治聯盟（Home Rule League）を作り、次で機關紙ニュー・インヂアを發行し、九月十四日をホーム・ルール・デーと定め、其の運動を學生、生徒の間に迄も推擴した。英國官憲は印度防衛條令に據り、ベサント夫人のボムベイ州に入ることを禁じたが、彼女は少しもへき易せず、現在の如き英國の統治は印度の自由に對して有害無益であるが故に、ホーム・ルールに對する强烈な要求は直ちに組織され無ければならぬことを絶叫した。彼女の奔走の結果、前述べた樣に國民議會と回教聯盟との代表者は其年十一月カルカツタに會合して自治計畫を採用し、尙ほ十二月末週には兩派の主立つ領袖が一樣に自治に對して宣言した。其後ベサント夫人の言論が餘りに急激で、印度の自治に對する正當な論議を越えて、感じ易い青年の騷じやうをあほる嫌があつたので、マドラスの英國官憲は印度防衛條令の適用により、彼女の政論其他の政治運動を禁示した。然るに自治聯盟は引續き其の目的に向つて緩みの無い運動を繼續し、其他自治に對する印度の大勢はそ止することの出來ぬものあるに觀て、英國內閣印度事務大臣モンタギユーは、印度總督チエルムスフオードの招請に應

じ、英國皇帝の勅許を得て印度の統治を論議する爲め印度視察の意圖を發表した。其中に彼は、

「皇帝陛下の政府と印度政廳とが完全に一致する政策は、英帝國の不可分的部分としての印度の責任政治の實現を進行せしめる爲めに、行政各部に於ける印度人の協力を增大し及び自治制の漸次の發達を期するに在る」

と言つた。

モンタギューの一行は千九百十七年の暮に印度に到着し、各地を巡視したり、總督以下の官吏や民間の有力者と會議會見を重ねたりして英本國へ歸來したのは翌十八年四月の末であつた。其の結果七月八日にモンタギュー・チエルムスフオード改革案なるものが發表された。此の改革案は報告書の形式を以て認められたが、要するに印度に對する自治の豫約、若くば自治に進む道程であつて、印度統治上最も紀念す可きものである。該案建議の趣旨の一節として次の樣に述べて居る。

「吾人は從來印度に與へた保護を此のまゝ持續することは印度國民生活に損害を與へずには濟まない時期が到來したこと、吾人は曾て印度國民に與へた何物よりも貴い賜物を與へやうとして居ること、英帝國內に於ける國民的存在は印度が曾て獲得した何物よりも善良なものを表はすこと、印度民衆の沈滯した而も感傷的な滿足は、健全な印度の國民的存在を生ずる素地で無いこと、及び之を思慮分別を付けて刺げきすることは印度最高の幸福の爲めに働いて居ること等を切實に感得するものである」

と。そして此の建策の要點はダイアーキイ（Diarchy）卽ち政府の責任を英國の行政官に依つて指名された評議員と選擧制の立法團體から選ばれた委員との間に分つことであつた。此の主義は印度の中央政府にも地方官廳にも適用せられることに爲つて居た。立法議員は從來よりも遙に擴張された選擧權者から選ばれ且つ其の權限も非常に擴張されて居た。卽ち前には單純な諮問機關と別段異る處が無かつたに對し、改正案に依ると、たとへ彼等の權力は尙ほ限定され、殊に其の財政權は尙ほ行政官に留保されて居るとは言へ、要するに歐米の意義に於ける「立法者（レジスレチユアー）」に爲つた。斯くの如く英本國の行政官が終局の支配權及び最終の決議權を持ち、從つて明にブリチツシ・ラージの爲めに偏重して眞の意義に於ける勢力の權衡はまだ實現さるべくも無かつたけれど、併し改革案は、政府の此の計畫は永久的のものとして企てられたもので無いこと、單なる過渡的方

法、たとへば印度國民が其の見習を爲す可き學校の樣なものであること、及び自治に於ける此等の最初の科目が修了された時には、印度はたゞに立法上許りで無く又行政上の官吏をも支配する完全な代議政治が賦與さるべきであることを附言した。尙ほ其の聲明する處に依ると、此の制度は十年目毎に政治の成績を査定し、若しそれが善良であるならば、漸次自治の度を進めて遂に完全なものにすることに爲つて居た。

此の改革案が印度の政界に非常な反響を起したことは無論である。穩和派は、自分達の久しく要望して居た理想の第一歩が英國當局の好意に依つて實現されることになつたのであるから、自分達は忠誠な協同心を以て政府の此の計畫を助けねばならぬと言ひ、之に反して急進派は、之れ要するに政府の僞策に過ぎないものであつて、若し吾人が之を受入れるならば政府の權力は從來にも增して擴大されるであろうと言ひ、國民議會も此の兩派に分れて激論の末、彼等は復た復た分裂して各自の途を取ることになつた。

此の論議の際中に印度總督は例のローラット法案なるものを發表した。此の法案の趣旨は、大戰中印度の治安の爲めに施行し來つた印度防衛條令（Defence of India Act）の有効期間が間も無く經過するので、其の結果今まで監禁若くは流たくの刑に處して置いた多數の政治犯人が一度に釋放されることゝなれば、尙ほ不穩の狀態に在る印度の治安は非常な危機を招致するに到るやも測られ無いから、此の防衛條令に代はるべきものを制定すると言ふに在つた。又該案の內容は、十九世紀末から當時に到るまでの政治犯罪の徑路を詳述し、其の結論として之に對する鎭壓策を講じたものであつた。然るに此の方策の中、いやしくも政治的犯行の疑有るものに對しては直ちに檢擧することの出來る權能を行政官に與へたこと、及び此等の政治犯に對する裁判は一審にして上告を許さ無いことなどの諸點は、最も甚しい人權じゆうりんであるとして、國民運動者の非常な憤激を買つた。此の法案が條令となることを妨げやうとする反對運動は千九百十九年に入つて益々猛烈に爲り、其の三月この案が遂に立法評議會で白熱的大激論の末通過した結果、ガンヂーの提唱する消極抵抗は全印度に擴り、三月末日から四月にかけ、デリー及びパンジャブ各地の騷じやうと爲り、別けてもアムリツツアールの大虐殺を招致した。加之、土耳古の處分に關する回教徒の不平は次第に高まり、遂に翌千九百二十年の春には彼のキラファット運動と爲つて全印度を騷がした。之が爲め其の初めにはモンタギューの新政に不滿ながらも其の立法議會に參與

してそこで覇を爭はんとして居たチラーク、ガンヂー等の急進派は、此等の騒亂に乘じて新政を根本的に覆さうと掛つた。その爲め此の改革令の實施も遲れて居たが、千九百二十年春夏の交から印度政廳は施行準備を急ぎ、次で同年十一月該法令に依る第一回の選擧が行はれた。其の選擧に際し急進派は有ゆる妨害手段を講じて選擧を不可能ならしめやうとしたけれども、之は遂に失敗に終つて、該法令はいよ〳〵實施された。

穩和派の滿足する此の新條令が施行されるに到つたことは、いやが上にも急進派の不滿とする處であつて、彼等は消極抵抗の手段を極度に用ひて英國の統治其物を覆さうとした。此の形勢に對抗する爲め、印度政廳が同年十一月即ち選擧の行はれたと同じ月に發した長文のプロパガンダの中に、

「非協同派の代表者は、彼等の目的は印度に於ける英國政府の基礎を掘り返し、其の現政治を破壞するに在ることを公言し、且つ又彼等は、たゞ彼等の唱へる福音（非協同運動）が一般的に行はれるならば、印度は一年の中に自治及び獨立を獲るであろうと其の追隨者に公約した。」

と述べて居る樣に、急進派は獨立に等しい自治を望んで有ゆる手段を講じたのであつた。當時印度のホーム・ルールを創唱したベサント夫人はガンヂー等の急激派と意見の一致を欠いて穩和派に去り、國民議會は全然急激派の手中に歸して了つた。一昨年四月（千九百二十二年）ガンヂーのたい捕以來今日まで急激な自治運動は一時其の聲を潛めて居たが、印度は果してモンタギューの新條令に滿足して、靜穩な歩みの中に十年目毎の革新ををとなしく待つであろうか。又よしや印度の國民が新制度當初の聲明に信賴するにしても、英國は果して如何なる程度にまで自治の範圍を擴張するであろうか。「異種の民族に、カナダ及びオウストラリア同樣の自治を與へることは到底英帝國の忍び能はぬ處である」と言つた當年政治家の心理は、或は永く英國々民の心念を支配するではあるまいか。「印度はデリー及びシムラより治むべきであつて、ホワイトホールやダウニング街から治むべきで無い」と叫んだ印度名士マヅムダールの希望が達成せられるにせよ、そのデリー及びシムラの主人其物が純然たる印度人たる時期が來るであろうか。

第二節　スワデシ

カーゾン卿の教育改革意見並にベンガル分割政策に反抗して起つた國民主義者が、彼等の目的

を貫徹する爲めに採つた手段が此のスワデシ運動である。英國の商品に對して不買同盟を結び、英國の製造業に打擊を加へて英國政治家の反省を促し、以て其の計畫を撤回せしめるといふ點から觀れば一種のボイコットである。併し此の運動が、外國品の排斥と同待に自國產業の復興を當面の目的としたところは、單なる手段方便を本質とするボイコットとは本來の內容を異にして居る。もつとも彼等が此の運動を始めた當初に於ては、ボイコットと同樣單なる手段として行使されたが、其の效果が豫想外に强大で、スワデシ本來の字義卽ち國產自給の結果が自然的に發現したのは、國民運動史上の一奇といふことが出來る。先年ガンヂーが消極抵抗を提唱するに當つても、スワデシは矢張り其の一大綱領として掲げられ、ガンヂー指揮の下に老幼婦女に到るまで國產自給に努力した。但しベンガル問題の際にはスワデシ運動の成功も一要因を爲して同州の分割は數年後に取消されたに反し、ガンヂーの消極抵抗は全印度に亙つて、とう天の浪を揚げたにも拘らず、遂に之といふ具體的效果を收め得ずに、ガンヂーたい捕の悲劇に幕を閉ぢた。試に英印貿易年表を見ると、スワデシ運動の行はれた年には英國の對印輸出額が著しく激減して居ることが判る。卽ちスワデシの手段的效果の外容は統計の數字に依つても推知し得られるのである。然るに單に之だけでは消費者たる印度の同胞に幾多の不便を感ぜしめて高價な製品を購買せしめる結果を來すに止まり、スワデシ運動の手段的效果の內容は知ることが出來ぬ。此所にスワデシの手段的效果の內容といふのは、スワデシ運動の目的物たる製品に對する印度人の需要能力、之に對する供給能力、及び此の兩者の關係から歸納した排貨の持久能力等である。輸入統計の數字の上で如何に深大の打擊を英國製造の貿易に加へたにもせよ、若し印度人が其の品々に對する需要が猛烈であり(殊に生活必需品たる場合)而も印度自身に之を製造供給することが出來ぬ場合には、英國側の苦痛以上に自ら苦しむことゝ爲り、從つて此の運動の持久性を欠ぐ結果終局の敗を招かねばならぬ譯である。斯く觀察すると、スワデシの手段的內容は其の目的たる國產自給の觀念と一致する。此所に論じやうとするのは本來の目的としてのスワデシ運動卽ち字義通りの國產自給の歷史及び性質である。

ここに國產自給といふも單に工業だけの意味であつて農業は含まれて居無い。嚴正に言へば英國が工業國であり印度が農業國であり、從つて後者が原料供給者たるに對し前者から後者に輸入するものが製造品に限られて居ることからして、國產自給が工業に限定せられるのは當然の歸着

である。然らば如何なる工業がスワデシ運動の目的であつたかといふに、事實の上に於ては殆ど木綿紡織業だけであつた。其の理由は、(一)印度の輸入貿易の大宗たる木綿紡織は英國の主要産業で、且つ印度を最大華客とするものである。從つて印度の需要如何は直ちに英國の主要工業に興廢的の影響を來たすこと、及び(二)此の木綿紡織業は、本來印度に生れた工業で、且つ英人の侵入の爲めに衰退するまで印度の製品を以て世界の市場を支配した歴史を持ち、今日でも之を復興して自給する可能性ある爲めであつた。英印貿易の數字を羅列し、スワデシ運動と木綿貿易の消長を掲げて、スワデシの手段的効果を論ずるの煩をさける。たゞスワデシ本來の性質上、木綿紡績が印度に於て國産自給し得る可能性有るや否やを論述し度いと思ふ。

史家バイネス（Baines）は其の著「木綿製造史」（History of Cotton Manufacture）に於て、木綿製造の搖らん地は印度であつて、恐らく有史以來盛に營まれて居たものであと云ひ、尙ほ紀元前千七百年代ジョセフの時に、エジプトの國王が美しいリンネルの衣物をつけて居たことが記錄されて居るが、エジプトのリンネルと同時代に印度で木綿が製造されて居たことは確であると言つて居る。又ヘロドタス（Herodotus）は紀元前四百四十五年前に記錄して、印度では其の時代に木綿を日常の着衣にして居たことを述べ、其他ストラボ（Strabo）は印度人の花模樣の木綿及び其の模樣と繪と種々の美しい染料に就いて述べて居る。紀元二世紀頃のエジプト人アルリアン（Arrian）はアラビア人及びギリシヤ人と印度都市との貿易を記し、アラビアの貿易商は印度の木綿を紅海の港アヅリに齎らしたこと、紅海以西の諸港も、他の品々と共に特に各種の木綿織物をインダス地方の諸都市と貿易したこと、中にもバジガザ地方はカリコやモスリン等の織物を輸出したこと、モサリア若くはマスリパタム地方は其の時分からモスリン製造地として有名であつて、ベンガルのモスリンも特に優れて居たこと等を述べて居る。羅馬帝國時代にも印度の木綿は盛に東羅馬に輸入された。有名なマルコ・ポロも亦木綿がインダス河流域の地方で多額に製作され、全印度の名産であつたことを述べて居る。此くて數百年間ペルシア、アラビア、シリヤ、エジプト、アビシニア及びアフリカの東岸は印度からのコットン及びモスリンで支配されて居た。加之、木綿紡績の技術も十三世紀には印度から支那、日本に渡り、又回教徒の西進に伴はれアフリカ北岸を傳つて十世紀にはスペインに入り、十四世紀には伊太利に入つた。バイネスの言つて居る通り、木綿工業は印度の鄕土から舊大陸に沿ふて東は日本、西はタグス河口及びセ

ネガールに擴がつた。

尙ほバイネスの記錄に依ると、印度コロマンデルの海岸やベンガル州では、どの村もどの村も男女老幼の別無く木綿を織ることに從事して居たと言つて居る。尙ほ木綿織は大都市若くば二三の地方に限られたものでは無く全印度に普及して居た。卽ちベンガルは最も美しいモスリンを產し、コロマンデル海岸地方はチンヅ（Chintz）及びカリコを產し、スーラツトは總て强い木綿織を產し、パトナも亦優秀な製品を產出した。又コンダヴアールでは美しいハンカチーフを產し、其の華麗な染色はキシユ川の岸やベンガルの海岸に生ずる植物から製作された。チンヅやギンガムは主にマスリパタム、マドラス及びバリアム・コツタで作られ、長い布地やはかま地はマドラスから來た。其他歐洲、アフリカ及び亞細亞の市場に現はれる多くの種類が織出された。そして此等印度產の織物の美しく、肌觸り良く、且つ値段の安かつた爲め、歐洲の製造業者は印度の競爭者の爲めに破產にひんする脅威を受けた。別けてオランダの貿易業者や英國東印度會社は多額の印度產の木綿物を輸入し、之が爲め千六百七十八年には早くも、印度紡織の輸入は古來の我が製造業を滅亡せしめつゝあるとの叫が英國で起つた。當時の記錄としてラジバト・ライが引證する處に據ると英國では次の樣な不平の聲があつた。

「毛織物貿易は、我が國產の代りに多額の外國品を着る同胞の爲めに著しく妨げられて居る。卽ち小供の上衣に用ひられる綠色のセイ織の代りに、今では模樣やしまの印度カリコが用ひられて居る。又或時には男の上衣や女のペチコートに仕立てる爲めにベンガル織が用ひられて居る。……かゝる品物には非常に高い租稅を課する必要が有る。」

と。又千七百八年にダニエル・デフォー（Daniel Defoe）は次の樣に書いて居る。

「印度の品物に對する一般のし好はこうじて、前には唯しき物、夜具及び小兒や普通男兒用の着地に用ひられて居た印度產のチンヅ及び模樣付のカリコを、今は我が貴婦人が着て居る。……我國人の床にしかれて居たチンヅは昇格して脊中に着られる樣になり、甚しきに至つては女皇でさへ、支那產の絹と共に印度のカリコを着けて出御される樣になつた。……印度織は我が家庭に潛入して、書齋も寢室もカーテンもクションもいすもベツドも印度織ならぬは無い有樣である。手短に言へば婦人の衣類から家具に至るまで、前には毛織物や絹物を使用して居た處が悉く印度織に變つて了つた。」

と。斯うした印度織の侵入はデフォーが此事を書いた前から激しかつた結果、既に千七百年にはウイリアム三世の第十一條令及び第十二條令を以て印度貨物の輸入禁止が布告されて居る。即ち衣類たると家具たるとを問はず、家庭用として印度製の絹及び模樣地のカリコを用いた際には、使用者若くば賣却者に二百ポンドの罰金を課した。此の高い罰金にも拘らず英國は千七百二十八年過まで印度品の使用は絶え無かつた。而も此の災厄（イヴイル）（英人はしやれて斯く叫んだ）は英國丈では無くて全歐洲に及んだ。此所にもバイネスは述べて、

「印度織は餘りに美しく又安價であつた爲め、殆ど全歐洲の各國政府は、自國産業を保護する爲め印度品の輸入を禁止するか、又は非常に高い輸入税を課することを必要と考へる程であつた。」

と言つて居る。

是れ程盛であつた印度紡織が如何にして衰退し、英國のランカシヤー紡績が之に代るに至つたかの原因を、ラジパト・ライは次の三項目に歸して居る。

第一、動力機の發明其他の機械の應用。此等は最も主要な原因であるけれども、是れとても先に述べた樣に各種の手段を以て印度からばく大の資本が齎らされ無かつたならば、此等機械の發明も利用することが出來なかつたであらう。

第二、東印度會社が自己の爲めに作つた特權（モノポリイ）。

第三、英國政府が印度木綿の輸入に非常な重税を課したこと。

英米の論者の中には、此所に掲げる第二、第三の原因、即ち英國の政策が印度の主要産業を衰退せしめたといふ主張に反對する者が少くない。彼等は言つて居る。英國の政策が印度紡績業の衰微を早めたことは事實である。併し、印度の綿業が英國の政策無くとも早晩衰退すべきものであつたことは、ペルシアやエジプトの紡績が單に産業革命の結果たる英國の工場紡績の爲めに壓倒された例によつて實證されるでは無いかと。日本の手織木綿がランカシヤー紡織の侵入に對して到底對抗することの出來無かつた事實を目擊した本書の著者は、原則としては此等英人の主張に贊同する。併し、若し英國東印度會社が極度に其の特權を行使し無かつたならば、又若し英本國政府の關税政策が、印度綿業を犧牲にして本國産業の保護に偏重し無かつたならば、印度の紡織はあれ程も無殘に壞滅すること無く、徐ろに現代の工場組織に轉換する餘裕を得たであらう。

極度の特權を有する東印度會社の使用人及び其の下受人（ゴマスター）（Gomastahs）が、體刑其他の暴力にうつたへてまで印度の生產者から時價の半にも足らぬ價格を以て强奪的に製產品を買取り、之が爲め工場主や織工が逃亡して一時に印度紡織の衰退を來たしたことは先に記述した處である。斯くて印度は千七百五十七年から千八百二十九年に至る約七十五年間に、曾ては歐洲市場を獨占する程の勢の有つた精製品輸出國から、一轉して原料供給者の地位に下つた。當時英吉利ではマンチエスター派の自由貿易主義が勢力を得て、彼等は其の製造品を世界の市場に賣り付け、之と交換的に安價な食料品を輸入して之を勞働者に供給することを政策とした結果、其の植民地をばあくまでも本國製造品の獨占市場とすることに努め、「英國の北米植民地に於ては馬蹄釘一本の製造をも許さ無い」とは當時の標語と爲つて居た處である。況して印度の如く安い勞銀と共に、紡織業に古い經驗を有する植民地に對して、非常な努力と細心とを以て其の產業的復興を妨げやうとしたのは異とするに足らぬ。彼のコブデンやブライトに、故意に印度產業を壞滅せしめるといふ惡意が有つたとは言はぬ。併しながら、マンチエスターの主義が英國の對印政策を支配した關係上遂に印度の今日の狀態を招致したことは否定するを許されぬ。其の當時から最近に至る英國の對印度產業政策は要するにマンチエスター商工派の印度產業の壓迫史である。時に印度總督が、土兵叛亂（ミユチニイ）鎭定の費用、アフカン戰役其他外征の國費に充當する目的を以て英國紡績品に對して輸入稅を高くしようとしたことはあつても、それは常にマンチエスター派にこ使せられる英國議會の反對に遇ふた。今試に英國の對印度貿易政策の骨子を爲す印度輸入關稅政策に一べつを與へて見よう。

前に述べた樣な關係で紡績業が印度で衰へ英國で盛に爲つた後でも、尙ほ英國政府は英國製品に對しては三分五厘の從價稅を以て印度への輸入を許したに對し、印度製品の英國輸入に對しては從價一割を課した。之はいふまでもなく英國の專橫であると同時に自由貿易主義の自殺で無くて何であらう。手織機の外には一個の動力機械も無ければ又此等を備へる資本さへ無かつた印度が、此の偏頗な政策のハンヂキヤツプを凌いで其の生產を維持することは到底不能のことであつた。それにも拘らず、千八百七十四年にはマンチエスター製造業者は連署して印度事務大臣に書を呈し、此等の印度輸入稅は一種の保護關稅であるとして攻擊し、又リツトン卿が印度總督でありつた時には、同派は之を以て英國下院の問題とし、左の決議をした。

「當院の主張として、目下印度に輸入せられる木綿精製品に課せられる關税は其の性質上保護的のものであるが故に、印度の財政狀態が許す限り速に撤廢せらるべきものである。」

と。之が爲め印度政府は其の歳入に二十餘萬圓の犧牲を忍んで數種の綿製品の輸入税を免除したに對し、英國工業家は尙ほ不平を並べ、一齊に關税の撤廢を要求した。印度總督評議會では之に對し不快を抱く人が多く、ホイットレー・ストークスの如きは「マンチエスター製造業者のいふ如くば、印度國民は今日よりも一層粗惡な品物を買はせられる」と言ひ、又印度の新聞紙は、「輸入關税の廢止は單にマンチエスター派及び來る總選擧に於てランカシヤー縣の投票を得んとする政治家の手段である」と言つた。サー・アレキサンダー・アルブスノットも亦、

「現在印度官吏中、輸入關税撤廢政策が印度の利益の爲めでも無く、又英國自身の利益でも無く、如何なる犧牲を拂ふともランカシヤー紡織業者の政治的支援を得んとする一政治團體の利益の爲めに過ぎぬことを考へぬ者は幾人も有るまい。」

とかつ破した。夫れにも拘らず一時此等の輸入税は全廢されて居たが、その後千八百九十四年に印度政廳が約二千萬圓の歳入不足を生じ、之を補足する目的を以て輸入税再興の議の有つた時、僅に起りかけた印度内の紡織業者は、その印度人たると英國人たるとを問はず、一致して木綿類輸入税除外に反對した結果、政府は歳入を得ると同時に、マンチエスターの印度貿易業者をも苦しめぬといふ見地から、輸入品に對し從價税五分を課すると共に、印度内の製造品に對しては國内消費税を課することにした。

斯うした極度の壓迫にも拘らず、踏みにじられた印度の土地にも現代工場の芽が何時とも無く芽差して、例のベンガル問題の起つた千九百四年には英領印度に百九十一の紡織工場（五、一一八、一二一錘、四五、三二機）が存在し、スワデシ運動の盛であつた千九百九年には二百五十九場（六、〇五三、二三一錘、七六、八九八機）千九百十一年には二百六十三場（六、一九五、六七一錘、八二、七二五機）と漸次增加した。此の印度内紡績業の發達とスワデシ運動とは當然聯繫され、印度の政客は英國の政策に反對の聲を擧げて、印度は原料の輸出を以て滿足す可きで無く、之を國内の製造業に用ひ無ければならぬと言ひ、「幼稚な産業は當然保護さるべきものである」と言つたミルの言を引證し、又母國の輸入品に對してさへ課税の權を與へられて居る自治領植民地を指てきして之にならはんとした。歐洲戰役の千九百十七年に入つて、此の關税政策は印

度に取り急に有利に展開し、國内消費税は其まゝとして英國品に對する輸入税のみを三分五厘に引き上げた。保護政策の權威として、又「大英帝國」（Greater Britain）建設の主唱者たるオウスチン・チエムバレーンは當時印度事務大臣としてロンドン・タイムス誌上に「印度は最早、英帝國の他の部分の爲めに木を伐り水をそそぐ役目を續けもし無からうし、又續ける義務も無い」といふ有名な主張を掲げ、又當年印度國民黨の政敵であつたカーゾン卿も亦「余は曾て千九百八年の頃、印度の財政政策は過去三、四十年間、カルカツタよりもマンチエスターで指導されて居ると言ひ、又千九百十年にはマンチエスターで演説して、印度の財政政策が、ランカシヤーの勢力に頭の上らぬ印度事務大臣や英國下院に從屬することをほのめかしたことがある」と述べた。然るに此の關税引上も、將た英國大政治家の阿諛も、其實歐洲大戰役中あの貧乏な印度から一億ポンド即ち日本貨十億圓の公債を募集する下心であつて、之が爲め英本國では片やランカシヤー派及び自由貿易主義者と、片や印度事務大臣及びロンドン・タイムスとの間に激烈な論爭の石つたのは寧ろこつけいである。

此等の事實を述べ來つた時、何人か英國の對印度産業政策が印度の木綿紡績の衰退に影響し無かつたといひ得るであらうか。少くも産業革命の結果たる現代工業組織の生産品が、ランカシヤーの工場主の意嚮に左右された英國の政策の力を藉り、堤を決した洪水の樣に印度に流れ込んで其國在來の木綿産業を壓倒したことは否定し得られぬ處である。金銀は寶庫に藏し、地下に埋め、若くば身邊の裝飾とすべきものであつて、之を運用し利殖するはバニヤ（Banyas）姓階以外の爲す可き仕事でないと爲した印度人が、株式其他大企業に要する資本運轉の素質に欠けて居たことは言ふまでも無い。且其他の企業能力にも欠けて居り又現代機械生産の技術にも經驗の無い印度國民が、七八十年の間に工場組織の産業に壓倒されたのは當然である。カルカツタ、ボムベイ、アーメダバド、コウンボール其他の都市には近來紡績業が起り、特に西部都市の工業は漸次英人を驅逐して、ペルシアから印度へ移住したものゝ子孫たるパーシー人の手に獨占する傾が有るが、之れとて全印度の需要額に對する供給率から言へば尚ほ多大の徑庭があつて、千九百十七年に至り、漸く國内木綿全産額は需要額の半ばと爲り、最近スワデシ運動の猛烈を極めた千九百十九年、及び同二十年に於てさへ、印度全輸入貿易中約三分の一は英國製木綿品に占められて居た。現今印度國内に於けるスワデシの叫は下火に爲つて居るに對し、却つて英本國政府は大戰

の經驗から其の年來の政策を一變し、印度國内に製造工業を起す方針を取り、先に印度政廳の下に産業委員會を設置し、其の調査の結果、中央産業局を設けて印度各地方政府と産業發達の途を協議し、又一方には從來禁止同樣の壓迫に遇ふて居た産業教育を奬勵することにした。然らば之に依り印度の産業はスワデシ卽ち國産自給の域に回復し得られるであらうか。曾て「世界で一番安いものは英國の金利と印度の勞銀である」と言はれた其の勞銀と共に、又頗る安價な原料を包有する印度が現代企業の能力に目覺めたならば、恐らく歐洲の産業に對する脅威と爲るであらうとは一部識者の憂であつた。サー・テオドール・モリソンは印度經濟の將來に就いて次の樣に言つて居る。

「印度の産業改革は近付いた。現代生産組織の採用を妨げた障がいは除去された。運輸機關は全國を通じて布かれ、機械の購入、工場の設立に要する資金は良好な條件で借入れられ、將來印度工業の鬪士を訓練すべき專門技師及び事務のマネージャーは歐洲から雇入れることが出來、英語を共有語として印度各地と歐洲との取引は行はれ、内亂外寇に對する保障は大企業を安心して計畫することが出來る。斯くて總ての條件は從來未だ曾て夢想だもされ無かつた印度の年産額の增加を來す可き工業の大改造に有利である。」

と。此等の樂觀論に對し極端な悲觀論が有つて、其の言ひ前は次の如くである。

「成程印度の勞銀は安い。併し彼等は勞銀の安いだけ粗惡な食物を取り牛馬の如く生活し、體力も劣れば教養も規則も熟練も無い。且つ彼等が、工場勞働に從事するは、よく〳〵困つた揚句たゞ一時の隱家とするだけであつて、時機が來れば復た元の農業其他の仕事に歸つて行くを常として居る。斯うした素質の惡い勞働者を以て精鋭な勞働軍を持つ歐米工業と競爭するは思ひも及ばぬことであつて、西歐諸國が飛行機時代に入つて居る今日、印度は漸く自轉車、自動車の域に進まうとして居るに過ぎぬ。先年の大戰中、歐洲列國では各種の新發明があつたに拘らず、印度では何等の文運をも見無かつた。西歐諸國と印度との産業的地位は、其の懸隔の程度を日に月に擴大しつゝある。斯くて印度は永久に農産原料の供給地たるに止まり、現代工業に依り作られる富は歐米諸國に集積して、印度は世界の貧民窟たるに到るでは無いか。」

と。若し此の悲觀論者の言ふ如くであるならば、印度に現代の工業組織を受け入れてスワデシの目的を達成するは不可能のことで無ければならぬ。スワデシ運動者の主張する、(一)自治が獲ら

れるまで英國製品を排斥し、(二)自治を獲た後に保護關稅によつて印度產業を確立し、(三)英國資本の活動を拘束し、(四)高級の英國官吏の代りに印度人を入れ、(五)此等に依り印度の富を國內に保持して英國への「流出(ドレーン)」(Drain)を防ぐと言ふ計畫に對し、モリソンを始め一般英人は次の如く云つて居る。

「英國の海軍及び英國の授信行爲が印度に與へる利益は英國官吏に支拂ふ俸給、年金及び賞與金の對價である。印度が英國に支拂ふ金額に對し、何を印度が得て居るかといふ問に對する答は『印度は英國の爲めに、現代產業の準備と印度自身でするよりは安價な費用を以て經濟的發達に都合の良い行政とを得て居る。疑ふものは日本に觀るが良い。日本はその國防の爲めに高い租稅を拂ひ、國家としての信用は低く又內外債の金利は非常に高率である』と云はねばならぬ」と。「獨立國家としての榮譽」を度外して、我が日本が引合に出されては痛み入る次第だが、印度人中には彼等の民族的特有性から、現代組織の產業を排除しながらスワデシの目的を爲し遂げやうとする理想家がある。その人達のいふには、英國官吏の代りに印度人を入れ替へたとて、それ等の印度人は英國人同樣の生活になれて居るから何等の節約にならぬのみか、却つて他の印度人の俸給をも引上げなければならぬことゝ爲り、保護關稅を高くして英國製品の輸入を防ぐとせば、其の代り英國の資源は一層激しくはく奪される結果と爲る。又英國風の教育を施したとて、それは單に印度在來の慣習し好を破壞して外國の文化に賴らしめる結果を招致するに過ぎぬ。要するに自治運動者の主張するスワデシの如きは何等の改革を來たすものでは無いと。ナース・ボース(Nath Bose)は曾てヒンヅスタン・レヴユー誌上に論じて、自治運動者のいふ如くすれば、何等の對償をも得ずに益々西歐文明のかんせいに落ち込むだけである。それだから印度を救ふ方法は政治の分界には屬せずしてそれ以外にある。西歐文明の道程を追うには非ずして能ふ限りそれと遠ざかるに在ると。此の主張は有名な理想家ラビンドラ・ナース・タゴール(Rabindra Nath Tagore)も或る點まで一致する處である。又かのガンヂーが在印度英人の即時撤退を迫り、印度は英國の設けた鐵道、水利、病院等の文化事業の爲めに寸毫の恩惠にも預つて居らぬから、何時破壞してもらつても何等の苦情は無いと言ひ、自分自身眞先きに猿股一つの半裸體に爲つて同胞に對し、印度の樣な熱帶國では冬の二ケ月以外は猿股一で暮せといひ、又衣服に要する木綿も印度在來の手織機で每戶に製造すべきものであるといつたのは、

矢張り、印度教の思想を受け繼いだ禁慾主義の反映と觀なければならぬ。併しながら、現代世界の大潮の中に立つて、印度獨り其の國を鎖して經濟的組織の外に超然たらんとするは、之を要するに夢中の空想である。ガンヂー等の爲す處がスワデシ本來の字義を度外視して單に之を自治獲得の手段とするならば格別、いやしくも之を以て印度產業の獨立を圖るものとするならば、う愚も亦甚しいものと觀るべきであろう。

第三節　サチアグラハ

サチアグラハの名稱を以てする印度の國民運動が行はれたのは、ガンヂーの提唱に依り千九百十九年二月の運動を初めとして居る。併し、それは單なる名稱の變改であつて、從來「消極抵抗」(Pass've Resis'ance) 若くば「非協同運動」(Non-Co-operation) と唱へられたものも、其の實質に於てはサチアグラハと同一である。ガンヂーは曾て、

「英語の『消極抵抗』(パッシイヴ・レジスタンス) といふ言葉は、余が言ひ表はそうとする勢力を充分に意味して居ない。寧ろサチアグラハ即ち『眞理の力』(Truth-Force) の方が正當な意味を含んで居る。『眞理の力』は卽ち『精神の力』(Soul-force) であり武力とは反對なものである。」

と。此の言葉の如く、彼は口癖の樣に、パッシイヴ・レジスタンスといふ言葉は自分の行動を支配する思想を言ひ表はすもので無いことを注釋し、「眞理の力」「精神の力」若しくば「愛の力」であると言つた。彼は又或る時此の思想の起源に就いて次の樣に物語つたことが有る。

「自分は學校に居た頃、人がお前に一杯の水を與へたに對し、お前が同じく一杯の水を返禮しても、それは何等意義の無いことである。眞の美は惡に對して善を爲すことであるといふ意味の詩文を學んで非常に感動したことがあつた。

其後青年に成つて、新約全書の中の『山上の垂訓』を讀み、かの有名な、

害を爲す者に抵抗するな。右の頰を打つものには更に他の頰を出せ。

といひ、又

天なるなんじが父の兒であり得るが爲めには、なんじの敵を愛し、又なんじを迫害する者の爲めに祈れ。

といふ條項を讀んで無上の感激に打たれたことがあつて、此の『山上の垂訓』こそ自分の生

がいに革命的變化を來たしたものである。」

と。ガンヂーのあの偉大な人格が、此の「眞理の力」「愛の力」を源泉として動いて居ることに何の不思議は無い。併し、彼の一舉手、一投足によつて全印度にわたり内亂にも等しい白熱的運動を起す力が、右の頰を打つものに更に左を呈し、害に酬ゆるに德を以てする如き、受働性のみを内容とするものとは受け取られ無い。少くとも其所に相手方を壓要する勢力が潛在して居る可き筈である。果せるかな、印度政廳の年報は千九百二十年度（India in 1920）に於て、此の點に就いて次の如く述べて居る。

「物質力に對する精神力の優越性に關するカンヂーの主張、政府を感動せしめる手段として國民的斷食に關する彼の鼓吹、消極抵抗の不可抗力に關する彼の確信、總て此等は『ダールナ』（Dharna）と呼ばれる古代の印度教の教義に論理的根據を持つて居る。抑も此の『ダールナ』といふは、自分の自由意志により耐へ忍ぶ肉體的苦痛を通して相手方に道德的壓力を加へることである。ガンヂーが低い身分の生れにも拘らず、單なる禁慾主義者としてで無く、印度教傳說の完全な代表者として全印度國民に不可抗的の力を以てうつたへる所以は、實に此の『ダールナ』の思想の爲めである。」

と。ガンヂー自身が、サチアグラハ運動は、自苦すること（Self-Suffering）により禍根を除く謂であるといつて居るは此の意味である。又ガンヂーの言ふ如く、サチアグラハは本來の意義に於て宗教的運動である。潔齊及び贖罪の手段である。之が政治運動に適用されるに及んで消極抵抗ともなれば、非協同ともなり、國民的休業（Hartar）とも爲るのである。換言すれば、サチアグラハの思想が政治運動と爲つて現はれたものが消極抵抗であり、非協同である。

印度は本來思想の國柄であり、精神文明の人種である。「精神の力」を以て西歐文明に對抗せんとするガンヂーの叫が、ヒマラヤ山南の天地に大音聲の如く響いたのも、要するに印度三億民衆の胸底に潛む此の古來の琴線に觸れた爲めである。從つてガンヂーの主張も決して彼一人の獨占する處では無くて、彼の前幾多の先覺者により唱道され來たものである。ベンガルの哲人ヴィヴェカナンダが同州の子弟を激勵して、「軍隊を以て印度の國土を蓋ふは外人の自由に任す。起てよ。印度ー。汝の精神を以て世界を征服せよ」と叫んだのも此の意味なれば、又彼のチラークが鐵血的行動の傍ら消極抵抗の手段にうつたへたのも、矢張り印度古來の思想を所依としたもので

ある。印度國民運動の上に、消極抵抗が唱道されたのは、千九百四、五年此のチラークの叫を以て第一聲として居る。ラジパト・ライはチラークの意圖に對し、註釋を下して、

「消極抵抗の目的は二樣有つた。夫れは次の二項目である。

第一には、印度國民及び國家としての印度をして、治者たる英國人は萬能であり且つ彼等は愛他的であると思はしめて居る催眠術から、印度及び印度國民を呼び覺まし、印度自己の力の意義及び自己文明の評價に自覺せしめ、

第二には、國家の利益の爲めに自苦する犧牲の精神に伴はれた自由に對する愛着の感情を養成する。」

といつて居る。此の消極抵抗はガンヂーの統率時代に爲ると餘程具體化して來て、千九百二十年の國民議會の特別委員會で決議した方法は次の如きものであつた。

（一）稱號及び名譽的官職を返還し、又地方團體に於ける官より指名された議席を辭職すること。

（二）政府の祝賀式及び官吏其他の名譽により爲される公式又は半公式の儀式に列席すること

を拒絕すること。

（三）政府の經營補助若くば監督する各種の學校より漸次學徒を退校せしむること。

（四）辯護士及び訴訟人は政廳の裁判所に出廷せざること、及び私的爭議を決定する爲め此等の人々の助力の下に私立仲裁裁判所を設立すること。

（五）武族、僧侶及び勞働階級の人々は、メソポタミヤ戰場に於ける職務に應募せざること。

（六）モンタギュー・チエルムスフオードの建議により改革された新評議會の選擧に立候補又は投票せざること。

ガンヂー派の一般國民に對するこの提唱は、ベサント夫人等の一派を始め國民運動者中にも猛烈な反對があつて、僅に其の二、三項目を除く以外のものは大體に於て失敗に歸した。又一方にはガンヂーの崇拜者でありながら彼の精神を誤解し、チョウリ・チョウラやマドラス其他に於ける暴動を起し、爲めにガンヂーは其の責を引いて入獄の已む無きに到つたにも拘らず、サチアグラハ及びダールナの思想を行動（Karma）に飜譯した非協同にして非暴力（Non Co-Operation Non-Violence）の主義は依然として印度國民運動の最重要の武器として遺されて居る。一昨年

末（千九百二十二年十二月末）の國民議會大會に於て、其の議長たるダース（Das）が、ガンヂーの主張を繼いでこの非協同を高調した際、其の動議の破れたのは、當時ガンヂー始め幾十の領袖が皆投獄されて居た結果であつて、之を以て印度にサチアグラハの思想及び夫れに基く主張が滅んだものとするは早計である。武力の行使を嚴封され、且つ民族古來の習性として精神的なる印度國民の國民運動は、恐らくサチアグラハの思想を基調とする國民運動の武器を捨てることはあるまい。

最近までガンヂーが牢獄に苦しみをなめて居たのは、サチアグラハの思想を以て解釋すれば、其の肉體上の苦痛を忍ぶことに依り、相手方たる英國政府に精神的壓力を加へる手段に外無らぬ。併し先年パンジャブ暴動の節、州長官オドワイヤーが非協同派の議長の前に拳骨を突き着け、「ガンヂーの精神力と英國政府の腕力とどちらが強いか今に見ろ」と叫んだ如く、サチアグラハ運動の成否は、之を今日に豫想することは困難である。

第七章　印度に於ける現代工業の勃興と英國の對印度政策

産業革命は近世から現代に渡る橋であつて、此の大事實の爲めに現代人類の生活樣式は過去の夫れと全然異つたものと爲り、之が爲め思想其物までも變易しつゝある「靜止せる（イムムーヴェル）」國と呼ばれた印度が、今や形而上下にわたり未だ曾て經驗したことの無い動搖を來たしつゝあるも、實に此の産業革命の産兒たる大工場組織生産の結果である。然るに産業革命の要素たる資本は、前述べた如く東印度會社の英人に依つて印度から英國へ持ち去られたものである。若し蒸氣機關を紡績機に應用する發明が、ブラツシイ役以前に行はれたとしたならば、當時經濟的に貧血して居た英國に於ては、單に科學上の發明たるに止まり、到底之を産業の實際に應用する力を持た無かつたに相違ない。又英國の對印度貿易の逆調の爲め、英國王ウイリアム三世は、條令を發布して印度カリコ及び印度絹の輸入を禁止したが、國際經濟の大勢は一片の勅令で防止することは不能であ

つて、千七百十年から同二十年に至る十年間、東印度會社の手に依り英國から地金銀の流出した額は每年平均四百三十四萬四千ポンドに上つた。印度史家ブルースは「千七百四十七年から同五十七年に至る十年間、每年平均五十六萬二千四百二十三ポンドの地金銀が印度に向け輸出された。然るに千七百五十七年後は一切地金の流出を見無く爲つた」と述べて居る。此等の原因で當時英國の國民經濟は著しく貧血して居たのである。然るにプラッシィの戰が千七百五十七年にあつて貿易の順逆一變し、紡績機に關する諸發明が千七百六十年以後に續出し、其間に無限の富（印度全富力の七割强）が印度から持ち去られて英國の資本と爲り、又此の資本を基礎として財界の信用組織が擴大され、之に依り産業革命が實現され、其の結果印度在來の工業は全滅して、一旦純然たる農業國に復歸し、其後約半世紀を隔てた今日、印度にも現代工業組織が齎らされて、之が爲め後章に述べる如く印度の國民性に根本的變動を生じつゝあるは、奇しき世界的大事實と言はなければならぬ。

産業革命、工場組織の發達が、印度の國民經濟に如何なる影響を來たしたかを述べる前提として、吾人は先づ産業革命が英吉利の經濟並に政治組織に齎らした變動に就いて一べつを與へる必要がある。十八世紀後半に於ける蒸氣機關の諸發明が紡績、鐵其他各種の産業に適用された結果、十九世紀初頭には英吉利の國民生活は異常の變化を呈するに至つた。卽ちランカシヤー州其他石炭を産出する地方には、忽の間に工場街が建てられて昨日までの寒村は今日は繁榮な大都市と爲り、之に反し新に敷かれた鐵道の線外に置かれた從來の都府で寥落たる田舍に變はるものも多かつた。此の事實は直ちに代議士の選出區域並に選擧資格に殆ど根本的の變改を必要とするに至り、遂に千八百三十二年の選擧法改正と爲つた。改正の結果從來下院に威力を振ふて居た大地主連はへい息し、之に代つて中産階級の商工家が議會を制することゝ爲つた。彼のウイグ黨が急進黨と合して自由黨と改稱し、トリー黨が保守黨と改めたのも此の改制の結果に外ならなかつたのである。然るに此の時勢の推移の中に立つて英國産業の發達をそ止するものがあつた。夫れはいふまでも無く重商主義の保護政策である。金銀を以て唯一の富となし、之を得る爲めに輸入品に重稅を課し、之に依つて內地の商工業を保護せんとした。例の穀物條令の如きも、之により貴族地主の農業を保護する趣旨に出たものである。然るに今や英國の商工業は非常の發達を爲し、最早保護關稅に依つて之を保護する必要なく、反つて關稅を撤廢し、原料品と食料品とを低廉に供

給して貿易を促進することが、英國の利益であるとの說がアダム・スミスに依り唱道され、又選擧法の改正により商工出の代議士が多數と爲つた結果、自由貿易の主張は益々盛と爲り、マンチエスター出身のコブデン及びブライト等の必至の運動に依り、遂に穀物條令を廢止して自由貿易制を實現するに至つた。之が爲め英國の產業は大に振作されて世界の商權を制することを得たに反し、印度の產業は其の餘波を受けて殆ど全滅した。抑も英國の對植民政策の骨子は、本國に對する低廉な原料供給地たらしめると同時に本國製品の賣捌市場たらしめることである。「馬蹄釘一本でも北米の植民地で作らせぬ」と言つた英國政治家の言は、最も露骨に此の主義を言ひ表はしたものである。印度に對しても無論此の政策を以て臨んだが、盛な印度の木綿業が英國の毛織業を壓迫し、遂には勅令を發布してまで其の輸入を禁止したことは前述べた如くである。產業革命の結果せん維工業がいよ〳〵英國產業の大宗と爲るに及び、英國の對印度貿易は一躍して積極的と爲り、印度の紡織業を全滅し、單に原料たる棉花を供給せしめるを以て滿足せず、英國製木綿の市場と爲すことを目的とするに至つた。故に自由貿易政策確立後に於ても、英國政府は印度綿製品の或るものは輸入を禁止し、或るものには重稅を課して本國への侵入を防壓し、印度綿業に打擊を與へた。千八百五十七年の印度兵大叛亂の結果、其の翌年印度が東印度會社の手を離れてヴイクトーリア女皇の直轄する處と爲つた時、英國製綿絲の印度輸入に對しては從價三分厘の輸入稅を課し、又其の翌年には叛亂鎭定費より生じた印度政廳の財政的苦境に處する爲め、英國製綿布其他に對して一割、同綿絲に對しては五分の稅率にまで引き上げた。其後幾度か稅率の變更はあつたが、此の印度政廳の收入を目的とする輸入稅は、一面に於て印度の綿絲業を保護して英本國の工業の發達を妨害するものであるとして、千八百七十四年にランカシヤーの工業家連が、印度輸入稅の廢止を印度總督に建議して以來、印度の綿絲工業は絕えずランカシヤーの工業家並に彼等の機嫌を取つて地盤の擁護を圖る政治家の壓迫する處と爲つた。之が爲め印度總督は財政收入の激減を忍んで遂に五分稅を三分に引き下げ、又後に之を全廢した上印度製品に對してのみ國內消費稅を課した。英國人の政策が如何に深刻であつたかは、當時印度從來の家內工業は前述した如き暴力的壓迫の爲めに疲弊し盡き、又近代的工場はカルカツタに僅か二、三あつた丈けに過ぎ無かつたに觀るも思半ばに過ぎるであらう。此の政策は歐洲大戰のぼつ發後まで持續されたので、流石ごう岸な前印度總督カーゾンをして、「印度の財政政策はカルカツタに於けるよ

りも寧ろマンチエスターで計畫されて居る」と叫ばしめ、又「印度の財政政策は印度事務大臣及び衆議院に服從することゝは爲つて居るが、其の實ランカシヤーの勢力に影響せられることが多い」と憤慨せしめた程であつた。然るに英國の此の傳統的政策も一國存亡の秋であつた歐洲大戰を期として根本的に變更せざるを得無く爲つた。

英國では產業革命の結果として家內工業の破壞された跡に直樣大規模の工場工業が發達したに反し、印度では單に從來の工業を壞滅させた丈で、久しく之に代はるべき何物も現はれ無かつた。之は印度國民が現代工業組織の運用に不適當であると云ふ丈では無くして、第一には暴力的に英國に持ち去られた印度の富が、其の全額の七割以上に上つて印度を貧血せしめたこと、第二には、英國の職工が家內工業から直ちに工場へ拾はれたと異り、印度では其の大部分が田舍へ入つて農業勞働に歸したことであつた。加之、英國の印度政策の抑壓を受けて其の產業は久しく火の消えた如き有樣であつた。然るに人文の潮は到底人爲的障がいを以てせき止めることは出來ぬ。現代の工業組織は何時の間にか印度內地に潛入し、千八百八十年には合計三百八十三萬ポンドの拂込資本を以て五十八の紡績工場と、二百二十四萬六千ポンドの資本を以て二十二の黃麻(ジュート)工場とが出來、之に從事する職工は六萬八千人を算した。此の外銀行及び商事會社に投ぜられた資本は九千萬ポンドに上り、印度の產業は既に著しく復興の氣運を示した。之が英國民の爲めに喜ばれるはずが無く、關稅政策其他の手段に依り此等の幼稚な產業は、其の發達の芽を挫かれた。唯、印度の低廉な原料と低廉な賃銀とは、此の障がいにも打ち勝ち、產業の進步を持續せしめることを得たが、當時印度に於て鐵道及び電車線路を布設すること、鑛山を採掘すること、其他各種有利な事業　多く英國企業家の獨占に屬し、印度資本家の參加するを許され無かつた。現在印度國民運動の中堅に爲つて居る印度國民議會の如きも、之を經濟的立場から觀察すると、此くの如き英人の專横に憤慨した印度のブルジュア達が、千八百八十二年ボムベイに會合して英人に對する對抗策を講じたことに始まつて居る。ロシアに對する日本の勝利に依り、印度人は必ずしも白人に劣るものでは無いとの自信が出來た時、丁度かのベンガル州分割問題が起り、國民議會のベンガル人を中心として、此の分割　令を撤廢せしめる手段として英國製品に對するボイコットを行つた。當時印度の工場數は二千六百八十八有つて、其の中千九百七十が蒸氣又は電氣動力を使用し、織物工場は千七十餘萬ポンドの資本を以て百七十八個所、綿繰工場は個人經營に屬するもの

七百五十個所を算した。これ丈の製造能力では、英國品を驅逐し盡すことは出來なかつたけれども、之が動機と爲つて印度産業の發達を促したことは少く無かつた。併し何と言つても印度の産業に大躍進の機を與へたものは歐洲大戰のほつ發である。

大戰が始まると同時に英國政府は所謂工業動員を行ひ、全國の工場を軍需品製造に充てた結果、從來の商品を製造して印度へ送ることが出來無くなつた。加之、其の商船も皆軍用船に徴發されて印度航路の船腹が不足と爲り、且つ獨逸潛航艇の出沒の爲め印度との連絡は非常な困難に陷つた。之は要するに印度の産業に對する强大な壓力が除去された譯であつて、印度の工業は此の機會にたい頭せざるを得無かつた。特に英國に取つては實に重大な危機が此の間に包藏された。それは印度に於ける有ゆる不平分子が此の際合同して英國から離反せんとするに到つたことである。本來社會階級の立場から論ずると、英國企業家に對抗して印度産業の振興に與つて居る印度資本家と、彼等の工場に使はれて居る勞働者、及び地方農業に使用されて居る日雇人達、即ちかのガンヂー等の復古主義者の運動に追隨して居る者との間には利害の反ばつが存在して居る。併し、外來の支配者たる英人のきはんから脱して、印度人自身の思ふがまゝの政治及び社會生活を創造しやうといふ考に到つては二者同樣であつた。此の同一の觀察點よりして、彼等は英人を共同の敵としてヒマラヤ山南の聖地たる印度より驅逐するの氣勢を示したのである。獨逸を敵として死活の戰に沒頭して居る最中、印度の此の狀勢に觀て、英國の當路者が驚いたのは無理ならぬ次第である。併し國際的權謀にかけては古今獨歩と唱へられるアングロ・サクソン人は、此際にも印度國民運動者の機微を捕へるに鈍で無かつた。即ち彼等は印度綿業を保護する爲めに輸入稅を三分五厘にするといふことを條件として、印度資本家たる國民運動者に妥協を申込んだのである。單に之れ丈の藥が印度國民には非常に利いて、資本家のみならず極左黨に到るまで英國政府の計畫を助け、義勇兵の募集並に一億ポンドの巨額を自由貢物（Free Gift）として英國に送ることに盡力した。之れ丈でさへ英國に取つては非常な成功である上に、彼等は尙ほ之に依り、印度資本家と無産階級者との利害の差異を明確にして、兩者の投合を一時的なりと阻止することを得たのである。之と同時に、此の保護稅の設置は印度に取つても非常の効果を現はし、其の翌年（千九百十七年）には株式組織の織物工場の資本金は二千四百五十萬ポンド、工場數二百七十六と爲り、外に千八百の綿繰工場があり、又個人經營の織物工場は非常な數に上つた。斯くて共

年から印度は綿織物に要する綿絲の全部を自產し、又綿織物消費額の半ばを自產する樣に爲つた。語を換へていふと、國產綿製品は戰前に於ては輸入額の四割二分に過ぎ無かつたものが、戰後に到つて九割四分六厘に上つた。尙ほ此年印度は壹千八百十一萬ポンドに價する綿織物　六億一千四百二十一萬餘ヤード、及びばく大の市價に相當する綿絲を製造した。

千九百十年から同十四年に到る間、會社の登錄された資本金は每年平均約千二百萬ポンドであつたに對し、平和回復の翌年は一億八千三百萬ポンド、其の次年は一億ポンドの巨額に上つたとへ實際拂込額はこれ程で無かつたとはいへ、兎も角戰時中から印度人の中に商工業の企業熱が如何に盛　爲つたかゞ知られる。それも其のはずの事、賃銀の極度に安い勞働者を驅使し、殆ど、隨意に手に入れられる安價な原料を使つて製作することであるから、其の利益は寧ろ信用の出來ぬ程であつた。例へば千九百二十年度に於ける主要紡績會社の配當金は平均十二割であつたが、三十六割に上るものも稀じ無く、中には實際の利益が五十割に近いものもあつた。黃麻(ジュート)製造會社の平均配當金は一層高率であつて、十四割に上り、カルカッタに在るフーグリ工場の如きは四十割も拂つた。他の產業例へば茶の栽培製造、石炭及び金の採鑛、又は製革會社の如きは、之れ程では無かつたけれども、矢張り相當の利益を擧げ、炭鑛會社の平均利益額は九割であつた。從つて此等の利益により、企業家が戰時及び其後に暴富を積んだことは想像するに難く無い。

綿絲並に綿製品製造高の消長に就いてはこゝに一言したが、歐洲大戰の刺げきは、其の他の產業をも利じゅんの奔騰と共に其の生產高を激增せしめた。其の主なものは黃麻であつて、千九百十七年中に工場數は七十八に增えて資本金は千三百二十一萬ポンドと爲り、戰前に比べると三十一倍强に殖えた。毛織業も亦發達して其の生產額は戰前の四十萬ポンドに對し、約四倍弱の百四十萬ポンドと爲つた。又石炭は約千八百萬トンの消費に對して千八百二十萬トンを產出し、戰前に比し二百萬トン多く產出して居る。商業も亦之に比例して盛と爲り、其の商人は海外に發展し、今や蘭領印度、馬來半島、東方アフリカ、アフガニスタンの市場に於て歐米並に日本の競爭者と爲り、或る程度まで支那の市場に侵入し、主として精製品及び半製の木綿類を取扱つて居る。今左に歐洲大戰を界として印度資本家の投資額が、政府並に地方自治體の公債類に減じて、紡績、黃麻製造の如きものに增加したかを表に依りて示すは無益のことであるまい。

年	1914	1917	1918	1919	1920

政府公債	100	70	67	74	62
銀行	100	106	112	116	137
自治體公債	100	89	84	84	81
黃麻工場	100	311	467	383	563
紡織工場	100	132	162	167	386
毛織工場	100	106	125	125	187
炭鑛	100	136	134	157	144
茶	100	137	125	123	136
小麥製粉	100	137	206	238	406
鹽鑛	100	332	295	284	207

急場の策として絹製品に對する三分五厘の印度輸入稅を設けた英國政府は、歐洲大戰中の苦き經驗よりして、印度を英國製造業に對する原料供給地並に精製品の市場とする政策を改め、印度にも工業の發達を促さなければならぬといふ見地から、千九百十六年に印度產業委員會（Indian Industrial Committee）を設け、印度の產業を促進す可き可能性に就いて調査報告し、特に次の諸點に關して進言す可きことを命じた。

(A) 印度の資本を商工業に有益に使用するには如何なる方面に向ひ新に打開す可きか。

(B) 政府は (1)有効なる專門的助言を與へることに依り、(2)特種產業の商業的計畫上實行し得可き方策の指示に依り、(3)直接又は間接に工業的計畫に財政上の援助を與へることに依り、又は(4)印度政廳の財政計畫と兩立し得可き他の方策に依り、如何なる方面に、又如何なる方法を以て工業發達に對し有益に直接の奬勵を與へ得可き乎。

之に對する委員會の報告の要點は次の如くである。

(1)將來政府は印度の工業發達の爲め積極的に活動しなければならぬ。(2)目下無益に農業に浪費されて居る勞働力を自由に工業に轉換せしめる爲め、現代の農業組織を印度にも適用せしめなければならぬ。(3)大學の初等教育の普及を計り、(4)專門的及び機械的練習に對する組織も亦普及されなければならぬ。(5)政府の財政的援助を與へても工業銀行の設立を促進しなければならぬ。(6)印度の財政的安定を保證しなければならぬ。(7)要するに政府は印度工業に對する無干涉

の主義を棄て、之を發達せしめる爲めに氣力ある干渉を爲す可きである。と。

モンタギュー・チエルムスフオードの改革は、戰後猛烈に起つた印度の獨立運動の安全辨として計畫されたものであつて、英國政府の言明に依れば、之は將來印度を完全な自治に進める第一階梯であるとのことである。從つて此の改革は政治的意義に出で、印度の政治に新紀元を畫するものであると同時に、印度の經濟的解放に關しても重大な意義が含まれて居る。該政治改革案中にも左の如き重要な說明が加へられて居る。

「產業發達に關する願望が一層明確と爲つた故、印度政廳は眞心から、原料品の地方的製造に隨伴する經濟的利益を確保せんとする印度有力者と其の希望を共にした。國家の活動に適當なる限界を附する英國の主義は、印度には適用することが出來無い。吾人は此の原則が產業に關して眞理であることを信じ、又若し印度の利源が開發さるべきものなる以上、政府は活動を開始す可きものなるを信ずる。吾人は進步せる團體政策の間に、苦々しき感情あることを不思議に思はず無い。彼等は政府の補助指導無くては、產業發達に就いての彼等の計畫を遂行することの不可能なるを自認して居る。今回の大戰は新しき地位を創造した。敵國からの輸入の禁止は、國內生產を以て外國品に代位せしめる機會を、印度に與へるものとして歡迎された。戰後、印度がいやしくも諸外國製造品の投げ賣市場とならざる限り、此等諸外國民が其の政治的勢力と密接に關係ある經濟市場に對して、猛烈に競爭すればする程、印度の產業發達の必要は倍ほ一層重大と爲るであろう。印度は工業國としての地步を占めることの出來る樣に、英國政府が援助を與へることを要求する權利あるものと適確に考へて居る。孰れの點より觀るも、單に印度の經濟をして安定ならしめる爲め許りで無く、整備せる現代的國家として世界の前に立たんとする印度國民の熱望を滿足せしめる爲め、及び放任して置けば專ら政府の役人若くば僅少な職業に集中せんとする印度青年の橫溢せる元氣の出口を準備する爲め、並に目下不生產的に置かれて居る資金を全社會の利益に供給する爲めには、產業發達の進取政策が熱心に要望されて居る。英帝國の利益としても、向後印度の利源が一層利用せらるべきを要求して居る。吾人は產業化せられた印度が、英帝國全體の國力に齎らす可き勢力の增大を測定することが出來ぬ。單純な貿易商人は製造業の新しい各源泉を、恐らく彼等自身の利益の源泉を減殺するものと考へ

る樣に傾いて居るらしい。併しながら、新に富を開發する毎に、國民全體の購買力を增大するものである。今回の大戰は軍事上より觀た經濟發達の必要なることを最も明確にした。今後、工業的に發達した社會の生產物は、印度の自然的利源の開發が概ね軍事的必要の實質と爲ること程、軍需品のカタログと一致する。吾人は此の思想が印度の政界の領袖に取り當然のことであり、且つ彼等が軍事上の需要を自給する印度を見んと期待するものなるを信ずる。英國政府は印度の產業的發達を促進する爲め責任を負はなければならぬ。

吾人は印度の資本が、印度に於て安全且つ有利に投資される時期が實現されることが、將に來たらんとして居ることを保證されて居る。此の目的は銀行及び信用の便宜を擴へする準備に依り促進さるべきものである。僅少なる個人の野心に局限されず、印度全體の利益の爲めに結合して使用される印度の資本及び勞力を見んとする一般の希望に基く產業に對する眞の熱望は、吾人に取りては最も幸福な吉兆　觀られる。」

此の說明を「馬蹄釘一本だも植民地では製造せしめぬ」と言つた當時と比較する時、吾人は實に隔世の感に擊たれざるを得ない。又斯くの如き根本政策の變化に伴ひ、各種具體的施設が行はれた結果、印度の產業特に工業は長足の進步を爲し、其の結果は忽ち貿易の上に現はれ、千九百二十年に於ける貿易總額は六億ポンドに達して、二十年前の六倍に上り、主要產業たる綿絲工業の生產高は、戰前の年に比して實に二十倍に達した。此の驚く可き印度工業の發達は、一面には富の分配並に集中に不公平を來たして早くも社會的不安の端を發し、機敏な英國政治家は此の貧富の隙に投じて、印度獨立の氣勢を裂く方策を廻らして居る。

第八章　印度國民運動に交錯する社會的不安

本來「印度の不安（インヂアン・アンレスト）」なる言葉は、死の如き沈滯より現代の政治的自覺に目覺める印度國民の躍動に對して、英人が其の自我的見地から附した名稱である。卽ち國際線上に起つた國民運動の波動である。從つて之が起源、經過、思想其他の內容條件を述べるに當つても、專ら印度と英國との平面的關係を基準として觀察され、且つ此の觀察は正當であつた。然るに歐洲大戰後に於ける勞働階級の自覺てふ世界的大潮は印度の岸を洗ひ、此所にも上下垂直の波動を起して、印度の國民運動は全然新なる意味を加味さるゝに到つた。換言すれば、從來專ら政治的不安（ポリチカル・アンレスト）であつた印度の國民運動は、こゝに初めて社會的不安（ソシアル・アンレスト）の要素を含むことゝ爲つた。而も此の勞働者の優勢なる運動は、一面印度の國民主義者に利用せられると共に、他面には機敏なる英國政治家の注視する處と爲つて居る。故に印度の國民運動の異名たる「印度の不安（インヂアン・アンレスト）」に關する批評を述べるに際して

も、從來の如く單に之を政治的不安の方向から觀察するは未だ點睛の功を遂げたものとは言はれ無い。必ず之を社會的不安の實相に照らして論議する所が無ければならぬ。

少數なる英國人が、古い文明と固い社會組織とを有する三億餘萬の印度人を征服した時、其の政治的支配の地位を維持し、且つ經濟的さく取を持續して行くには、何うしても土着の印度人を其の手先としなければならなかつた。そして此の手先たる機關の効果を發揮せしめるには、此等の印度人に英國の言語、制度、習慣等を知らしめ、英國人の意思を自由に會得せしめる必要があつた。之が抑も英國風の教育が印度に輸入された起源である。此の教育を受けた印度人は、英國人の官廳、會社、商會等の書記通譯等に採用されて高額の俸給を受け、或は辯護士、醫師、新聞記者等の自由職業に從事して、是れ又多額の收入を得た。此等の知識階級は英人に眞似たぜい澤な歐風の生活を營みながら、收入の餘りを蓄積してばく大の資產を造つた。尙ほ此の外に、英人に依り開かれた通商に附隨して、英國製品を買入れ之に對して印度の原料品を輸出する商人等も一朝にして暴富を致すことを得た。此等が抑も印度現代のブルジュア階級の起源である。奪りやく政策に依り印度古來の工業を破壞して企業家の地位を奪ふた英人は、他面に於て自己の便宜上よりする政策の結果、知らず識らずの間に、新なブルジュア階級を印度の地に發生せしめて居た。此等の印度人は其の富を有利な事業に投資することに努め、千八百八十年には三百八十萬ポンドの資本を持つ五十八の紡織工場と二百二十四萬ポンドの資本を持つ二十二の黃麻(ジュート)工場とを經營し、約七萬の職工を使役し、其他銀行並に株式會社に投資された金額は九千萬ポンドに上つた。然るに英人は其の傳統政策として、印度の工業權を一手に自己の手中に收め、印度人を專ら農業其他原料生產業に固着せしめる方針であつたから、印度人の鐵道、鑛山其他有利な事業に着手することを排斥し、且つ英國製各種機械の印度輸入に重稅を課して、勞銀の低廉なるに拘らず、同一工場を設立するに印度では英國の四倍以上の經費を要する程の困難に陷らしめて印度工業の發達を妨げた。從つて此等のブルジュア、就中商業以外の職業に依り富を得た知識階級は、其の富を抱いて自由なる投資の天地無きに苦しみ、已む無く政府保證の公債を買入れるか又は土地に投資したが、公債利子は年三分若くば三分五厘以上に出でず、土地の收益も亦甚だ低率であつた。故に彼等は英人ブルジュアに追隨し、其の被護の下に新な地位を獲得したものであるに拘らず、英人の爲めに其の前途をふさがれて居るを觀ては、當然の歸着として英人に對する局面打開の運

動を起さざるを得無かつた。それで千八百八十年に、彼の英人オクタヴイアン・ヒユームが印度人の自由の爲めに、印度國民議會を開設した時に、其の傘下に馳せ參じた者は、皆此等のブルジユア達であつた。從つて國民議會當初の目的は、其の公宣した如く、印度の政治に印度人を參加せしめることを期するといふ政治的意義と共に、英人の經濟的獨占區域を限定し、印度人の爲めに企業の新天地を開くといふ經濟的目的が、其の主なる意義を爲して居た。今日印度の國民運動の主潮を爲して居る印度國民議會は、斯くして經濟的發展を希望する資產階級に依り、其の第一聲を擧げたものである。其後中流無產階級が急進的國民運動を起すに到り、彼等の採る方法は全然此等ブルジユア達と其の趣を異にした結果、彼等はブルジユアの國民運動を罵つて、ダダバーイ・ナオロジーとゴケールとの二人を除く國民議會派の連中は、印度全體の得失よりも自分達の利害の爲めに運動するものであると言つた。此の評語は確に一面の眞相を道破したものではあるが、併し時世の推移と境遇の相違とが、二者の思想並に行動に差異有らしめたことは、蓋し已むを得ざる成行と觀る可きであろう。

英國では產業革命の結果其の職業を奪はれた手工業者は、皆工場工業に吸收されて資本家に對する賃銀勞働者と爲つた。印度でも、產業革命の餘波を正面に受けて、紡績其他の手工業は甚大な打擊を蒙り、倒產失業する者無數であつたが、英國に於ける如く、此等の失業者を吸收する大工業が起ら無かつたから、彼等の多くは田舍へ散つて農業者に爲つた。十八世紀末には從來の手工業に從事して居た者は、總人口約三億の二割五分卽ち七千五百萬有つたものが、上述した理由で激減して總人口の一割五分卽ち四千五百萬に爲つた。卽ち約三千萬の手工業者が農に歸した譯である。是れ丈の多數人口が短時日の間に田舍へ流れ込んだ結果、左無きだに人口過剩に苦しんで居た印度の田園は、之が爲め食料の不足、勞銀の低下及び失業等の爲めに恐慌をひき起した。而も英國の政策は、繰返へし述べる如く、印度を英國工業の原料品供給地と爲すと共に英國製品の市場と爲すに在つた爲め、彼等は通商網を印度全體に擴げて其の國民の福利をさく取することに努め、其の結果印度の農民生活は非常な變化を受ける樣に爲つた。

千九百十一年の統計に依ると、印度總人口三億二千百萬の中、村落及び人口五千以下の町に住するもの、卽ち田舍生活者の總數は二億八千萬である。又此の二億八千萬の中二億二千四百萬が農業に從事し、殘りの者が地方の手工業、運輸、商業等に從事して居る。此等農民の內約八百五

十萬人が、自己の占有する土地を貸付け、地代其他の不勞所得に依つて祐福な生活を營み、殘りの二億千五百萬が營々として、貧困な生活の間に自然の土に親しんで居る。二十五年間印度行政の高職に在つたサー・ウイリアム・ヂグビーは、此等農民の窮狀を述べて、「農民の五割以上は、其の一生中に充分空腹を滿たすことが無い」と言ひ、又前ベンガル州知事サー・チャーレス・エリオットは「印度住民の中約四千萬人は一日に一度の飯を腹一杯食つたことが無い」と言つて居る。何故印度の農民が此程悲慘な狀態に在るかといふに、無論それは印度の土地がやせて居る爲めで無い。その證據には、全世界米產額の四分の一を產するベンガル州でも、矢張り其の農民は貧困に苦しんで居る。又必ずしも印度の農民がらい惰であるといふ譯でも無い。要するに產業組織の缺かんに歸せなければならぬ。前述べた二億千五百萬の農民、卽ち自己の勞力に依つて實際耕作に從事して居るものを、其の經濟狀態に依つて分類すると、

一、自作農――但し彼等は印度の土地制度上土地の所有權は有して居無いけれども、其の所得が一家の需要を充して尙ほ賣却する餘分あるもの。

二、小農――生計の支持を、半ばは地代を支拂ひ借りて居る土地の生產物に依り、半ばは勞銀に依るもの。

三、土地勞働者――專ら農業に使用され其の勞銀に依り生活するもの。

尙ほ此の外に漁業、狩獵、牧畜及び伐木業等に從事して居るものが約七百萬人存在する。今此等の七百萬人と地代に依つて生活する八百五十萬人と、及び土地勞働者の四千百萬とを、印度農民總數から除いた一億六千七百萬人が、前述べた自作農及び小農卽ち直接土地生產に從事して居るものである。又此等自作農の家族數は約五百萬戸であつて、一戸平均二十エーカーを耕作し、小農の戸數は約二千三百萬戸で一戸約八エーカーを耕して居る。元來印度の土地制度は、ゼミンダリ組織（Zemindari System）といつて、國家が土地收入を、大地主に對して永久的若くば暫定的に率を定めて徵收し、大地主は更に之を自作農及び小農に貸付けて、大地主が收稅吏と爲つて地代を徵收する地方と、ライオツトワリ組織（Ryotwari System）と言つて、國家が收益率を定めて直接に耕作人から租稅を徵收する地方とに分れて居るが（前者が英領印度の五割二分、後者が四割八分）孰れも地代、租稅、利子等表面に現はれて居る入費の外に、地主、收稅吏等に强要される寄附其他隱微の諸掛りが多く、自作農及び小農は收支償はぬ狀況に置かれて居る。從つ

て彼等の多數は、農產物から其の生產費を除いた餘剩を蓄積して資產を增すなどといふ餘裕は無く、却つて入費の調達に賣り急ぎするは尙だしものこと、田面のままの賣買、(靑田賣買)若くば擔保借入をして、次期の種子代を作るは日常のことである。此際彼等の生產物を、殆ど生產原費同樣の低價を以て買取り、若くば彼等に年十割以上六十割の高利の資金を融通するものは多く地方の商人である。抑も目下印度の經濟生活に於て暴威を振ふて居るものは、此等の地方商人であつて、彼等は英國の大工業組織と共に、印度農民の膏血を搾る磨臼石の樣なものである。そして此等の商人も亦、英國の產業が印度に侵入した時、印度農民をさく取する機關として發生した產物である。產業革命の結果、英人の大工業組織で生產された廉價な製作品が印度へ齎らされると同時に、同じく產業革命の產物たる鐵道が印度の都ひに通ずると共に、大小の汽船が印度の海岸並に河川を上下して、印度全土は忽ち現代式の通商網の下に置かれ、英國の多額生產品は此の通商網に依つて印度の隅々までも齎らされた。之が爲め河川の要津に新な忙しい通商都市が起ると共に、此等英國商品を賣買する新な商人階級が出來て、彼等は非常な利益を占めた。然るに一方農民の方では、前述べた樣な窮地に置かれて居る爲め、此等の商人から現金を融通せざるを得無くなつたが、本來此等商人は英國產業の機關たる地位に在る關係上、農民から提供する抵當物に就いても、米又は麥の如き食料品よりは、棉花、甘しよ、豆種の如きものに對して、卽座に且つ多額の金を融通した。之は英國の產業が、印度を以て其の工業原料の供給地とするを便宜とするが爲め、從つて印度商人も此等英國向き工業原料の買付を望む樣に爲つた爲めである。此の結果、從來印度の經濟單位であつた村落自給の制度は破れて、都市を中心とする經濟單位に擴大されると共に、之れまで使用價値に依つて賣買されて居た印度の農產物は、之れ以來主として交換價値に依つて支配されることゝ爲つた。之が印度の國民生活の大變化で無くて何であらう。ベンガルの水田は變じて黃麻栽培地と爲り、パンジャブ其他高原地方の麥畑は綿畑に變じた。印度の農民は此等の工業原料を收穫と同時に、或は其の以前に商人の手に渡し、其の代價として受け取つた金を引き當てに、ランカシャー製の綿製品其他の英國工業品を買はせられる。前印度軍司令長官サー・オームール・クリーフ (Sir O'Moore Creagh) は此等農民の生活狀態に就いて次の樣に述べて居る。

「農民は土を掘り、耕し、そして刈り入れる。雨が降り作物がほこり、そして刈り入れられる。

然るに作物が取り入れられると同時に、其の收穫は持ち去られる。役人若くば大地主が來て獅子の分前として之を持ち去るのである。其の殘りを商人及び村吏が持つて行き、農民の手に殘るものは何も無い。金貸、町の辯護士等が其上を絞らうとしても、最早何物も殘つて居らぬ。そこで農民は復た村の商人の處へ行き、一家の食料及び次期の種子の代金を借り入れ、家へ戻つて相變らず耕し、鋤いて今少し樂な日を待つが、それは決して來無い。」

此の評語の樣に、印度の農民は內外のさく取機關の間に挾まつて、殆ど永久に貧困の底に沈んで居る。

土地勞働者の狀態は一層悲慘である。印度全耕地の約三分の二は、前揭第二種の農民卽ち小農に分配されて居て、從つて全然土地勞働者を吸收する餘地が無い。殘り三分の一の大部分が第一種卽ち自作農の間に分たれて居るが、是れとて土地勞働者を需要する力に乏しい。茶の栽培を第一位として、大規模農業の行はれて居る約六百萬エーカーのみが、土地勞働者に對する得意場であるけれども、良好の條件で雇はれる數は、彼等の總數の約二十分の一卽ち二百萬を出でぬ。從つて彼等は每年季節を追ふて、北から南、東から西といふ風に、恰も渡り鳥の樣に職業を求めて全國を放浪する。稻作の樣に急に種を蒔き、又短時間の間に刈り入れ收穫する農產物は、一時に多數の勞働者を要すると共に、其の需要期間は一年の中に二ケ月位のものである。又此の需要期間の勞銀は、日額八ペンス卽ち邦貨約三十二錢に當り、之を需要の無い季節を込めて一年に割當てると、此等勞働者の收入は每日十二錢乃至十六錢に當る。又此の勞銀は過去三、四年間に約二割の騰貴を示して居るに對し、生活資料は約四倍に騰つて居る。

千九百十九年から同二十年にわたる一年度の印度農產物の純益總額は、十六億一千一百萬ボンドである。之は生產された總價格から、輸出額三億二千七百萬ボンド、地代に支拂はれた五千二百萬ボンド、及び租稅其他の上納金一千萬ボンドを除いた額である。今之を土地勞働者を含む全農民二億九百萬人に割當てると、一人一年所得額は八ボンドに當る。然るに印度政廳の統計に依ると、全印度住民の一年所得額は一人當り二ボンドに計上されて居る。そして此の八ボンドと二ボンドとの開きは、統計上農民の外に、更に一層貧困な多數階級が存在して、其の平均所得額が減少するといふ譯では無く、却つて他から農民の所得を吸收する階級がある結果である。近年食料品其他農產物の價格が暴騰する一方に、農民の大多數が斯くの如く、殆ど餓死の境遇に置かれ

て居るのは、大地主、商人等が前述べた如き手段で、農民の所得を奪ひ去る結果である。斯くて土地の兼併は行はれ休耕の地積は増加し、今や印度の農業は、眞の農業に投資する者よりは、寧ろ土地に投機するものゝ手に委ねられて居ると共に、貧富の間は益々隔絶して、社會的不健全は年と共に増大して居る。而も最近に至るまで、特に農民の不平の聲を聞かなかつたのは、幾千年來馴致された姓階(カスト)の制に伴ふ運命に盲從する國民性に依つたものである。然るに印度も亦世界の風潮を免れることは出來ずに、農民は餓死の境遇より自覺の目を開きかけた。

醸つて工業方面を觀察するに、印度の現代工業は左の種類に大別することが出來る。

一、運輸業――鐵道、電車及び河川航行を含む。
二、鑛　山――石炭、金、鐵、マンガン、雲母。
三、纖維業――木綿、毛織、絹、黄麻。
四、電氣及びガス。
五、製茶業。

右の鐵道及び鑛山中の特種のものは英人の獨占にかゝる。

此等の現代工業の中心地といふ可き都市の主なものは、造船業、鐵道工場、ガス事業及び黄麻工場を有するカルカツタ。港灣、ドック、鐵道工業及び紡績工場を有するボムベイ。紡績業のアーメダバド。毛織工場及び製革工業のコウンプール。鐵道工場及び官營武器工しようを有するジヤツブルプール。機關車製造業の中心たるジヤマルプール。炭鑛の中心地たるラニグンジ。彈藥及び武器製造の中心地たるコシプール。イチヤプール。製米工場及び港灣のラングーン。港灣及びドックのカラチ。マドラス、チツタゴン。及び製茶業のアツサム並にダーヂリン等であつて、其他人口五萬以上の都市は總て四十五を算する。英國人が對印度政策の根本義として、印度に於て製造工業の發達を許さ無い方針を採つたにも拘らず、十九世紀末以來前掲した各種工場がぼつ興し、印度從來の手工業の荒廢した一角に新な意義の都市が煤煙と共に起つた。そして此等の都市に新な住民を吸收した。此くの如く工業のぼつ興する一方には、農民の多數は餓死に近い貧窮の狀態に置かれて居たので、此等農民が鍬を棄て田園に背いて都市に向つたのは異とするに足らぬ。其の結果、千九百十一年には農業及び其の附屬事業に衣食する者の數が、印度全人口の八割七分有つたものが、今日では七割二分に減少して居る。然らば工業勞働者が農民に比し多幸の境

過に在るかといふに決して左樣で無い。彼等も亦無產階級の苦みを滿喫しつゝある。

十九世紀末の統計に依ると、印度に於て工業勞働に從事する總數は一千五百萬人で、其の家族を加へると三千三百萬卽ち印度全人口の約八分五厘に該當して居る。此の中都市勞働者が何れ丈けの比率を占めたかは明かで無いが、現世紀の初頭に於ては、現代大資本組織工業の從業者は、全工業勞働者數の約一割五分卽ち一百五十萬口で、家族を加へて三百三十萬人と概算せられて居た。それでその殘餘の一千三百五十萬人（家族を加へて二千九百七十萬人）は田舍に於ける小規模工業に從事するものであつた。然るに此等の小工業は大規模の組織に依る多額生產品に壓倒されて次第に減少し、從業者の一部は都會に出て都市のプロレタリアと爲り、一部は農に歸して農業勞働者と化しつゝある。其後十年を經た千九百十一年の統計には、工業勞働者の總數は增加して千七百五十一萬人（家族を加へて三千五百三十二萬人）と爲つて居る。地方小工業が斯くの如く衰退するに觀れば、この增加は當然主として都市工業に吸收されたことが判る。尙ほ此の數字は運輸業者の二百四十萬人、家內雜役業者の二百七十三萬人、家族合計一千六十三萬人を除外して居る。大戰前三百萬强を算した大資本組織工業の勞働者は、戰後には激增して九百萬に上り、又印度の三大產業たる運輸、紡織及び鑛山に從事するものゝ總數は一千四百四十萬人と爲つた。此等の數字は印度全人口に較べると寧ろ少數といはねばならぬ。併しながら、此の數字が年と共に增加して行くことは、農村の荒廢と都市の工業化とを語るものとして注意す可き處である。加之、斯くの如き大勢に押され、父祖の鄕土を捨てゝ都會に出て來て、新米の不熟練勞働者と爲つたものが、豫期した如き收入には有り着けず、浮華な都會生活の下積と爲つて、一層無味な且つ貧窮な生活に陷るものが多いことは、印度に取り由々しき社會問題の一原因と爲つて居る。目下印度の都市勞働者の收入は月額五圓を平均高として居る。此の一事に依り、如何に彼等が貧窮なるかが推察せられる許りで無く、戰時中よりの食料品の暴騰、急激な都市集中に伴う住宅難等の爲め、彼等の大部分は都市附近の貧弱な家族に同居し、遠方の通路を朝早く出かけて、夜遲く塵にまみれながら歸つて來る。斯くして田舍から見た都會の華やかな夢は覺めて、唯現實の悲哀とぞう惡とのみが殘る。元來彼等は田舍の貧窮な生活に堪へ兼ねて出て來たものである。併しながら、田舍の農民は皆一樣に貧困である。其上同じ姓階に屬する者の間に、絕つ可からざる友愛の情緒が結ばれ、相ひ賴り相ひ扶けて居る。然るに都會に於ては貧富の懸絕が歷然と目に映ずる。

馬車を驅り自動車に乘つて、豪奢な邸宅に出入するものと、塵あいの中に勞苦して、日々十幾錢を所得するものとの差が、餘りにてき面に對照される。而も舊知の彼等を慰めるものとては無く、唯默々として之を免る可からざる宿命とあきらめて居たのである。然るに大戰役後の風潮は彼等に姓階以外貧富の階級あるを知らしめた。此の階級的意識に基いて、彼等は自我の主張を爲し始めた。

英國人が印度經營の便宜上、英國風の教育を印度人に施し、之が原因と爲つて印度人の間に新なブルジュア階級が發生し、彼等に依り印度國民議會が組織されたことは前に述べた。然るに英國風の教育は更に別な色彩を帶びる危險な分子を發生せしめた。無產知識階級の發生がそれである。英國風の教育を受けたもの丶數は、當初は其の需要を滿すに足ら無かつた。從つて彼等は重寶がられ、有ゆる好機を與へられて、裕福な資產階級に發達することが出來た。然るに此の新教育は忽の間に廣く印度人の間に傳播され、特にベンガル州ではカルカツタ、ダツカ及びチツタゴン等の大都市はいふに及ばず、田舍の小さい町や村に到るまで、英語に依つて英國の制度、思想及び現代の科學を教授する學校が建てられた。そして此等の學校に入る者の大多數は、姓階の上から言つても將た富の上から言つても、社會の中流の下位に居るもの丶子弟が多かつた。彼等は其の新な智識を有するが爲め、世間からバードラロク即ち「智識ある人々」と呼ばれて一般の尊敬を受けた。尊敬は受けたが彼等は貧乏であつた。官吏、會社員、醫師、辯護士等の智識職業は既に皆供給過剩になつて、彼等に衣食の道を與へる餘地が無かつた。智識有つて意を得ざる者の道程は不平より反抗、反抗より破壞へ奔るを常とする。バードラロクも亦必然の徑路として、現代の組織即ち「英國統治（ブリチッシ・ラージ）」に對して不平の氣を懷き初めた。此の機運に投じて反英運動の激成に着手したものが、彼のチラークやバリンドラ・クマール・ゴーシュ等の國粹反動主義者である。

國民議會に屬するブルジュア等は、英國の印度統治の組織を改め、印度人にも參政の道を開けと言ひ、又經濟上に於ける英人獨占の範圍を縮少して、吾等にも產業開發の自由有らしめよと言つた。彼等の理想とする所は英國風の立憲代議制を印度に移植し、自分達はランカシヤーのブルジュアの如く之に參政することであつた。そして彼等は此の理想を英國帝冠の治下に、ユニオン・ジャックの旗下に實現せんとするものであつて、印度の分離獨立を期待するものでは無かつた。印度幾千年來の制度組織より離脫し、一氣に西歐の現代的社會を實現することに努めた點か

ら觀れば、國民議會派のブルジュアは急進的であり、革命的であつた。併しながら、又彼等が英國の宗主權を尊重し、唯其の下に制度の改善を行うことに依り、自己主張の實現を企圖した點から觀れば、彼等は改革者であり、漸進主義者であり、穩和派であつた。然るに無產智識階級の反英主義者の主張行動は、全然其の趣を異にして居る。彼等も亦英國風の敎育を受けはしたが、而も彼等の受け入れたものは、英國の議會制度でも無ければ又マンチエスター派の經濟思想でも無かつた。彼等は英國の國民的自尊の風に染まつたのである。否、一層端的に言へば、祖國の爲めに血を流した英國志士の氣節を學んだのである。彼等は英國の憲法政治の下に榮えるよりは、印度國有のヴエダ文明の光に蘇らんとした。故に彼等は國民議會派に對して國民主義者と呼ばれて居る。印度の文明を泰西の文明と比較研究した後、印度文明の精華は精神的に在るといひ、又此の精神的文華を以て世界を征服せよといつたベンガルの先覺者ヴイヴエカナンダの遺訓を、彼等は金科玉條として奉戴した。現代科學文明を基礎とする物質的幸福は、最早彼等の意とする所で無かつた。彼等の或る者は「ヴエダに還れ」と言つて國粹文明の光を慕ひ、又或る者は破壞の女神カリの名を呼んで洋奴の齎らした現代「惡魔的文明」の掃とうを志し、一齊に「オム・母國よ」の叫を擧げて、印度に於ける英人政治の顚覆を目的とした。彼等は國民主義者にして反動主義者なると同時に革命家であつた。國民議會派と國民主義者との差は、斯くの如くに對照された。要するに國民議會派のブルジュア達は「英國統治」の產物である。從つて彼等の利益の增進は「英國統治下の和平」の下に於てのみ達成される。彼等が英國民の立憲政治をを、う歌し、人民の福し、民族の向上は唯文化的政府の治下に於てのみ現實されるものであつて、斷じて封建貴族政治や專制王權や、又は宗敎的反動乃至宗長的保守思想の下に育まる可きで無いと言つたのは、印度從來の組織に對する根本的否定であつた。そして此の文化的政治なるものは、要するに代議政體であつて、而も印度の爲めに代議政體を樹立するには、現下の如き低級な社會生活を爲し、且つ固ろうな宗敎的迷信の下に在る印度人には企及す可からざるところである。宜しく英國政府に對して印度人の權利を主張し、其の容認を促して印度の經濟的地位を向上し、以て代議政體の施行を期す可きであると。此の主張に基き彼等は年々クリスマス前後に開かれる大會に幾多の事項を討論決議して、之を英國當路者に提議した。之を觀て國民主義者はちよう笑して言つた。議會派の要望する所は餘分ぜい澤な巨富であり參政の權能である。吾人の關する所は目前の死活である。